

# 修羅の願うは英雄譚

鎌鼬

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

だからー！ーどうか聞かせて欲しい。

英雄譚を語っておくれ、声枯れるほどに叫んで欲しい。

それを、俺は望んでいるから。

# 目次

鍋パーティー	123
模擬戦・2	113
模擬戦	99
模擬戦前・2	88
模擬戦前	79
剣客と幼女	70
悲報、友人が変態になっていた	57
暁学園・2	48
暁学園	39
月影獏牙	28
スタート	16
前日譚	1

新たな季節	133
新たな季節・2	140
新たな季節・3	147
ガンジー怒りの解脱	159
ガンジー怒りの解脱・2	168
漣	176
漣・2	185
漣・3	194
後始末	205
選抜戦	215
選抜戦・2	224
選抜戦・3	232
選抜戦・4	241

狂犬再会	癒しの日・5	癒しの日・4	癒しの日・3	癒しの日・2	癒しの日	選抜戦・11	選抜戦・10	選抜戦・9	選抜戦・8	選抜戦・7	選抜戦・6	選抜戦・5	模擬戦・5
374	367	353	341	330	320	308	300	291	279	270	258	250	

狂犬再会・4	狂犬再会・3	狂犬再会・2
398	390	381

## 前日譚

その日の夜は嵐だった。

ニュースによれば台風が直撃しているらしく、外は大雨に強風。木製のボロ屋はそれらに負けていないが耳障りな軋みを上げている。雨戸を閉ざしているので風も雨も入らないのは分かっているが、何かの拍子で家が壊れるのではないかと不安に駆られる。その不安を消すために強めの酒を割りもしないでそのまま呑みくだす。予定では朝になれば台風は通り過ぎるらしいので、眠気が来たらそのまま眠ってしまうつもりでいた。

それを遮ったのは扉を叩く音だった。雨や風、ボロ屋の軋む音に負けない程に力強く戸が叩かれる。こんな日に誰かと思い、同時にこんな状態の時に山奥に建てられている我が家に来るのだから只事では無いとも考える。

念のために「固有靈装<sup>デバイス</sup>」である太刀を顕現させ、警戒しながら扉を僅かに開ける。すると来訪者は音も気配も無くその隙間に身体を滑り込ませ、家に入ってきた。来訪者は雨除けの為か全身を覆い隠すような外套を纏っていて姿は見えない。だが先程の身体を滑り込ませる動きと気配の隠し方から只者では無いと分かった。

「……よお、久し振りだな新城<sup>しんじょう</sup>」

「その声……蓮葉か？」

来訪者の正体は友人で「伐刀者<sup>ブレイザー</sup>」でも無いのに異常な強さを誇るキチガイの漣蓮葉<sup>さざなみれん</sup>だった。声から判断したので本人なのか判断が付かなかったが、外套のフードをズラして顔を見せてもらい、本人なのだと確信する。

それに安堵し、「固有靈装<sup>デバイス</sup>」を収納しようとして、蓮葉に止められた。

「待った、それはそのままにしておいて……解放軍<sup>リベリオン</sup>」に追われてるから」

「解放軍<sup>リベリオン</sup>」に？」

「ブレイヤザー 伐刀者」を選ばれた新人類だとし、それ以外の普通の人間を下等人類と位置付けて支配しようとするテロリストの名前を聞いて緩めていた警戒心を最上級まで引き上げる。

「そう。この嵐で何とか巻いたけど、直ぐに追いかけられると思う」

「リベリオン 解放軍」に追いかけられるなんて何やらかしたんだよ?」

「何でやらかしたことが前提なんだよ……知らない。子供産んで自宅療養してたらいきなり奇襲かけられた。お父さんは殺されたし、旦那も足止めするって言って別れたつきり。多分……もう死んでる」

「リゅうじ 龍二がか!」

「リベリオン 流石にあの人でも リベリオン 解放軍」の使徒数十人を相手にするのは無理だから。でも半分くらいは道連れにしてるだろうけど」

漣家に婿入りした友人——旧姓琢磨たくま龍二りゅうじが殺られた事に驚きを隠せなかつたが、蓮葉の言葉で納得してしまう。龍二の強さは知っているが、流石に リベリオン 解放軍」に与する ブレイヤザー 伐刀者」数十人を相手して生き残れるとは考えられない。

「……だったら何でここに来た？身を隠しに来たにしては龍二を連れてこないのはおかしい」

「言つただろ？子供を産んだつてな——私が囹になる。だから頼む

、この2人を守ってくれ」

そう言つて蓮葉は外套を脱ぎ捨てる。その下には産着に包まれた2人の赤ん坊が襁の様な物で蓮葉の身体に縛り付けられながら眠っていた。まだ幼い、恐らくは生後一月二月と言つたところ。

「リベリオン解放軍の狙いはこの2人だ。何せ、こいつらは漣わたしたちが望んだ漣のブレイザー伐刀者だからだからな」

「そうか……この2人が……」

蓮葉の家の事情を知っているからこそ、この2人が彼女たちが望み続けていたブレイザー伐刀者だと聞かされて不思議と達成感の様なものを感じてしまった。

漣の歴史は長い。蓮葉によると、一番古い文献でも千年以上昔の物が見つかる程に。



そして漣の家は常に強さを求めていた。独自の理論と技術を編み出し、生涯鍛錬と言わんばかりに研鑽を続け、戦う事を日常の様に考えている生粋の修羅たち、それが漣の一族。

しかし、どういう訳だか漣の一族には「ブレイザー 伐刀者」が生まれなかった。千人に一人が「ブレイザー 伐刀者」であると言われているのに。漣に残されている家系図によれば、外部から「ブレイザー 伐刀者」を呼び出して子供を作らせたりもした事があるらしい。一般人同士ならば千人に一人の確率だが、親のどちらかが「ブレイザー 伐刀者」であればその確率は高くなるから。しかし、それでも生まれなかった。いくら強くても「ブレイザー 伐刀者」でなければ「ブレイザー 伐刀者」を倒すことは出来ない。最低ランクであるFならば戦い様によつては可能性はあるだろうが、それ以上のランクになると「ブレイザー 伐刀者」の纏う魔力を突破出来ずに勝てないのだ。

そんな漣で、ようやく「ブレイザー 伐刀者」が生まれた。漣の一族の蓮葉としては、何としても守りたいのだろう……しかし、目の前にいる蓮葉は漣の蓮葉では無く、この2人の母である蓮葉として2人の事を守ろうとしている様に見えた。

「妊娠して私みたいな人でなしが本当に親になって良いのかなんて真剣に考えてた。今

思えばあの頃は軽く鬱つてたな……でも、2人を産んで、初めて母乳を与えた時に実感したんだよ……私がこの2人の母親なんだってね」

「……だから、死ぬつもりか？」

「ああ。私はこの2人の事が可愛くて、愛おしくて、大切に仕方がない。だからどんな事をしてでも守るって決めてるんだ」

「……そうかよ」

そこまで言われて断れる筈がない。蓮葉から手渡された2人の赤ん坊を優しく、壊れない様に慎重に受け止める。子供の頃に近所の住人から子守を頼まれて以来赤ん坊には触れたことは無かったのだが、その時の事を覚えていたらしく自然に受け取る事が出来た。蓮葉の手から離れたにも関わらず、2人の赤ん坊は愚図ること無くスヤスヤと眠っている。

「ハハツ、中々豪胆だな。お前に抱かれて呑気に寝てる」

「ブレイザー 伐刀者<sup>〃</sup>で漣、しかもこの豪胆っぷりと来たら将来大物間違い無しだな。そういえば名前は決まってるのか？」

「当然。女の子の方が姉で灯火<sup>あかり</sup>、男の子の方が弟で不知火<sup>しらぬい</sup>だ。灯火は私が、不知火は龍二

が考えた」

「灯火に不知火ね、どっちとも名前に火が付いてるな」

「全くの偶然だ。教え合った時にこんな事があるんだなって笑い合った」

その時の光景なんて簡単に眼に浮かぶ。出産に疲れながら身体を起こして灯火を抱き抱えている蓮葉、不知火の事をおっかなびつくりしながら抱いている龍二。それはとても自然な光景で——もう二度と見れない光景だった。

「……それじゃ、2人の事頼んだよ」

「ああ、任せて逝け。少なくとも一人前になるまでは俺が守ってやるから」

「——ありがとう、空」

最後に悲しそうに笑いながら蓮葉は外套を被り直して嵐の中に飛び込んでいった。漣の気配遮断は一流程度では看破できない。家から離れることに蓮葉の気配は薄れ、霞み、紛れ、最後には一切感じられなくなった。

それと同時に「ブレイザー 伐刀者」としての能力——異能を発現させる。この周囲一帯の空

間を弄んでバラバラにし、ランダムに繋ぎ直す。ついでに物理法則さえも改竄する。これにより出来上がるのは不用意に足を踏み入れれば惨殺される異界。この家に辿り着く事が出来るのは“伐刀者”の異能の中でも最上位と称されている“因果干涉系”の能力カーラー因果を粉碎する程の実力者しかない。

初めは蓮葉を入れてこの異界を作り上げようとしたのだが、彼女は“解放軍”に“因果干涉系”の“伐刀者”がいると考えたのだろう。だから狙われている2人を俺に預け、自分が囷になる事を選んだ。

家の周囲が異界になった事で嵐の影響から遠ざかった。

だけど、これが蓮葉とのカーラー初恋の女性との最後の別れだと思おうと涙が止まらなかつた。

「ハッ……ハッ……ハッ……!!」

嵐の中を全力で走る。視界は大雨で悪くてほとんど見えず、強風で身体を揺さぶられ、足元はぬかるんでいて全力で走れる様な状態では無い。

それでも走る。それでも走れる。

僅かに見える光景から見えない光景を想像して頭の中に思い描き、体勢を崩されそうな強風を利用して更に加速し、直感で最善のルートを導き出して足を取られる事なく地面を蹴る。

ガキの頃は何でこんな事をしなくちゃいけなかったのか疑問だった。



私は自分の強さを理解している。普通の人間相手ならば無双出来るくらいには強い。しかし、<sup>ブレイザー</sup>「伐刀者」には勝てない。そんな存在が集団で、しかも私だけを狩る為に徒党を組んでいる。人間を追いかけやるやり方で追われているのではなく、狩人の様に徐々に追い詰められている。

舌打ちをして、体勢を整えて走り出そうとして——爆発が私から足を奪った。

「あ——ッ!?!」

突然に片足を失った事でバランスを保たずに顔から倒れそうになる。そのまま倒れても、2人はもういないから私が痛い思いをするだけで問題にならない。しかし、<sup>リベリオン</sup>「解放軍」の眼を欺く為に轟音に背中から倒れる。

「——ようやく追いついたぞ、漣の女」

暗がりから現れたのは、<sup>リベリオン</sup>「解放軍」の使徒と呼ばれる存在が着る黒字の外套を羽織った瘦躯の男。倒れる私を感情を感じさせない無機質な眼で見下している。そしてその

男の背後からも同じ様な外套を羽織った人間が、戦闘服を着て銃を持った人間がぞろぞろと現れる。

「あらあら、ただの人間の私を捕まえる為にこんなに集まるとはお前たちも暇だな」

「子供を出せ」

「話聞けよ」

使徒の男は話しかけても反応せずに淡々と私の外套を剥ぎ取る。しかしそうしても中にあるのは私の身体だけ。2人の姿は見えない。

「……子供をどこにやった」

「ハッ、教えるかよ」

教えては2人を新城に渡した意味が無い。中指を立てながら唾を吐き捨てる。他の使徒は見るからにこの安い挑発に反応したのだが、この男だけは一切反応を見せない。

「まあ良い、貴様から吐かせれば——」



「それをさせると思ってるのかよ」

挑発の為に立てた中指、それを自分の心臓に突き立てる。心臓に穴が空き、指を抜くとその穴から血が噴き出す。自殺したとこいつらは考えるだろうか。能面の様な顔をしていたのに眼を見開いているのだから、きつとりリーダー格であるこの使徒は私の本意に気が付いているに違いない。

こいつらはあの2人だけではなく、私も狙っている。正確に言えば私たち漣の身体だ。実家を強襲され、抵抗した父さんの死体を持ち帰っているのを見てそれを知った。

ここに来る途中に私の身体の中には爆弾を入れている。それは私の心拍数が一定以下になれば起動する様に設定されている。肉片1つ残さない為に、少しでも多くの「解放軍<sup>リベリオン</sup>」を道連れにする為に——そして、2人を守る為に。死ぬ事に躊躇なんてしない。

多量の出血により暗くなる視界、止まりつつある心臓の鼓動を聴きながら——

「……その意思、見事だ」

……掛け値無しの賞賛を最後に聴き、視界が真っ白に染まった。

それが今から17年前の話。誰にも知られる事なく闇へと葬り去られた前日譚。

そして17年後、無才の少年と紅蓮の少女が邂逅を果たした事により彼らの英雄譚は始まる。

故に、これは英雄譚に非ず。英雄の存在を望みながら自身では英雄になれないと悟り、英雄を望んだ1人の修羅の物語。

だからーっーどうか聞かせて欲しい。

英雄譚を語っておくれ

声枯れるほどに叫んで欲しい

それを、俺は望んでいるから

## スタート

「……ふう……何度観ても慣れんな」

意識が現実へと帰って来るのを感じながらさつきまで観ていた光景……顔も写真でしか知らない母親の最後の感想を口にする。中指を立てて自害、そして盛大な自爆だった。流石は俺の母親、やっぱりキチガイだった。

母の死から17年経った。赤ん坊で当時の事を何も知らなかった俺だが立派に成長し、育て親であるオヤジから当時の事を聞き、そして当時を観る事が出来る程になった。何故<sup>おれたち</sup>漣<sup>リベリオン</sup>が「解放軍」なんて組織に狙われる様になったのか、理由は今になっても分からない。暇をみつけて世界を彷徨って「解放軍<sup>リベリオン</sup>」を物理的に潰しても、相当に下の地位なのか当時の事を知る者は誰もいなかった。

まあ、理由なんてどうでも良い。あいつらが何を考えていたのかなんて知れたら良い

程度のものだ。

理由はどうであれ、漣の一族は俺を残して全滅した。双子の姉であつた灯火姉ちゃんも10歳の時に病死している。

——故に、報復を。復讐を誓う。

殺したのだから殺されたとしても文句は言えない。死に際に何やら喚いている事もあるのだが、そんな事は知つた事ではない。勿論その考えは俺にも当てはまる事を理解している。なので俺の最後も俺が殺してきた連中と似た様な物になるだろう。

その時は精々、笑いながら死んでやろう。母さんのやつていた様に殺した相手に向かつて中指を立てながら唾を吐き捨てるのも悪くは無い。

今度「解放軍」を見つけた時はどうしてやろうかと考えながら気分転換にタバコを吸っていると2つの気配が近づいて来るのを感じた。1つはいつも俺のそばにいる見知つた気配、もう1つは初めて感じる気配なのだが……気配だけでも強いと分かる。た

だ強いだけではなく、数多くの戦いを経験した事が分かるほどに良く研鑽された気配。これ程の気配はオヤジに武者修行と称した世界旅行に連れて行かれた時に出会ったあの剣士くらいか。いい歳してコスプレみたいな格好をしていたので良く覚えている。真っ直ぐにこちらに向かって来るのは分かっていたのでその場でタバコを吸いながら待っていると、2人の人間が視界に入った。

1人は少し目つきの悪い白髪の少女。山を駆け回っていたのか泥だらけだが息は一切乱れておらず、汗1つかいていない。もう1人は山に入るのに相応しく無いスーツ姿の女性。彼女もまた少女と同じ様に息を乱れさせず、しかもスーツに汚れ1つ付けずにこの場所まで来ていた。

「……ししよく、お客様を連れて来たぞです」

「おう、ありがとうな火乃香ほのか」

白髪の少女……新城火乃香に礼を言いながらその場から立ち上がる。彼女はオヤジと一緒に世界旅行をしている途中で潰した「解放軍リベリオン」の拠点にいた少女だ。データによると彼女は「解放軍リベリオン」の使徒にすべく人工的に作り出された人間の様だった。

しかし洗脳などはされておらず、しかも一般的な感性を持っていたのでどうしようかとオヤジに相談したところ、オヤジは彼女を娘として迎え入れて新城の姓を与えた。関係は義理の妹なのだが、火乃香は俺の事は兄とは言わずに師匠と呼んで無理矢理とつて付けた様な敬語で話す。お兄ちゃんは少し寂しいです。

「えっと、覚えがないから初対面だとは思うけどどちら様ですかね？」

「……私は新宮寺黒乃しんぐうじくろのと言う。破軍学園の新しい理事長と言えば理解してくれるか？」

「……ああ、そう言う事」

スーツの女性「……新宮寺黒乃という名前に聞き覚えがあり、破軍学園の名称を聞いて何のためにここに来たのか大体想像がついた。長い話になる、そう考えて俺は彼女に1つ提案をすることとした。

「話が長くなりそうですし、お茶でも出しますから家に来ます？」

文曲、貪狼、巨門、禄存、廉貞、武曲、そして破軍。北斗七星を構成する名前を持った学園は魔導騎士制度と呼ばれる国際魔導騎士連盟が定めた制度の許可を受けた学園である。〃ブレイザー伐刀者〃だからと言って好き勝手に異能を使えば世に混乱をもたらす事になる。それを防ぐ為に国際魔導騎士連盟の許可を受けた学園を卒業する事で免許と魔導騎士という地位を与えられ、異能の使用を許可される事になる。

〃ブレイザー伐刀者〃である俺もその免許と魔導騎士の地位を求めて一年前に破軍学園に進学したのだが、問題を起こして無期限の停学処分を喰らってしまった。やり過ぎたと反省はしているが、やった事に関しては一切反省していない。



「……む、このお茶なかなか美味しいな」

「で、問題起こして無期限の停学喰らった俺に何の様ですかね？」

「まあそう急かすな」

急かすなと言われてもこちらとしては死活問題だ。前までの理事長の判断では停学処分が妥当だと下されていたが、彼女が理事長になった事で俺は退学する事になるかもしれないから。別に能力の使用許可くらいしか目的は無い。その気になればそんなものは必要ないのだが、火乃香の今後を考えれば免許が無くてはならない。出来る事ならばオヤジの卒業した破軍学園を卒業したいと思っっている。

「言っておくが別に新城の事を退学させようと思っっている訳ではないぞ。寧ろその逆だ。無期限の停学処分、その取り消しを伝えに来た」

「へえ……つまり、俺に破軍学園に戻って来いと？」

「ああ、出席日数の関係で1年生からになるがな」

それに関しては特にしていない。入学してから停学を喰らうまでは一月も関わらなかったので寧ろ嬉しいくらいだ。しかし、そうなるのと1つだけ疑問が湧いてくる。

彼女は どうして無期限の停学処分を喰らった問題児の俺を破軍に連れ戻そうとしているのか。

「俺の事は知っているだろうにそれで良いんですか？」

「私は破軍学園を立て直す為に理事長に就任してな。知っているとかが破軍は近年他校に比べて良いところが無い。年に一度、魔導騎士連盟が許可を与えた7校合同で主催し、一番強い学生騎士を決める武の祭典の『七星剣武祭』でも負け続きだ」

「そこら辺に関しては去年までの教師たちの自業自得の気がしますけどね」

今年からどうかは知らないが、去年までの教師たちは一部を除いてほとんどが腐っていた。家名や伐刀者ランクで優劣を決めて実力を見ていない。それは教師たちだけでは無くして生徒たちにも言えて、低ランクの者が高ランクの者に虐められているなど珍しくも無い話だった。

実践では強くないのに高ランクだからと言う理由でそいつらは威張り散らし、実践では強いのに低ランクだからという理由でそいつらは虐げられていた。俺の数少ない友

人の一人も低ランクを理由にまともに授業を受ける事が出来ないでいた……学園側がとって付けた様な授業を受けるための最低水準を満たせなかったから。

「その手の屑共は既に一掃してある。私の方針は完全な実力主義、徹底した実戦主義でな、危険だからと言って強い奴を遊ばせるつもりはないのさ。それどころかこんな山奥に押し込めておくよりも手元に置いておいた方が目が届いて安心出来るしな」

「実力主義で実戦主義ねえ……成る程、俺の役目はカンフル剤だと」

「そうだ。入学一月で在学中の生徒300人に喧嘩を売って倒した問題児」  
「わざわざそこを強調する意味はあるんですか……」

ともあれ、彼女の目的は理解出来た。俺の事をカンフル剤として扱い、前理事長たちの影響を受けた生徒達の気を引き締めることだろう。良い様に使われている気がするが、俺としても破軍学園に戻るのなら断る理由は無いら。

「分かりましたよ。入学式頃に戻れば良いですか？」

「手続きがあるから出来るだけ早めに来て欲しいな。何か都合が悪いか？」

「実は明日から二、三日は用事があるんですよ。それが終わったら向かいます」

「ししよー、上がったぞです」

丁度話が纏まった頃になって火乃香が風呂場から出て来た。泥だらけになっていたので話している間に風呂に入る様に言っていたのだ。タオルを首にかけて彼女は真つ直ぐに俺の膝の上に乗る。髪は拭き方が甘かったのかまだ水気を残していた。なので首にかけていたタオルを取り、髪を拭くことにする。

「あ、そうだ。こいつを連れて行きたいんですけど良いですかね？」

「そうか、確か保護者は他界したのだったな」

オヤジだが、俺が破軍学園から停学で戻って来る頃に他界している。死因は老衰なのだが、それは俺に自分が持っている剣の全てを伝える為に無理をしたからだ。俺としてはそんな無理はして欲しくなかったのだが、オヤジはその頃既に末期の癌に侵されていて遅かれ早かれの状態だった。それならば満足出来る死に方がしたいと言われれば、止められるわけがない。

俺が破軍学園に戻れば火乃香は一人でこの家に残る事になってしまう。頼れる人間

がない訳ではないのだが、彼女の経歴も考えると近くにいって欲しい。

「……分かった、その件に関してはこちらでどうにかしておくから心配しなくて良い」

「ありがとうございます」

「何の話をしてやがったのですか？」

「俺が破軍に戻る事になったから火乃香も一緒に連れて行く事にしたんだよ。ほら、ありがとうって言え」

「あざーす」

「ああ、どういたしまして」

火乃香が適当に礼を言ったにも関わらず、彼女は微笑ましいものでも見た様に笑っただけだった。どうやら俺という劇薬を投下する事を決めているのに人格者らしい。

友人以外に興味を惹かれる者などいないと考えていたが、彼女がいるのなら破軍に戻るのも悪くはないと考えてしまった。

夕暮れ時になり、彼女が帰ってから俺は1人山を登って中腹にある拓けた場所にまで来ていた。そこにあるのは2つの墓石。姉ちゃんとオヤジが眠っている2人の墓だった。

「よお姉ちゃん、オヤジ。今日、破軍の新しい理事長だつて人が来て俺の停学解いてくれたんだ。近いうちにまた破軍に戻るつてさ」

墓の前に座つてするのは今日あつたことの報告。まともに学校へ通うこと無く死んでしまった姉ちゃんと、停学喰らつた事で崩れ落ちていたオヤジに破軍に戻る事を伝えに来たのだ。

「明日から月影さんに呼ばれてて、それが済んだらそのまま破軍に行く事にしてるからしばらくは来れなくなる。長期の休みの時には戻るから、それまでは待つてくれよ」

2人からの返事なんてあるわけが無い。なので言いたいことだけを言い、満足してここから見える夕暮れを眺める。

出来ることなら、破軍学園に俺がやらかした事により腑抜けた奴が少なくなっている事を望みながら。

俺の数少ない友人の1人が、あの悪環境の中で折れる事なくいる事を願いながら。

## 月影獏牙

『……泣かないで、不知火』

夢を見ている。母さんの最後を観た時の様な現象ではなく、俺の記憶の中にある過去の出来事。

痩せこけて布団に横になっている姉ちゃん、それを傍らに座って見ているだけの俺。オヤジはこの場にはいない。

『私はここで終わりだけど、わたしたち漣はまだ終わりじゃないから。貴方のやりたい様に生きて、わたしたち漣の事を世の中に教えてあげなさい』

それは死に逝く者が生きる者へと遺す最後の言葉。俺は姉ちゃんの言葉を聞いて頷くことしか出来なかった。姉ちゃんの最後の言葉を聞き流すものかと、忘れるものかと



魂に一言一句を刻み込む。

『だから——貴方が死んだ時、どんな風に生きたのか教えてね？それを楽しみにしているわ』

苦しいだろうに、呻きたいだろうに、姉ちゃんはそんな素振りを一切見せる事なく静かに笑う。

『お休みなさい、不知火』

『お休みなさい、姉ちゃん』

そして姉ちゃんは目を閉じて眠る様にして息を引き取った。僅か10年という短い生涯を終えた。

そして俺の手にあるのは黒塗りの日本刀。柄から鞘まで艶で光ることもせず、真つ黒で、どこか不吉な気配を感じさせるそれは、姉ちゃんが遺してくれた物だった。

姉ちゃんの遺した日本刀を握り、俺は静かに泣く事しか出来なかった。

「……あぁ、もうそんな時間？」

「……あぁ、もうそんな時間？」

火乃香に揺さぶられる事で夢から目覚めて現実に意識を戻す。夢で泣いていたから現実でも泣いていたんじゃないかと思い、目を擦るが欠片も濡れていなかった。過去の出来事とはいえ、姉ちゃんの死を夢で見て涙も流さないのかと自分の事を鼻で笑う。泣いている俺を姉ちゃんが見たら説教でもされそうなのだが、それでも肉親の死を夢見たのだから涙の1つでも流したかったのが本音だ。

肘掛に肘を乗せ、頬付きを突きながら窓の外に広がる景色を見下ろす。今、俺と火乃香はヘリコプターに乗せられて移動している。最初の予定では車で迎えに来ることに

なっていたのだが、交通事故が起こったらしく渋滞で迎えに行けないので代わりにヘリコプターを用意したらしい。普通ならば予定をズラすと思うのだが、ヘリコプターを用意してまで俺たちを呼び出したいとはそれだけ重要な要件なのか、それとも特に用事も無しで俺たちに会いたいのか……あの人の事だからどちらもあり得るので考えるのを止めることにする。

「そろそろ着地します」

「分かりました」

パイロットからの報告を受け、着地に備える。多少は揺れることを覚悟していたのだが、パイロットの腕が余程良かったのか殆ど揺れを感じる事なくヘリコプターは着地に成功していた。火乃香と共にヘリコプターから降り、案内も無しに建物の中に勝手に入っていく。ここに来るのは初めてでは無く、オヤジの友人が勤めているからという理由で何度も来ている。それに案内は無いが、警備がされていないというわけでは無い。

カーペットの敷かれた廊下を歩いていると、彼方此方から視線と気配をおぼろげに感じる。しかし、視界には誰も姿が見えない。正確な人数は分からないが少なくとも十数

人の人間が、いざとなったら俺たちの首を刎ねられる様に潜んでいる。流石は一流の<sup>ブレイザー</sup>「<sup>ブレイザー</sup>伐刀者」だと感心するしか無い。普通の<sup>ブレイザー</sup>「<sup>ブレイザー</sup>伐刀者」よりも育てられている火乃香でも同時に彼らに襲われれば良くて半数を殺つて相討ちになるのが精々だろう。俺でも手傷くらいは負うかもしれない。

そんな感想を抱きながら、華美な装飾が施されていないものの一目で高級品だと分かる調度品の飾られた廊下を歩いて目的地にまで辿り着く。一応ソックをして扉を開けると、まず感じたのは不自然な寒さだった。今の時期は春先なので肌寒い日もあるかもしれないが今日の天気は快晴で暖かい気温だった。

何かあったのかと思ひながら部屋の中に入ると「……そこには寒い部屋の中心にコタツを出して、そこにドテラを着ながら御節を突いている2人の男性がいた。

「……やあ、よく来たね」

「……待ち侘びたぞ、不知火」

部屋に入った俺に気が付いて片手を挙げたのはドテラを着た中年の男性「……日本

の内閣総理大臣の月影つきかげ獐牙ばくが。挙げた片手でそのままコタツの上に乗っているお猪口を持って中身の酒を飲んでゐる。

そして俺の顔を見て吐き捨てる様に言ったのはドテラを着た顔に付けた×印が特徴的な男性——黒鉄くろがね玉馬たまま。彼は一瞥しただけで御節の黒豆に視線を戻し、他の料理には目もくれずにそれだけを突いている。

「どういふ状況なのか説明して。流石に分からないから」

「今年の正月は執務で正月らしい正月を過ごせなかったからね、時間の空いた今のうちに正月を満喫しているのさ……はあ、寝正月が恋しいなあ……そんな事したら混乱するから出来ないけど」

「俺は誘われたから同席しているだけだ」

「黒豆にどハマリしてドテラを着てる時点でただだつて通じないと思うんだけど……」  
「成る程、どっちも暇人つて事です」

火乃香の邪気を含まない物言いに月影さんだけがダメージを受けてコタツに突っ伏し、玉馬は知らぬ存ぜぬの態度のまま黒豆を突いている。

「グフツ……そ、そんなところに立ってないで不知火君と火乃香君もコタツに入ったらどうだい？お雑煮も用意してあるよ？」

「マジか、お雑煮はよ」

「私はお汁粉を所望するです」

「そう言えば月影さん、俺たちをここに呼んだのってなんで？」

お雑煮と御節を堪能し、コタツに入ってダラけているところに月影さんに呼び出されて来たことを思い出した。正月を満喫したいからと俺たちを呼んだ可能性もあるのだが、そうなる王馬がこの場にいることがおかしくなる。

「ああそうだったね……不知火君、君は私の能力について知っているよね？」

「過去視が基本だけど時折未来視できる時もある……って、未来を見たのか？」

「その通りだ」

月影さんの能力は過去視で過去に起きた出来事を見る事が出来るのだが、時折過去ではなくて未来を見る事があるらしい。今回は過去視ではなくて未来視で何かあったから俺たちを呼び出したのだろう。

「……近いうちに、リベリオン解放軍リベリオンの首領が死ぬ未来を見た」

「あり得んな」

月影さんの言葉を即座に否定する。リベリオン解放軍リベリオンを絶対に殺すと誓って情報を集めている俺からしてみれば月影さんの言葉は鼻で笑ってしまうほどにありえない事なのでから。

リベリオン解放軍リベリオンのトップは「暴君」と呼ばれている存在だが、実在しているかどうかすら怪しいあやふやな存在だ。しかしそれでも組織を纏め上げているので実在し、そしてあ

やふやな存在でも纏め上げられる程の力リスマを有し、さらに組織の頂点に立てるほどの実力者であると分かる。そんな「暴君」が死ぬ。老衰や寿命でなら分かるが、月影さんの言い方だと殺されてというニュアンスが感じられた。

「不知火君の言いたいことは分かるが、問題はそこではなくて「暴君」が死んだ後の話だ。「暴君」の死により霧散した「解放軍<sup>リベリオン</sup>」の残党の大半を「同盟」が引き込んで、「同盟」と「連盟」による戦争が勃発する未来を見たんだ」

「成る程、残党を引き込まなかつたせいで戦力差が開いて「連盟」が蹂躪されると」「話がよくわかんねえです。月影おじさんは何が言いたいんですか？」

流石に難し過ぎたのか火乃香は月影さんの話を聞いてつまらなそうにしている。同世代とは比べものにならないくらいに強い彼女とはいえ見た目通りの年頃なのでこう言った話を面白いとは感じないらしい。

「もう少し考えようか……でも、確かに話が回りくどいな。月影さん、そう言った事情は後からでいいから何を企んでるのか、俺たちに何をして欲しいのかさっさと言ってくれよ」



「確かにそうだ。一介の学生である俺に政治などの小難しい話をされても理解出来んからな」

「待て、それはちよつと問題があるぞ」

王馬の知能指数がもしかしたら火乃香並みかもしれないという事実には俺は軽く戦慄するが、月影さんはそれを見て苦笑しているだけだった。

そしてドテラを脱ぎ捨ててコタツから足を出し、正座をして俺と王馬に向き合う。さつきまでの親しみを感じさせる顔でなく、国を護るためにどんな事でもしてやるという気概を感じさせる国のトップとしての顔になる。

「……来るべき戦争に備えるために、  
“連盟”から脱退を目指している。そのため  
力を貸して欲しい」

「オツケー」

「アイサー」

「了解した」

どんな手段でそれを成し遂げようとしているのか一切聞かずに、  
ただどその目的に一切の偽りはないと感じたから、俺は月影さんの頼みを即座に了承した。

## 暁学園

「はあ……気が重い」

「大丈夫です？ 飴いるです？」

「くれ、なんかしてないとストレスが溜まってしょうがない」

月影さんに「連盟」脱退のために力を貸してくれと頼まれ、王馬と共にそれを了承した翌日。「連盟」脱退のために月影さんが建設した暁学園の一員となつた事は別に良い。転校扱いになるのか少し不安だったが、今はまだ表立っていないので破軍の学生のままで良いと言われて安心した。「連盟」を脱退するために、国内における「連盟」脱退意欲を高める必要があるのは分かった。新興勢力の暁学園が「七星剣武祭」を優勝するという手段も納得した。

問題があるのは他の暁学園の生徒だ。

月影さんから渡された資料によれば俺たち以外の暁学園の生徒はほとんどが「解放軍」に所属、もしくは「解放軍」の関係者という大盤振る舞い。唯一紫乃宮天音だけ「解放軍」とは無関係なのだが、こいつが一番の地雷だったりする。能力のせいでは性根はねじれ曲がっており、しかもその能力が厄介極まり無いときている。正直言つてこいつを入れるメリットよりもデメリットの方が大きい気がするのだが、こいつは彼女の紹介で来たとき月影さんは言っていた。その事は少しだけ気に入らないのだが、彼女の思いを無下にするわけにはいかなないので俺と王馬がもしもの時には対処する事になっている。

結果として、マトモな奴が誰もいない。戦闘狂を地で行く王馬ですらこのメンツと比べるとマトモに見えてしまうあたり、俺たち以外の生徒の問題児っぷりが伺える。

それに……「解放軍」に所属している奴らを殺したくて堪らない。関係者の生徒はまだ我慢が出来るのだが、所属しているのであれば完全にアウトだ。今すぐにもこいつらの潜伏先に赴いて惨殺してやりたいと理性が叫ぶのを本能で押さえつける。月影さんも今の段階で「解放軍」の構成員を引き込むのは危険だと言っていた。それでもやったのはそれだけ戦力が欲しいからだ。仮にそいつら並みの戦力を持っていて、月影

さんの目的に協力してくれる奴を引き込めるのなら今すぐにでも殺してやりたい。だけれどそんな都合の良い存在が見つかる筈が無い。だから我慢するしか無い。なので月影さんと交渉し、仮に何か不利益になる事をやらかした時には俺がそいつらを処分するという事で妥協した。

現在は月影さんに暁学園のメンツとの顔合わせと今後の予定について話し合うと言われているのでこの場に来ているが、本音を言わせて貰えば帰りたくてしようがない。火乃香からもらった飴を苛立ち混じりで噛み砕いていると扉が開き、ピンク色のゴスロリ衣装を着込んで眼帯で片目を隠した少女とメイド服の少女、それとやたらと厚着をしている少女が入って来た。資料にあったので彼女たちの名前は分かっている。  
風祭凛奈<sup>かざまつりんな</sup>、その従者のシャルロット・コルデー、そして「解放軍」<sup>リベリオン</sup>の多々良幽衣<sup>たたらゆい</sup>。

事前に月影さんから知らせられているのか3人は俺と火乃香の存在に驚く事なく席に座り、風祭と多々良は値踏みするような視線をくれている。

「……………なんだ？」

直ぐにでも眼球を抉り出したくなるがそれを堪えながら訊ねると、代表してか風祭が口を開く。

「いや何、総理が態々直々に招いた人材だ。それなりの手練れだと期待していたのだが……ガツカリしたぞ。『風の剣帝』は無論、その童とも比べ物にならない程に強者としての気という物を感じないでは無いか。失望の1つや2つはして当然だと思うが？」

妙な言い回しをするなど思ったが、資料には厨二病を患っていると書かれていた事を思い出して納得する。要するに月影さんが呼んだ俺に勝手に期待して、王馬どころか火乃香よりも弱く見えると。それを聞いてこちらがガツカリだ。一目見て強者だと分かるような強者など所詮二流でしか無い。王馬は威嚇のために敢えてその気質を曝け出しているのだろうか、俺からしてみればする必要が無いのでしなだけなのだ。

反応するのも面倒になって来たのでそのまま無視しようとする、多々良が突然立ち上がってチェンソー型の『固有霊装』<sup>デバイス</sup>を顕現させて切っ先を俺に向けて来た。

「何のつもりだ？」

「……ハッ、武器を向けられても獲物を抜こうとしないとはとんだ甘ちゃんだな。ポツと出が歓迎されると思ってるのか？」

「成る程、つまり俺は弱いからさっさと消えろと、そう言いたいんだな？」

「それかこの場でアタイに切り刻まれるか、好きな方を選びな」

安い挑発だと思った。恐らくこれが多々良なりの測定なのだろう。乗らなければ冷静な判断が出来る、乗ってきたとしても多々良の異能で問題にならない。この物差し自体を否定するつもりは無いのだが、これが「解放軍」<sup>リベリオン</sup> 所詮からやられていると話が変わってくる。

「ゴ  
解放軍」<sup>ククス</sup>に見定められている。それに腹を立てない人間がいるのだろうか？

「はあ——頭が高え」

気怠げに眼球だけを動かして多々良の目を見つめ、一瞬だけ内側で暴れ狂う赫怒と殺意を多々良だけに向けて解放する。向けられていない者からすれば微風が吹いた程度すら感じられない。しかし王馬は俺が何かをやった事に気がついて目を俺に向ける。

そして多々良の反応が変わった。

「ヒーーーーア……ッ!？」

勝気だった顔を一瞬で青くさせてその場に崩れ落ちる。全身を異常なまでに震えさせ、俺から少しでも距離を取ろうと無様に床を這いずっている。しかも失禁したように乾いていた床は濡れていた。風祭とコルデーは何が起きたのか分からずに困惑しているようだが、リベリオン“解放軍”の凶手……お抱えの暗殺一家の出である多々良はしっかりと分かってくれたらしい。

気当たりという技がある。気合いで相手を萎縮させる技だ。俺がしたことはそれに近い……しかし、使ったのは気合いでは無くて赫怒と殺意。多々良のような裏の世界の住人はそういうものに関して敏感になる様に育てられている。その感受性を持って俺の赫怒と殺意をモロに浴びた結果、彼女は俺に殺される自分自身の姿を幻視した筈だ。



そして多々良は怯え、失禁し、無様に逃げようとしている。いい気味だと、その姿を嘲笑う。

「相変わらず趣味が悪いな」

「言ってくれるなあ……!!俺はただ、強気の女性が涙目になるのに興奮を覚えるだけの健全な男の子なのに!!」

「性癖歪み過ぎじゃねえかです」

歪んでいる自覚はあるのだが、可愛いと思うのだから仕方がない。一番好きなのは笑顔なのだが、涙目というもの捨てがたいのだ。

「ししよー、ここはどうかしておくんでししよーはそれをどうにかしやがれです」

「同感だな。流石にこんな状態で話し合いに参加させるわけにはいくまい」

「遊びが過ぎたな」

「ヒイツ!!た、助けてー!!」

やり過ぎた事に反省し、だけどやった事には後悔せずに多々良の首根っこを掴んで引

きずりながら部屋から出る。そして近くにいた職員に事情を話し、女性用の服を用意してもらおう。それを多々良に着させれば終わりなのだが……用意された服は何故かフリル付きのドレスだった。

「クツソ……何でアタイがこんな目に……!!」

「リベリオン解放軍” 所属だった事と職員の趣味の悪さを恨むんだな」

ここまで少女趣味全開の服を着慣れていないのか、多々良は恥ずかしそうにしながらブツブツと文句を言っている。時間が経って怯えからは立ち直つたらしいが、俺の事を警戒しているのか距離は空いている。多々良が仮に リベリオン解放軍” 所属では無くして協力者の立ち位置ならば多少は穏便に済ませていただろうがそれはもしもの話でしかない。

それとあの職員の趣味の悪さに関しては諦めるしかない。どこからどう見ても三代後半の女性だったのにこんな服を常備しているとかキチガイ以外の何者でも無いから。

多々良の着替えを終えて部屋に戻ればさつきまでいかなかった筈のメンバーがすでに

揃っていた。トップレスにエプロンを身につけただけのサラ・ブラッドリリー、少女と見間違う様な顔つきの少年紫乃宮天音しのみやあまね、道化師の格好をした長身瘦軀でひらがれいせん“解放軍”所属の平賀玲泉。

そして紫乃宮と平賀を見た瞬間に思った――こいつらはもうダメだと。リベリオン “解放軍”だから、性格がねじれ曲がっているからでは無い。この2人は、人として致命的に終わっていると見ただけで理解させられた。

多々良の一件でストレスが発散出来ていなかったら反射的に殺していたに違いない。リベリオン “解放軍”とはいえ、その事に欠片程感謝して席に座った。

## 暁学園・2

「……それでは暁学園定例会を始める。なお、定例会などと言っているがこれが初めてだったりする」

「いらん情報はいいから早よ進めろよ。多々良が羞恥心で死にそうになってるぞ」  
「誰のせいだと思っただけやがる!!」

月影さんが壇上に立ち、第一回暁学園定例会が始まった。とは言っても報告と軽い打ち合わせだけで終わるらしいが。それよりも多々良が顔を真っ赤にしているのが気になってしょうがない。初めは防寒着を着込んでいたので顔は分からなかったが、フリル付きのドレスに着替える際に防寒着を剥ぎ取られたことで目付きの悪いものの整った素顔が曝け出されている。『解放軍』<sup>（リベリオン）</sup>で無ければ口説く事も考えるレベルで俺の好みだったのだが……実に悔やまれる。

「まず始めに、悲しい事に暁学園で裏切り者が出る未来を見た」

「俺の事だと思つた奴、直ぐに土下座して腹切れ。介錯はしねえから」

「はーい」

「済まなかつた」

「火乃香ア!!王馬ア!!」

月影さんの口から裏切り者という言葉が出た瞬間に視線が俺に集まつたので反論したら真つ先に火乃香は俺の膝から降りて土下座を、王馬は土下座はしなかつたがその場で謝罪をした。俺の性格が分かつているとはいえ躊躇いのない行動に一瞬だけ見逃さうかと思つたが甘やかしては駄目だと心を鬼にし、火乃香にはデコピンを、王馬には貫手を叩き込む。

火乃香は額を抑えながら態とらしくグワアツと言つて転げまわり、王馬は呻き声を一切あげずに机に突つ伏して痛みで悶絶している。王馬の身体はとある修行のせいである人の数十倍の骨密度と筋密度になつていて、まともな攻撃ではダメージを与えることは出来ない。しかし、その程度ならばどうすれば良いのか漣の血が理解している。筋肉の僅かな隙間に指先を滑り込ませて臓器に直接衝撃を通してやれば良いだけの話だ。その結果王馬は肺を直接殴られるという体験をしている。

「容赦無いですねえ。御友人では無かったですか？」

「容赦無しなら今頃王馬は血反吐を吐いて死んでるぞ？ やって欲しいか？」

平賀がおかしいのか笑いを堪えるように言ってくるが、これでも手加減をしているのだ。内臓に直接衝撃を通せるということは、言い換えれば衝撃を操作しているのと同じ。広がる衝撃を一点に集中させれば極論指一本でも心臓に穴を開けて殺す事が出来る。流石に俺だつて仲間内で後遺症が残るようなことはしない。逆に言えば後遺症が残らない程度ならば好き勝手やるけど。

「で、誰がいつどこで裏切るんだ？」

「破軍に潜入を命じた リベリオン 解放軍ありすいんなぎ の暗殺者の有栖院風だ」

「成る程、それが俺がわざわざこのタイミングで勧誘された理由の1つか」

月影さんの指示により今回のメンバーは7校に1人ずつ配置され、そこから自力で“七星剣武祭”の出場権を勝ち取れと言われている。有栖院は破軍でそうする予定だったのだろうが、月影さんはそいつが裏切る未来を見てしまった。なので代わりに縁があ

り、破軍に籍を置いてある俺の事を勧誘したのだろう。初めから俺の事を誘えば良いのにと考えるが、こんな一大事を計画しても根は善良な月影さんのことだからそうする事を躊躇ったに違いない。それでも最終的には誘われたのだが。

「裏切りの理由は？」

「そこまでは分からないが……恐らく学園生活の中で親しい者が出来てしまったのだろうな。彼らを裏切る事を躊躇った結果、私たちを裏切る事を選んだと思う。彼を育てた『隻腕の剣聖』はそれを認めようとしないが万が一の為に彼は計画から外す事にした。勿論その事は彼には伝えていない」

「裏切らなければそれでよし、裏切ったらそこまでつてことね」

個人的には有栖院がどちらを選んでも構わない。裏切らなければ『解放軍』<sup>リベリオン</sup>として時期を見て殺す、裏切ったら警戒はするが放置しておく。『解放軍』<sup>リベリオン</sup>を殺したくて堪らない殺戮者である俺だが、殺人鬼では無い。離反するのなら、殺す理由は無くなる。

だがそれも、あくまで有栖院が裏切ればの話でしか無いのだが。

「有栖院君の裏切りの可能性により、計画の一部を変更する事にした。各校が『七星剣武祭』への出場者を決めた後の7月に行われる合同合宿、その最終日に破軍学園に襲撃して帰って来た代表者たちと戦ってもらったが、前倒しにして帰宅途中の代表者たちを狙う事にする。別に学園そのものを襲わなくても暁学園の実力を見せつけられればそれで良いからね」

それに関しては同感だ。それに学園そのものを襲うとなれば代表以外の生徒や職員も出てくる事になる。負けるなど欠片も想像していないが、無駄な被害が出ないのならばそれに越した事は無い。

「そして襲撃のメンバーだが、最低限の人員で行う事にする。破軍に新理事長として就任した新宮寺黒乃と臨時教師として雇われた西京寧音さいきやうねねの2人がその理由だ」

「げ、あのロリータが破軍にいるのかよ……転校してえ」

「ふう……あの『夜叉姫』と知り合いなのか？」

「ガキの頃にオヤジのツテで南郷なんごうのジイさんのところに通った事があってな、その時に知り合った」



南郷寅次郎——第二次世界対戦で日本を戦勝国に導いた英雄黒鉄龍馬、その英雄の終生のライバルで未だ現役の騎士である老人。ガキの頃に一時期南郷のジイさんのところで世話になっていて、ジイさんの弟子であった西京寧音とはその頃に知り合って今でも交流のある人間だ。嫌っているわけでは無いが、正直な話会いたくない人物でもある。年齢はそろそろ三十代に入ろう辺りなのに外見は幼くて成人しているようには見えない……しかし、その実力は本物だ。それを警戒して最低限の人員で行うというのは理解出来る。だけど嫌な予感が拭えないのはどうしてなのか。

「そして襲撃のメンバーだが、黒鉄王馬君と新城不知火君の2人に言ってもらおう事にす  
る」

「やっぱりかよお……!!」

「ししよー、元氣出しやがれです」

「うん……ありがとう……お兄ちゃん頑張るからもう少しそうやってて」

嫌な予感の的中し、俺と王馬が襲撃のメンバーに決まってしまった。もしも彼女と戦う事になった時に確実に対抗できるのは俺と王馬くらいだと思っているのでその決定

には文句は無いのだが、感情的な部分が中々納得してくれない。机の上に頭を抱えて突っ伏し、火乃香に頭を撫でて慰められているが回復するのにしばらく時間が掛かりそうだ。

「まあそこで勝手にダメージを受けている不知火君は放っておいてだ。他の皆には予想外の事態が起きた時のために周囲で待機してもらおう事になる」

「……あのお、少し宜しいでしょうか？」

態とらしく手を上げながら発言権を求めたのは平賀。仮面で顔を隠しているのに表情は分からないが、気配から良くないタイプの人間だと嫌という程に分かってしまう。人の道を外れた外道、それしかこいつを形容できる言葉を思いつかない。

「なんだね？平賀君」

「王馬君の実力は分かっているんで文句は無いのですがそちらの彼……新城君は本当に強いのですか？」

「リリースリオン解放軍」に名前を呼ばれた、それだけで全身の血液が発火しそうな程に熱を帯びて

平賀を斬り殺したい衝動に駆られるがそれを精神力で無理矢理抑える。月影さんに迷惑を掛けるわけにはいかないし、それに平賀は斬った程度では死なないから。

「ああ、実力に関しては何心配は要らない。解放軍<sup>リベリオン</sup>所属の君ならば「緋色」の話くらいは聞いた事があるだろう？ 不知火君がその「緋色」だ」

「ほう!! 貴方があの「緋色」ですか!!」

「こつちを見るなよ木偶人形」

「緋色」とは、俺が「解放軍<sup>リベリオン</sup>」を潰している間に勝手に付けられた二つ名だ。基本的に「解放軍<sup>リベリオン</sup>」を襲撃した時には目撃者は残さないようにしている。しかし完璧にというわけにはいかずに何人かに俺の姿を目撃されてしまっている。顔は隠していたのでバレてはいないが、俺が好き好んで着ている赤いコートから「緋色」という呼ばれ方をされているのだ。噂によれば「連合」と「同盟」のどちらにも「緋色」を名乗る人物が存在しているらしい。「緋色」のネームバリューを欲しがって仕立てた偽者だろう。俺からしてみれば笑い話にしかない。

“解放軍”<sup>リベリオン</sup> からすれば不倶戴天の敵である “緋色” の俺だが、平賀から感じられるのは好奇心だけで怒りや憎しみなどの負の感情は一切感じられない。故に吐き気がする。平賀は俺に対して好意を向けている訳ではなく、どうやって弄ぼうかしか考えていない。

能力と人格が合わさって最低なのが紫乃宮だとすれば、平賀は性根の悪さだけで邪悪だ。例え “解放軍”<sup>リベリオン</sup> で無くてもこいつを殺す事に躊躇いなど感じられない程に。

俺が “緋色” だと分かって平賀とは違う空っぽな好奇心を向けているのは紫乃宮。2人とは違い純粹な好奇心を向けているのは風祭。驚愕しているのは多々良……そして、定例会が始まる前からじつと俺の事を観察していたブラッドリリー。

こいつらと関わりを持つ事と、そう遠く無い未来に寧音と出会う事で確実にストレスが溜まると確信し、溜息を吐くことしか出来なかった。

## 悲報、友人が変態になっていた

「……よし、これで必要な書類に記載はすべて終わったな」

「やっつとですか……あく疲れた〜」

暁学園の定例会から三日後、破軍学園の入学式が近くなってきた頃になって俺はようやく破軍学園に向かう事が出来た。理事長室で理事長と向かい合っているがさつきまで書類に記載をしていたので精神的に疲れている。一年の停学に留年に伴う書類がここまですごいとは思わなかった。

「もきゅもきゅ」

「お前見てると本当に義務教育前に戻りたいって思うよ、本当に」

「そういえばその子の学校はどうしているんだ？」

「通信教育ですよ。ネットって本当に便利ですね」

火乃香の実年齢は不明だが、書類上では8歳という事になっている。流石に山奥の実家から学校のある場所まで通わせるのは厳しいのでは無いかとオヤジと話し合つて通信教育をする事にしたのだ。俺の時は普通に通つていたが。

「それなら心配無いな……ああ、寧音に新城の事を話したらえらく興奮していたが知合いなのか？」

「ガキの頃に知り合つて腐れ縁つて奴ですよ。にしても興奮してるのか……理事長、今から問題起こすんでもう一度停学か退学にしてくれませんか？」

「待て、何がお前をそこまで追い詰めるんだ」

「若干の苦手意識があるだけですよ……」

寧音との再会を考えると溜息を吐いてしまう。別に彼女の事が嫌いという訳では無い、ただ苦手なだけなのだ。

過去にあつた事を思い出して軽く鬱になっていると、扉がノックされた。理事長がそれに入室を許可すると、生徒でも教師でも無い人間——警備員が入つて来た。

「失礼します。先程、寮で痴漢を行なった生徒を捕まえました」

「おっと、これは理事長の責任問題になるんじゃないですか？」

「何故そんなに目を輝かせてるんだお前は」

「他人の不幸は蜜の味」

「最低だなお前!?!……で、その痴漢を行なった生徒と被害者の名前は？」

被害にあつた者に関しては気の毒だと思いが俺には関係の無い話だ。話半分にも聞いていようと緩くなったコーヒートを飲もうとして——

「はい、痴漢を行なったのは黒鉄くろがね一輝いつき。被害にあつたのはステラ・ヴァーミリオンです」

——友人の名前が出て来て驚きでコーヒートを吹き出してしまった。

「……つまり、ヴァーミリオンの下着を見てしまったから自分も脱ぐ事で相殺しようとしていた訳だな？」

「悲報、友人が女子の下着姿を見て自分も脱ぎ出す”つと”」

「……待つて!!それをされると僕の社会的地位が死滅するから!!」

理事長から渡された携帯機能付きの生徒手帳にインストールしたSNSアプリで友人……黒鉄一輝の奇行を拡散しようとしたら土下座で懇願された。仕方がないので土下座をしている一輝の背中の上に火乃香を座らせ、その光景を撮影する。

「一輝、露出趣味の変態野郎と幼女に乗られて興奮する変態野郎とどっちが良い？」

「どちらにしても僕の社会的地位が死ぬ……!!」

「お前たち、本当に友人なのか？」

「友人ですよ？破軍に来る前からの関係ですけど」

拡散することは止めて、どちらともパスワード付きのロックをかけて保存しながら理



事長の質問に答える。

一輝とは彼の下の妹と一緒にガキの頃、姉ちゃんが生きていた頃からの友人だ。少なくとも俺の感性では、この破軍で最もマトモな人間だと認めている。

「で、理事長。この変態野郎どうしますか？」

「下手をすれば国際問題になりかねないが……まあこの変態野郎に責任を取らせれば問題無いだろう」

「あの、混乱していたんで変態野郎は止めて貰えないですか？ステラさんには申し訳ない事をしたと反省しているんで……」

「言葉だけで反省しているって言われてもなあ？」

「なんだ、黒鉄はヴァーミリオンの事を知っているのか？」

ステラ・ヴァーミリオン、その名前は恐らく現在の日本において知らない人間の方が少ない名前だ。ヨーロッパの小国のヴァーミリオン皇国第二皇女。その上で、ブレイヤ伐刀者としての素質も高く、伐刀者ランクも最上位のAランク。それも所詮はカタログスペックなので実戦で強いのかどうかは別問題になって来るが、今は弱くても成長すれば

将来確実に強くなる事が約束されている。

「学園からの嫌がらせがあったとは言え、留年したお前とは大違いだな、  
ワーストワン落第騎士」  
 「あははは……そうですね」

「ワーストワン落第騎士」という二つ名はどこからどう見ても侮蔑の意味しか込められていない。しかしそれで呼ばれても一輝は困ったように笑うだけで否定をしなかった。何故なら、それは事実だから。一輝の魔力量は平均の十分の一しかない。魔力量が全てではないとはいえ、一輝のそれはあまりにも少な過ぎる。唯一身体能力だけは俺が認めるほどに優れているが、逆に言えばそれだけしか無い。故に一輝の伐刀者ランクはステラ・ヴァーミリオンとは真逆の最低ランクであるFランクとされている。

まあ、だからと言って弱いのかと聞かれれば首を横に振るしか無いのだが。

「そう言えば不知火はどうしてここに？ 停学中だったはずだけど」

「理事長が変わった事で停学が解かれてまた一年からやり直す事になったんだよ。そんな事よりも今はヴァーミリオンのお姫様の方を気にしろよ。下手をしたら外交問題だ

ぞっ?」

「……失礼します」

話題を逸らしたかったのだろうが本題から目を背けることは許さない。ヴァーミリオンの話題に戻したところで扉が開き、一人の少女が入って来た。

まず目を引いたのは燃えるような紅蓮の髪と破軍学園の制服の上からでも分かるほどに大きな胸。ヴァーミリオンの胸と自分の胸を見比べて絶望している火乃香の姿に少しだけ癒されながら、気配を消して事の経緯を見守る事にする。今回は俺は完全な部外者だ。一輝がどうやってこの問題を解決するのか、大人しく見させてもらうとしよう。

「……ごめん」

一輝の口から出たのは素直な謝罪だった。全て自分が悪かったと非を認め、男としてケジメをつけるとヴァーミリオンの好きにしてくれと言っている。

「ふうん、潔いわね。これがサムライの心意気なのかしら?」

「口下手なだけだつて」

「そうなの……なら……」

表面上では敵意を見せておらず、好意的な表情を浮かべている。一輝はそれを見て、もしかしたら許してもらえるかもしれないと思っっているがそれは間違いだ。俺には彼女の目に怒りの炎が燃え盛っているのが見える。

「……ハラキリで許してあげるわ」

「待つて待つて待つて待つて!!え、何、僕死なないといけないの!!」

「当然よ。姫であるアタシにあんな粗相して、本当だったら死刑のところを特別にハラキリで許すのよ?日本男子にとってハラキリは名誉なんですよ?」

「知ってるか?ヴァーミリオン。ハラキリをする時には介錯人という首を切り落とす者がいるのだが……あれは別に必要無いぞ?」

「いやいや!!介錯人は必要ですよ!!それにたかだか下着姿を見たくらいで死ぬだなんて……」

「た、たかだかですつて!?!嫁入り前の姫の肌を汚しておいて許さないわ!!覚悟しなさい  
この変態野郎!!」

目の前で繰り広げられる光景を見て声を出さずに腹を抱えながら笑っていると、室内の気温が高くなる。その原因はヴァーミリオンが「固有靈装」を顕現させたから。

「傅きなさいー」  
 「レレウヴァアテイン 妃竜の罪劍」!!」

彼女の髪と同じ紅蓮の炎を纏った大剣。それから彼女の異能は炎だと判断し、近親感を覚えるのだがこんなところで「固有靈装」を振り回されれば確実に被害が出る事になる。面倒だと思いながらソファから立ち上がり、一輝とヴァーミリオンの間に立つて入り、

「ヴァーミリオンの大剣と一輝が防御のために顕現させた黒い鋼の日本刀の固有靈装」、その二つを素手で掴んで止める。

「なー」

「そこまでにしておけ。このメンツじゃ怪我はしないだろうが、部屋が壊れるからな」  
 「私の能力で直すことは出来るぞ？」

「直せるからって壊していいわけじゃ無いでしょう？ほら、さっさと<sup>デ</sup>固有霊装<sup>イス</sup>しまえ。ああ、一輝はしまわなくて良いぞ？そのまま腹切るんだから」

「だから切らないって言ってるじゃないか……ッ!!」

俺の言葉に一輝は素直に、ヴァーミリオンは渋々と言った様子で<sup>デ</sup>固有霊装<sup>イス</sup>をしまう。理事長は一悶着ある事に期待していたのか少し残念そうな顔をしている。

「アンタ、何者？」

「何者って……どこにでもいるただのイケメンだけど？」

「惚けないで!!アタシの<sup>ノウブルアーツ</sup>伐刀絶技<sup>ドラゴンブレス</sup>「<sup>ドラゴンブレス</sup>妃竜の息吹」の温度は摂氏3000度よ!!それを素手で掴んで平然としていられるわけがないじゃない!!」

「3000度ねえ、<sup>道</sup>理<sup>理</sup>で<sup>微</sup>温<sup>温</sup>いはずだ」

自然属性の<sup>ブレイザー</sup>「<sup>ブレイザー</sup>伐刀者」は往々にして自分と同じ属性の耐性を持っている。俺とヴァーミリオンは奇しくも同じ炎の属性、それで俺が平然としているのは、俺がそれを上回る耐性を得ているから。

その回答が気に入らないのか睨んでくるヴァーミリオンを無視しながらソファアに座り直す。俺が一旦割って入った事で2人の頭は良い具合に冷えているだろう。

「そら、さつさと続きをやってくれよ」

「つと、そうだ!!今回の事はそっちが僕の部屋で着替えていた事が原因だから!!」

「え、何言ってるのよ?アタシはちゃんと理事長先生から貰った鍵であの部屋に入ったわよ?」

「え!?!」

雲行きが怪しくなってきた。そもそもよく考えれば一輝が部屋の鍵をしないまま外出するとは思えない。鍵のかけられた一輝の部屋に入るためには、その部屋の鍵を使わなければならない。鍵を持っているのは寮長と、その部屋の住人の3人だけ……つまり、ヴァーミリオンは一輝の部屋の正式な住人だと言う事。

「く、くくく……!!」

「り、理事長先生?」

「ふふ、ああすまない。面白い事になっていたのでつい放ってしまった。ヴァーミリオ





トになると前以て告げられた上で了承しているのだから心配しなくても良いだろう。それでも火乃香連れなのに了承してくれた礼の一つでもしなくてはいけないが。

俺は納得出来たのだが一輝とヴァーミリオンは納得出来ていないようで理事長に詰め寄っている。確かにマトモな感性の持ち主ならば同じ年頃の異性とルームメイトなんて遠慮したいだろう。猛烈に反対するヴァーミリオンに対して理事長が退学しても構わないと言えば譲歩したようだが、それでも一輝に対して話しかけない、目を開けない、息をしないなどと無茶苦茶な要求をしている。

そんな2人に理事長はとある提案を持ちかけた。

「話がつきそうに無いな。ならこうしろ——これから2人で模擬戦をして、勝った方が部屋のルールを決めるんだ」

それはFランクとAランクという、カタログスペック上では敵うはずのない模擬戦を強要していた。

## 剣客と幼女

一輝とヴァーミリオンとの模擬戦が決まったが、開始まで時間があるという事なので俺は火乃香を連れて寮に向かう事にした。ルームメイトに挨拶をしておきたいからだ。今の時期に寮にいるという事は在学生という事になる。俺が去年にやらかした事は知っているはずなのに、それを知った上で同室を許可したルームメイトに興味を湧いたということもある。

その時にヴァーミリオンから一輝を倒したら次は俺の番だと言われたが、そんな未来は訪れないだろう。確かにランクだけで見ればAランクのヴァーミリオンにFランクの一輝は敵わない。しかし、それはランクだけの話なのだ。実際に戦ってランクの高い方が勝つと決まっているわけじゃない。それに一輝の強さを知っている俺から言わせれば、ヴァーミリオンは負けると思っている。

「ししよー、ルームメイトって誰です？」

「分からんが心当たりは数人程ある」

ほとんどの在學生は俺に対して良くない感情を持っているのでルームメイトになる事を許可するとは思えない。しかし数人程それを許可するような存在には心当たりがある。一輝を含めた破軍の中でマトモな人間だと認めた内の一人だろう。もともと、マトモな奴は片手で数えられる程しか居なかつたので誰か予想するのは難しいことでは無いのだが。

「つと、着いたな」

考え方をしていると部屋の前に着いた。念のために理事長から渡された鍵に書かれている番号と部屋の番号とを見比べるが一致していて、ここが俺の部屋だと証明していた。ノックをすると中から返事があり、扉が内側に開く。

「ーえつと、久しぶりだね。新城君」

「やっぱりお前だったのか……綾辻<sup>あやつし</sup>」

出迎えてくれたのは片目を黒い前髪で隠した少女、綾辻<sup>あやつしあやせ</sup>絢瀬。俺が去年にやらかした事件の最中で、俺がマトモだと認めた数少ない人間の1人だ。

「いや、今は3年だから敬語を使った方がいいですかね？綾辻先輩」

「うーん、新城君に敬語を使われるとなんだかゾワゾワするから普通に話してくれない？」

「酷い言い草だなあおい」

「あ、でも分かるです。ししよーが敬語を使うと似合わなくて似合わなくて吐き気がしたです」

「火乃香、お兄ちゃんはその言葉に泣きたくなつたよ……」

「こんなところで立ち話もなんだから入って入って」

火乃香からの容赦ない口撃に視界を滲ませながら部屋の中に入る。3人で生活するためにかこの部屋は去年俺が使っていた部屋よりも広く作られていて、二段ベッド以外にもソファアーの上に敷布団と掛け布団が置かれている。ソファアーを寝床として使えという事だろう。

荷物を入れていたバックを部屋の隅に置き、ソファーに腰掛ける。火乃香も同じように背負い鞆を部屋の隅に置いて自然な流れで俺の膝の上に乗っかってきた。

「理事長から聞いてたけど妹さんだっけ？」

「ああ、ほら火乃香、挨拶」

「新城火乃香、8歳です。よろしくです」

「ふふっ、ありがとう。ボクは綾辻絢瀬です」

火乃香の自己紹介混じりの挨拶に綾辻は微笑みながら自己紹介で返して手を差し出した。火乃香はそれに応じて手を握り返す。綾辻の見た目はかなり良く、美少女と評価出来る風貌だ。そんな彼女が火乃香と握手している姿ははつきり言ってかなり微笑ましい光景である。

寧音との邂逅に備えて少しでも癒されたい俺からすれば、その光景はかなりありがたかった。

「でもどうして俺との同室を許したんだ？ 去年の俺のやらかした事を知らないとは言わ

せないぞ?」

「打算ありき……つて言ったら怒るかな? ボクの目標を新城君は知ってるでしょ?」  
「道場を取り戻すだったな?」

綾辻の実家は道場を経営していて、そこそこの門下生がいたらしい。しかし、ある日やって来た道場破りに綾辻の父親が負けた事でその道場を奪われた。その道場を取り戻す事が自分の目標なんだと満月の下で話す綾辻の姿を昨日の事のように思い出せる。

「悔しいけど今のボクじゃあ、あいつには勝てない……だから」

そう言つて綾辻は床に座つて頭を下げた。

「お願いします、ボクを強くしてください。ボクが出来ることなら何でもしますから」  
「何でも、ねえ……」

綾辻のような美少女に何でもすると言われれば心が揺らいでしまうのは男として当然の事だと思う。しかし、強くするという事が俺の判断を惑わせていた。

綾辻は剣術家で、父親から教えられた剣術を修めている。俺が綾辻を強くしようと思えば、彼女の教えられた剣術は影も形も残らなくなってしまうだろう。それではたとえ彼女の目標を達成する事が出来ても、彼女の今後に繋がらない。道場を取り戻せた事に満足して、父親から教えられた剣を捨ててしまった事に絶望して剣を捨てるかもしれない。

それではダメだ。折角俺が認めた数少ないマトモな奴かそんな事で終わって良いはずがない。

「俺が鍛えるとなると綾辻の修めてる剣術は影も形もなくなる事になるだろうな」

「……ッ!!」

「だけど、それじゃあ勿体無い。だから、綾辻の剣をそのまま強くする。それで良いか？」

「え?……そんな事出来るの?」

「出来る出来ないじゃない、やるんだよ。そうしないと道場は取り返せないと思って臨め。それで良いなら、俺は綾辻の力になる」

「……お願いします!!」

自分の振るつている劍のままでいられることが嬉しいのか、綾辻は目元に涙を浮かべながら再び頭を下げた。聞いた話では綾辻の父親は道場破りにやられた怪我が原因で意識不明らしい。唯一と言つても良い父親との繋がり、それを奪いたくなかった。

「んじゃあ、明日からで……客か?」

これからの予定を考えていると扉をノックする音が聞こえて来た。このまま扉を開けられたら俺が綾辻に土下座をさせているようにしか見えないので頭を上げさせ、俺が対応に出る事にする。

「はいは……い、い、!?」

「……ヤツホー」

扉を開けた先にいたのは着物を役に立たない程に着崩した幼女。普通ならば何で幼女がここにいいのかと疑問に思うのだが、俺はそんな事は考えずに全力で逃げることを



選んだ。

扉を叩きつけるように閉めてその隙に部屋の窓から外に飛び出す。着地するのと同じ時に校舎の中に逃げ込もうとして——不可視の力によって全身を押さえつけられた。

「もう、酷いじゃないか。うちの顔を見ただけで全力で逃げるなんてさ」

「こういうことをされるって分かっているから逃げてるんだよ……!!」

カランコロンと小気味の良い下駄の音を響かせながら現れたのはさつききの幼女——西京寧音だった。本音を言えば今すぐにでも逃げたいのだが、彼女の能力である「重力」に捕らえられてそれも叶いそうにない。体感的には50倍から100倍の重力だろうか。逃げようと思えば逃げられなくも無いのだが、その場合周囲への被害が出てしまうのでそれは出来なかった。

「まあまあカツカしないでさ。ところで、すぐそこに保健室があるんだけど……ヤつてかない?」

「止めろ……止めろお……!!俺の好みは幼女じゃないんだ……!!ツルペタよりも我儘ボ

「デイの方が良いんだ……!!だから止めろよおおおお!!」

必死になって抵抗するものの重力の枷から逃げる事は出来ず、俺は寧音に保健室まで引きずられる事になった。

## 模擬戦前

「もうやだ、早く寝たい……」

「うちと？うちとベッドインするの？」

「違えよこの合法ロリーター!!」

寧音に保健室に連れ込まれてそのまま喰われそうになったが発想を逆転、喰われるのが嫌なのならこちらから攻めれば良いのでは無いかと考えてそれを実行。本番に突入する前に寧音を動かなくさせる事で難を逃れる事に成功した。

その結果、寧音は現在有袋類よろしく俺の服の中に入って顔を出している状態になっている。本音を言えばすぐにも追い出したいのだが、今の寧音は全裸なのだ。もしもこのまま出してしまえば俺はロリコンという風評被害を受けてしまう事になるのでこうして服の中に入れておくしか出来ないのだ。

「その……なんだ、出来る限り私の方で手綱を握るようにするから、元気出せ」

「そうしてくれ本当に……」

「うっへへへ……良い体してるじゃないの」

「うわあ……うわあ……」

「もうどうコメントして良いのか分からないよ……」

右隣に座る理事長が肩を叩いて慰めてくれ、左隣に座る綾辻は寧音のキャラが信じられないのか顔を覆い隠している。火乃香はいつもは俺の膝の上が定位置なのだが、寧音が服の中に入っている関係で綾辻の膝の上に座っている。

俺たちがいるのは第四訓練場で、ここで数分後には一輝とヴァーミリオンの模擬戦が行われている事になっている。Aランクのヴァーミリオンが戦うと聞いてか訓練場には在学生たちが集まってヴァーミリオンがどんな風に勝つのかの予想を話し合っていた。

やはりというべきか、その予想の中には一輝の勝利を信じるものは一つもなかった。

「どいつもこいつもランク主義ばかりだな。カタログスペックで優劣を決めて何が楽しいんだか」

「そういう不知火は黒鉄のボウヤにご執着みたいね？何、ホモ？ホモなの？衆道は許さない……!!」

「勝手に勘違いして勝手に盛ってるんじゃないやねえよ!!止める!!舐めるな!!甘噛みすんな!!菌型を着けるな!!キスマークも駄目だ!!」

「今更なんだが、よく誰も騒がないな。こんなでも一応はK O Kの選手で知名度はある方なんだぞ?」

「あくこの光景見られると俺の社会的地位が確殺されるんで幻影で誤魔化してあります」

「幻影って、能力使ってるの!?!それにしては魔力は感じないんだけど」

「そこら辺は魔力制御で隠せるからな。蜃気楼の要領で熱を使って空気の密度を調節して、ついでに炎を使った瞬間催眠で無意識にここに来ないようにしてある」

「芸が細かいな」

「極めようと思ったら細かい芸も必然的に身につくもんですよ」

細かい芸というのは軽視されがちだが侮れない。例え一つ一つは無意味かもしれない

い物でも、積み重なれば必殺になり得るから。王馬はそんなものは小手先の技と完全に切り捨てているが、そこら辺は人それぞれだ。

「つと、そろそろ時間か」

理事長が時計を確認すると同時にヴァーミリオンが入場し、観客たちが騒ぎ出す。その大半が物珍しさから。中にはヴァーミリオンの事を天才だからと自分達とは別の存在のように見ている者もいる。

全くもって馬鹿らしい。

天才とは褒め言葉なはずだ。一体いつから天才は諦めるための言葉になったのだろうか。伐刀者ランクが高いから敵わない？カタログスペックで負けているからなんだというのだ。スペックが負けているから勝てない道理は無いはずなのに、どうして誰も彼もすぐに諦めるのだろうか。

去年俺が破軍に入学した時にはその風潮が広まっっていて、一部の例外を除いて誰もが

伐刀者ランクだけで全てを判断していた。

だから喝を入れる為に、俺は全学年に喧嘩を売った。

伐刀者ランクで、カタログスペックで負けているからなんだというのだ。腐らないで、下を向かないで、諦めないで欲しいと思つての行動だったが、どうやら無駄に終わってしまったっていらしい。

その事に少しだけ悲しくなってくる。

「どうした？落ち込んでるのか？」

「ああ、少しだけ。ここの生徒の質の悪さが治らなかつた事にな」

「耳が痛い話だな。去年の学園の方針が根付いているからだろう。一年……いや、最低でも半年以内には叩き直してやるから期待しててくれ」

「うちが慰めてやるよ……ベッドの上でな!!」

「ハッ、誰が昼間っから盛るかよ」

「……気になっていたのだが新城と寧音はどんな関係なのだ？寧音が一方的に新城の事

を好いているのは分かるのだが」

寧音から俺たちの関係を詳しく聞いていないのだろう。今まで表舞台に立つ事がなかった俺とKOKの選手である寧音との関係は全く無いように見える。一応腐れ縁だと伝えてあるが、それだけではこの関係には納得出来ない理事長の気持ちはよく分かる。

「一言で言えば、強姦の被害者と加害者」

「……え？」

「襲っちゃいました」

「……待て、待て待て待て。え？新城がではなくて寧音が新城の事を？」

「11の時だっけか？」

「そうそう、確かその頃だった」

11の時にオヤジに連れられて南郷のジイさんのところに行った時に、偶々いた寧音に目を付けられて模擬戦をする事になり、俺が勝ったのだ。それが彼女の琴線に触れたのかその日の夜に寢床に押入られてそのまま卒業。その時に精通している事を初めて



知った。

「いやあ、あの時は凄かったぜ？うちが腰砕けになっても不知火つてばピンピンでさ」  
「襲われて怖かったけど、悲しい事に気持ち良かったんだよなあ……」

「……お、黒鉄が来たな。そろそろ模擬戦を始めるとするか」

「あ、逃げたです」

人の過去を聞いておきながらそれが地雷だと分かる理事長は全力で逃げ出し、リングに向かって行った。逃げるのは構わないがこの空気を何とかしてから逃げて欲しかった。寧音はその時の事を思い出しているのかトリップして大人しくなっているのだが、綾辻は顔を真っ赤にしながらいよいよどうして良いのか分からずに百面相をしている。

「どうした？そんなに慌てて。笑えよ、これは笑い話なんだからさ……!!」

「笑えないよ!!」

どうやら綾辻はこの話では笑えないらしい。オヤジと南郷のジイさんはこの事を知った時には過呼吸になる程に笑っていたので鉄板ネタだと思っていたのだが、どうや

ら違っていたようだ。

「それでは、これより模擬戦を始める!!」

「来てくれー」  
// 陰鉄 //

「傅きなさいー」  
// レイヴァティン 妃竜の罪剣 //!!

顕現する一輝とヴァーミリオンの// 固有霊装 //。カタログスペックではヴァーミリオンが勝っている出来レース、それが観客たちの考えている事だろう。もしかしたらヴァーミリオンですらそう思っていて、一輝の事を完膚なきまでに叩き潰そうと思っているかもしれない。

しかし、俺はそう考えていない。ヴァーミリオンが才能だけの人間では無いことなど初見で分かっていた。理事長室で彼女の剣を受け止めた時、その太刀筋から十分な研鑽が見て取れたから。

だが、ヴァーミリオンの努力は所詮は才能ありきの努力でしか無い。

一輝のように、何も持たなかったから死に物狂いで努力した狂気を欠片も感じない。

「では——試LET'S合GO開AHEAD始!!」

理事長の宣言と共に、落第騎士と天才騎士の戦いが始まった。

## 模擬戦前・2

『何も出来ないお前は何もするな』

それは5歳の誕生日に父からかけられた言葉だった。

英雄であるサムライリョーマの家系、黒鉄家に生まれながら 「ブレイザー」 伐刀者としての才能を持たなかった僕へとかけられた、父からの最後の言葉だった。

その日を境に僕は黒鉄家からいらない者として扱われた。両親も、親戚も、誰もが僕のことを無かった事にするように扱った。唯一の例外は妹くらいだろうか。一度だけ彼女が他の子供の玩具を取り上げて壊している場面に遭遇し、それはいけない事だと頬を叩いてから懐かれるようになった。兄もいるのだが、そちらの反応は変わらなかった。騎士としての強さを求めている彼からすれば、僕がどうなっても構わないのだろう。それ

でも両親や親戚のようにいない者としては扱わずに弱者として見られていたが。

元旦に一族全員が集まっていた時、僕はいつものように外から鍵をかけられた部屋に隔離されていた。それでも声だけは聞こえて来て、楽しげに笑う声に負けたくなくて、僕は窓から外に出てそこから離れた。

目指して向かっていたわけではないのだけどその時僕は裏手にある山に入った。しかし、そこで道に迷ってしまった。引き返そうにも吹雪で足跡は消えていて引き返せない。時間が経つに連れて日が沈んで暗くなり、気温はドンドン下がっていく。

普通ならば誰かが助けに来る事を期待するだろうが、僕は期待なんてしなかった。だって、いない者として扱われている僕を探す理由なんて無いのだから。

そうなったとしてもきつと両親も親戚も誰も悲しみはしないだろう。唯一妹だけは悲しんでくれるかもしれないが、たった一人だけだ。

泣きたくなった、だけど涙は流れなかった。涙なんてすでに父からあの言葉をかけら

れた日から泣き続けたせいで枯れているから。

『あ……ああ……あああああああああーっ!!』

そのことが悔しくて、泣きたくて、だけど涙なんて流れないから僕は叫ぶ事しか出来なかった。吹雪の風の音にも負けない声で、悔しさを表したくて全力で吠えた。

僕はまだ諦めていないのに、どうして誰も信じてくれないのかと。

ーその時、不意に頭の上に手が乗せられた。

『それで良いんだよ、小僧。それを捨てるんじゃないやあねえぞ？その悔しさは、お前がまだ諦めていない証なんだからよ』

振り返った先にあつたのは白髪にカイゼル髭を蓄えた大柄の老人。日本の英雄、くろがねりようま黒鉄龍馬の姿だった。

『確かに今のお前は小さな子供だ。だけどお前が大人になった時、あいつらみたいなのがなんて物でしか人を測れないくだらねえ大人になるな。分相応だなんて聞こえのいい言葉で諦めて大人ぶるようなつまらねえ大人になるな。そんなもんを歯牙にもかけないくらいにでっかい大人になれ。諦めない気持ちがあれば人は何だって出来る。何しろ、人は翼も無いのに月まで行つた生き物なんだからよ』

深くシワの刻まれた顔で、少年のような笑顔を浮かべてそういう龍馬さん。それはただの言葉だった。だけど、生まれて初めて諦めなくても良いんだって言ってもらえた瞬間だったから。彼の言葉はただの言葉で、僕の人生に何の保証をしてくれるわけでは無い。しかし、その言葉だけで僕は本当に救われたのだった。

その瞬間、僕の中で一つの目標が出来た。それは、彼のような大人になる事。自分と同じ境遇の人を見つけた時に諦めを強要するのでは無く、諦めなくても良いんだと背中を押す事が出来る……彼のような大人になろうと。

そして目標が出来たその日に、僕は彼らと出会った。

『あ、いたいた。あいつじゃね?』

『そうみたいね』

幼く高い声は子供のものだった。誰かがこんな所に来たのかと当時の僕は考えていたが、龍馬さんの反応は違っていた。

僕の事を背中に庇い、無言で<sup>デ</sup>固有<sup>バイス</sup>霊装<sup>ス</sup>を顕現させて声の主に備えていた。

『お、おじいちゃん?』

『……お前ら、漣か?』

『漣? 誰それ? 俺は新城不知火だよ』

『私は新城灯火。珠雫<sup>しずく</sup>ちゃんからお兄さんが見つからないって言われて探しに来たのだから……その子がそうなのかしら?』

珠雫と、妹の名前が出て来た事に反応して龍馬さんの背後から声の主を見ると、黒色の髪をした似通った顔付きの少年と少女がそこにいた。



『新城……あいつの子供だと？いつの間にあいつは漣と結婚したんだ？』

『じいさんの言ってる新城がオヤジのことならオヤジの子供だつてのはあつてる。だけど俺たちは養子でな、本当の親の顔なんて写真でしか知らないんだ』

『“解放軍”に襲われて、私たちを生かすためにお父様に頼んだらしいわよ』  
『ツチ……殺るならきつちり殺りやがれよ』

『それに関しては何感ね。そのせいで私たちは“解放軍”の事を絶滅させたい程に憎んでいるのだから』

その時の灯火さんは笑っていた。不知火も笑っていた。しかしその顔を見た瞬間に身体が震え出す。気温的な寒さでは無い、灯火さんと不知火から滲み出る怒りと殺意を感じ取って魂が怯えていたのだ。

『その辺にしておけよ。お前らや俺はまだしも小僧はそういうのには慣れて無いんだから』

『あら、御免なさい。あのゴミどもの事を思ったらついでね？』

『超ゴメン』

『え？あ、ああうん……良いよ？』

龍馬さんからの注意により2人から滲み出る怒りと殺意は引っ込められた。頭を下げられて謝罪されたので当時の僕は何が起きたのか理解しきれず、ただど許す事にした。

『で、貴方の名前は？』

『あ、僕は一輝です。漢数字の一と輝くって字で一輝です』

『一輝、輝く一か。良い名前じゃないか』

一輝と反芻しながら不知火は僕の名前を褒めてくれた。褒められる事は5歳になる前までしか無かったので照れ臭くて頬を掻く事しか出来なかった。

『実はな、さっきのじいさんの話が聞こえてた。だから俺からも言わせて欲しいー諦めなければいつかきつと夢は叶う。無能だから、天才だからなんて言葉は所詮は甘えだ。確かに基本性能には差が出来るかもしれないけど、そんなものは努力で埋めれば良いだけの話だ。少年よ、不屈であれつてな』

『真っ直ぐ過ぎるのはアレだけど、確かに努力は大切ね。どれだけ希少価値の高い原石

でも、磨かなければただの石ころに過ぎないわ。例え石ころだと言われても自分を磨いて、その中で光る一つを見つけなさい。それが貴方の才能なのだから』

龍馬さんだけでは無く、他にも自分の事を認めてくれる人がいた。初めて会った2人だけど真つ直ぐに、真剣に、真摯に語られる言葉が胸に響いて――気が付けば、枯れたはずの涙が流れていた。

『寒っ!! さっさと帰ろうぜ、良い加減寒くてしようがねえからよ』

『コタツに肩まで入ってぬくぬくしたいわ。蜜柑があれば大勝利ね』

『あ、待つて。僕、家からいない事にされてるから……』

『あくそうだったな。どうするか……』

『よし、だったらあの家に火を付けてホームレス大量生産しようぜ!!』

『待ちなさい、やるなら誰もが酔い潰れてからの方が良いわ。そうすれば事故扱いで私たちが疑われないわ』

『おい小僧、あいつら止めるぞ!! このままだと俺たちまでホームレスになるぞ!!』

『う、うん!!』

黒鉄の家を放火するために帰る灯火さんと不知火、それを阻止するために走る龍馬さんの後を追いながら、僕は目標に向かって進む事を決意した。

「懐かしいなあ、もう12年も前の事か……」

模擬戦の前に精神統一のために瞑想をしていたら龍馬さんと、そして不知火との出会いを思い出してしまった。だけど気分は悪くは無い。寧ろ初心に帰った事で充実しているくらいだ。

相手はステラ・ヴァーミリオン。 プレイヤー 伐刀者 ガ として重要な総魔力量 オーラ は新入生の平均の三十倍、その上全ての能力が平均値を大幅に上回っている伐刀者ランクAの紛う事なき

天才だ。能力が低すぎる上に総魔力量が平均の十分の一しかない僕とは大違いだ。能力値だけを見るのなら僕の敗北は必然。勝てるはずがないと誰もが指を指して笑うに違いない。

だが——それがどうした。

能力値だけで勝敗が決まるわけではない。実際に対峙して、剣をぶつけ合い、最後に立っていた者こそが勝者なのだ。確かにヴァーミリオンさんは強いのだろう。それは理事長室で見たあの一閃からでも見て取れる。不知火はあっさりと片手で受け止めていたが、僕がまともに受ければ吹き飛ばされる事になる。

彼女の強さは理解している、その上で宣言する。

「勝つのは、僕だ」

龍馬さん……英雄あの人のようになると誓ったのだ。Aランクだからと言って負けて良い理由にはならない。僕が勝つ、必ず勝つと意志力を燃やしながらリングへと向かう事に

した。

## 模擬戦

「では——<sup>LET'S GO AHEAD</sup>試合開始!!」

「ハアアアアアアアアアア——!!」

黒乃の開始の合図と共にステラは叫びながら一気に駆け寄り、炎を纏った大剣を振り下ろす。一見すれば力任せに叩きつけられる一撃だが、一輝の目はその一撃に鋭さを見出し、受け止めるのでは無く後方に下がって回避する事を選ぶ。

結果、その選択は正解だった。リングに叩きつけられた一撃で第三訓練場そのものが揺れた。

原因は言うまでも無くステラの一撃。あの時の一撃を躲すのではなくて受け止める事を選択していれば砕けたリングの代わりに一輝の腕がもげていただろう。

「良い目をしてるじゃない。受け止めてたらただじゃ済まなかったわよ」  
「生憎と、目には自信があるものでね」

一輝は自分の能力を正しく理解している。一年前までは自分の事を過小評価し過ぎていた彼なのだが、とある一件によりその考えを改める事にしたのだ。  
「伐刀者<sup>ブレイザー</sup>」としてのスペックは全てステラに劣っている。なら、それ以外で勝ればいい。

「――」

一輝の目がステラを捉える。一挙一動、呼吸すら逃さぬと向けられる視線にステラは気がつかない。ステラは確かに「伐刀者<sup>ブレイザー</sup>」としては優秀なのだろう。しかし実戦の経験が少ないことに一輝は気付いていた。もしも彼女が多くの経験を積んでいれば先の一撃で終わらせるはずがない。そこからさらに繋げて即座に終わらせていたはずなのだ。だが彼女はそこで手を止めてしまった。油断、慢心……恐らくはステラ本人ですら気がついていないであろう心の隙を一輝の目は見逃さない。



「フリー」

ステラの足元に不自然に魔力が集まり、爆ぜた。まるでブースターでも着けているかのような加速で開かれていた距離を一瞬で詰めて大剣を振るう。一閃一閃が炎の軌跡を描きながら一輝を襲う。大剣という重量のある武器であるはずなのに、ステラはまるでそれを棒切れの如く振るう。

その剣戟から逃げられないと悟った一輝は「陰鉄」で防ぐ事しか出来ない。訓練場に響き渡る鋼と鋼のぶつかり合う音。ステラの伐刀絶技「妃竜の息吹」の威光で一輝の身体は大剣が触れてもいないのにその余波だけで焼かれていく。

それは予想されていた展開。F<sup>無能</sup>ランクがA<sup>天才</sup>ランクには敵わないという、常識的な事。だから観客席にいる生徒たちはステラの舞のように美しく振るわれる皇室剣技に歓声を上げ、後ろに後退しながら防ぐだけで手一杯の一輝を嘲笑う。

しかし、ステラは違っていた。この展開は彼女にとってはあり得ない事なのだから。



間合いから逃げていく。どんな強風が吹き荒れようとも柳の枝が折れることが無いように、糠に釘を打つても無駄なように、ステラの剣は一輝には届かない。それを否定しようとして更に力を込めて打ち込んだでも結果は変わらない。ステラが攻め続けて押しているように見えながらも、その実は一輝がステラの攻撃をすべて封殺している。

「逃げるのだけは上手いのねッ!!」

苛立ちを隠さずに、それでいて恐れを隠すようにステラは一閃と共に叫んだ。そう、ステラは一輝に得体の知れない恐怖を感じていた。一輝のやっていることは受け切らずにステラの攻撃を利用して後ろに下がるといふ事。言うのは容易いが行うのは至難の技である。僅かでも力加減を、受ける角度を、タイミングを間違えれば一輝はその瞬間に粉碎されるか斬り伏せられるかのどちらかか待ち受けている綱渡り、それを一輝は顔色一つ変えずに平然とやってのけているのだから。

「なら、攻めようかー」

無言だった一輝がそう呟くのと同時に攻勢に転じた。それは紛う事なき自殺行為。

いくら一輝がステラに技量で勝ろうとも圧倒的な攻撃力を有する重戦車の相手が出来るはずがない。

しかし、彼はその不可能を踏破する。

「く、うツ!？」

一輝が振るう日本刀を防ぐステラが徐々に後退しているのだ。基本スペックはステラの方が優っている以上、一輝の方が力が強いと言うことはあり得ない。すなわち、それ以外の要因でステラは押されているのだ。その理由をステラは即座に看破する。

一輝が振るう剣戟、その途中途中に自身が使っていたはずの皇室剣技インベリアルアーツが見え隠れしている。反撃しようとした瞬間、それよりも先に一輝の日本刀が撃ち込まれてその反撃は封殺される。まるで未来予知を思わせる行動と自身が使っていたはずの皇室剣技インベリアルアーツを取り入れた剣戟、それらがステラに焦りを与えて精神的な余裕を奪い去っていく。

「あり得ない……!! どうしてあなたが皇室剣技そを使えるのよ!? まさか、この試合中に……」

「……その通りだ。君の剣技、覚えさせて貰ったよ」

問いかけの最中にステラの脳裏に浮かんだ最悪の可能性、それを一輝は誇るのでも嘲笑うのでも無く淡々と肯定した。武術には見稽古というその名の通りに見て習う稽古がある。一輝がやった事を簡単に言えばその見稽古でステラの皇室剣技インベリアルアーツを学んだのだ。しかし、それは説明するまでもなく異常なことである。見稽古は見る事に集中しているから出来る稽古である。間違っても試合中に出来るような事ではないし、ましてやそれと平行して自身の動きに取り入れる事など不可能である。

それを一輝はやってのけた。一輝は父親から何もするなと言い渡されていない者として扱われるようになったその日から誰からも何も教えられなくなった。黒鉄龍馬に憧れて彼のようになりたいと剣を習おうとしてもそれは変わらなかつた。だから出来る事を……見る事を続けた。黒鉄の門弟たちが剣を振るう姿を隠れて観察し、それを脳裏に刻み込んで教材とし、誰にも見つかからないように隠れて剣を振るった。そんな事を続けた結果、一輝は大抵の剣術ならば一分も打ち合えばその全てを理解する事が出来る

ようになったのだ。

そして一輝は敵の剣術の上位互換となる剣術を作れるようになり、破軍学園に入学したのだがそこで再会した友人である不知火にそんな物真似をして楽しいのか？ と問われて自分が剣術を侮辱しているのでは無いかと思うようになった。それからすぐに不知火は停学してしまったのでその後のことは彼は知らないのだが、一輝は自分を改めたのだ。

そうして出来上がったのがこれだ。相手の剣術を理解し、優れた点を己の剣術の中に取り入れる。一輝だけの剣術“合成剣技”キメラブレイド。敵対者の剣術が優れていれば優れている程に一輝の剣術は進化し、全てを見通す照魔鏡が如く洞察力にて全てを暴かれているので封殺する事も容易い。

そして一輝の反撃が始まった。ステラは反撃を試みようとするが一輝により全てを暴かれているのでその動作の起りから封殺されてしまい防御に回ることしか出来ない。そもそもたった数分の打ち合いでこれまで自分が研鑽を積み重ねてきた剣術を奪われたステラは、冷静を保てる程に精神は成熟していない。ステラが押されている事に

観客たちはどよめいているが、一番混乱しているのはステラだ。

その混乱を一輝の眼は見逃さない。僅かに握りが甘くなつた事を見抜いて「陰鉄」を振り抜いて大剣を弾き飛ばす。武器を失い無防備になつたステラに目掛け、一輝は「陰鉄」の刃を振り下ろし——不自然な位置で止まつた。

「はあ……やっぱりこうなるのか」

目の前の結果は予想されていた事なので驚愕を見せず、どこか納得した様子で一輝はステラから飛び退いて距離を取つた。そう、この結果は分かり切つていた結果だつた。「ブレイザー伐刀者」はその身体に魔力を纏い、その魔力は鎧の役割を果たす。それ故に魔力を纏う「ブレイザー伐刀者」は魔力の纏つた攻撃でなければ倒せない。つま、一輝の魔力ではステラの魔力を貫けない。だから不自然な位置で止まつたのだ。

「……皮肉な事ね。私が才能だけの人間じゃないって思い知らせるために剣術で挑んだっていうのに、結局は才能に救われるだなんて」

才能……そう、才能なのだ。総魔力量は生まれた時から決まっております、努力云々で伸ばせるものではないのだ。それは一種の天賦の才と呼べる物。

「認めてあげる。アタシが貴方に勝てたのはアタシの才能のお陰だつて。剣士としてアタシは間違いなく貴方に負けている……だから、『伐刀者』としてこの試合には勝たせてもらおうわ」

一輝が努力をしてここまで強くなった事を認め、そして自分は一輝に剣で負けた事を認め……しかし、試合には『伐刀者』として勝つと宣言してステラは最大限の敬意を持って一輝を倒す事を誓う。

「……蒼天穿て、煉獄の焰」

ステラが『妃竜の罪剣』を掲げた瞬間、纏っていた炎がその光度と温度を一層猛らせる。そのあり方は炎という枠組みから逸脱し、光の柱。ドームの天井を溶かし貫き、100メートルを超える光の刃と成る。



「やれやれ、それは人一人を倒すような技ではないだろうに」

「それ程までに一輝の事を認めたとて事だろ？にしてもド派手なのは良いがまだ荒削りだな。いや、荒削りであそこまで行っている事を褒めるべきか？」

「そんな事よりも逃げなくても良いの!?!コレって余波だけでも死ぬるやつだよな!?!」

観客たちが逃げ惑う観客席の中で不知火たちは平然としていた。絢瀬だけは観客たちのように逃げるべきでは無いのかと焦っている。試合では「固有<sup>デバイス</sup>霊装」は幻想形態と呼ばれる人間に対してのみ物理的なダメージを与えず、体力を直接削り取る形態で召喚されていた。しかしそれでも異能にまで制限が掛かっている訳ではない。例えば幻想形態だとしても、あの炎は人を焼き殺す事が出来る。

「馬鹿、ここには俺たちがいるんだぞ？余波どころか直撃が来ても余裕で耐えられる。寧ろここが一番安全だ……おう、働けよロリータ」

「一働き一ベッドで」

「ゴメン、俺がどうにかするから無しで」

「ガツデム」

不知火と寧音のやり取りで絢瀬は冷静さを取り戻し、不知火の言葉に納得して観客席に座り直す。それでも怖いのか、先よりも不知火に近づいているが。

「終わりよ。足掻かずに敗北を受け入れなさい」

光の刃が振り下ろされる間際にステラの口から出た言葉には尊敬と憐れみが込められていた。

尊敬は一輝の努力を讃えて。彼ならば魔導騎士以外のどの分野でも成功を収めることが出来ただろうと。

憐れみは一輝の選んだ道を悲しんで。彼が選んだのはよりにもよって致命的に才能に恵まれなかった魔導騎士の道だから。

「カ  
ル  
サ  
リ  
テ  
イ  
オ  
・  
サ  
ラ  
マ  
ン  
ド  
ラ天壤焼き焦がす竜王の焰」  
「――!!」

絶対的な才能を持って一輝に敗北を与えるべく、終の太刀が振り下ろされた。

自身に滅びを与える光の剣を前にしても一輝は引かなかつた。

自分に魔導騎士の才能が無いことなど、彼自身が一番理解している。

それでも、目指すのだ。

自分が憧れた彼のような……誰かの背中を押してあげられるような人間になりたいから。

才能を理由に諦めなくても良いんだと、自分と同じ境遇の者たちに知ってほしいから。

故に一輝は絶対の滅びを前にして一歩も引かず——光の剣に飲み込まれた。

## 模擬戦・2

「はあ……はあ……」

持てる全ての力を出し尽くしたステラは、その一撃で齎された結果を肩で息をしながら眺めていた。//天壤<sup>カルサリテイオ</sup>焼き焦<sup>オ</sup>がす竜王<sup>サラマンドラ</sup>の焰//の射線<sup>射線</sup>上には、正確にはさつきまで一輝のいた場所には何も残っていない。本来ならば訓練場の壁を破壊してなお止まらぬほどの破壊力を持っていたはずなのだが被害はリング上だけに留まっていて観客席は無傷のままだった。

勝つたと、ステラは勝利を確信した。一輝の姿は見えないものの確かな手応えは感じた。殺してしまつたかもしれないのだが、//伐<sup>ブレイザー</sup>刀者//の戦闘では例え模擬戦だろうとそういう出来事など日常茶飯事。寧ろ、あのまま一輝が茨の道を歩み続けることの方がステラに取っては辛かった。

「はあ……ふう……」

息を整えてステラは視線を観客席に座る不知火へと向ける。観客たちはステラの  
カルサリテイオ・サラマンドラ  
 天壤焼き焦がす竜王の焰で危険を感じたのか誰も残っておらず、観客席には不知火た  
 ちしか残っていない。炎を使った幻影を用いて服の中に入っている寧音のことは隠し  
 ているが、自分の姿は隠していない。だから不知火の姿をステラは見つける事が出来  
 た。

「アタシが勝ったわ。次は貴方よ」

「ふむ、俺と戦いたいと言いたいのか？」

「その通りよ」

ステラ・ヴァーミリオンは強くなるために祖国から日本へと留学して来た。愛国心は  
 あり、ヴァーミリオン皇国を守りたいと心の底から思っている。しかし、あの国では自  
 分の事を“天才”という色眼鏡で見る者たちが殆ど。あの中になれば本当に自分がそ  
 うでは無いかと思ってしまう、自身の成長の妨げになると考えて母親と結託してステラ  
 の事を溺愛している国王を一時的に監獄に収容、その隙に日本に来たのだ。

そんな彼女からしてみれば不知火という人間は待ち望んでいた存在に他ならない。理事長室で加減していたとはいえ、「妃竜の息吹」ドラゴンブレスを纏った大剣の一撃を片手で容易く掴み、3000度という高温を温いの一言で済ませた。恐らくは本気で戦っても敵わない実力者なのだろうと考えていた。

それでもステラは挑む。敗北や失敗は己の糧になる事を知っているから。例え千回負けようとも、千一回勝てば良い。自分が強くなるために、ステラは格上である不知火に挑もうとしていた。

「……成る程、荒削りの原石だがその輝きは一級品。しかも自分からより輝こうと欲する意欲もあるか」

その宣戦布告を受けて不知火は冷静にステラ・ヴァーミリオンという人間を評価した。まだ発展途中でありながらその実力は疑うまでもなく一級品。今は自分たちのような外れた存在には届かないものの、その心を忘れずに強さを求めて研鑽を積み重ねれば間違いなくその領域に届くと。

懐からタバコを取り出し、指の先に火を灯してタバコに火を付ける。一吸い目を深く吸い込み、紫煙を吐き出しながら不知火はその宣戦布告に言葉を返す。

「――断る」

「な――」

それはステラからの挑戦を断る物だった。何故、どうして、自分が弱いからかと混乱するステラに向けて、疑問の言葉を出すよりも先に不知火は違うと口にした。

「別にお前の意思を無下にするわけじゃ無い。強くあろうと、強くなりたくないと願ひ欲して進む姿は実に俺好みだからな。いつもなら喜んで二つ返事で肯定していただろうけど……今はダメだ」

「何よ？まだ終わってないと言いたいわけ？こんな状態で？」

ステラの指差した先にあるのは煌々と燃え盛る カールサリテイオ・サラマンドラ “天壤焼き焦がす竜王の焰” の残り火。直撃した手応えはあったのだ。自分と同じAランクの ブレイザー “伐刀者” や防御に秀でた



能力ならばまだ戦闘可能かもしれないと考えられたのだが一輝のランクはF。生存の可能性なんて奇跡でも起こらなければあり得ない。

「いいや、まだだ。まだ終わりじゃない」

それを不知火は否定する。奇跡などという御都合主義を信じているのでは無い。不知火が信じているのは黒鉄一輝という人間。確かにステラの一撃は一輝を殺すのには十分過ぎる威力を誇っていた。しかし、俺の信じた人間があれで終わるはずが無いと信じている。

だから、まだ終わりでは無いと――

「……そうだ、まだだ」

「……」

その時、ステラの耳は聞こえるはずのない声を、一輝の声を聞いた。不知火の言葉を肯定する力強い声を聞いた。

あり得ない、生きているはずが無い。自身の最高の一撃をマトモに食らっているはず、それなのにあり得ないとその声を否定する言葉で脳内を埋め尽くしながらステラは声がした方向に視線を向ける。

そしてステラは目撃する。  
“カールサリテイオ・サラマンドラ”天壤焼き焦がす竜王の焰の燃え盛る残り火……それを掻き分けるようにして二本の足で歩く一輝の姿を。

「どうして……」

どうして生きているのか。そんな問いかけをするつもりだったが、それは残り火から出てきた一輝の姿を見て理解させられた。

一輝の身体から、可視化出来るほどの魔力の光が溢れていることに。

「ブレイザーの魔力が鎧の役割を果たしている。一輝のした事はそれだ。可視化出来るほどの魔力を鎧として扱い、その身を守ったのだ。それだけでは無い。完全に防ぎきれなかったのか一輝の身体の彼方此方には酷い火傷が出来ている。i P Sカプセル再生槽という四肢や臓器の欠損さえ回復出来る装置か、回復に特化した能力でも無ければ傷跡どころか後遺症が残るほどの重症だと一目で分かる。その重症が——何もしていないはずなのに煙を上げて再生している。煙が止んだ時、そこにあるのは無傷の身体だけだ。」

「んんん……」

何が起こっているのか。それが知りたくて出てきた言葉だったが、その答えを知る者は誰もその問いに答えなかった。

一輝がしている事は至極単純な事、全力で能力を使っているだけ。一輝の異能は数ある「ブレイザー伐刀者」の能力の中でも最低の能力だと評価される身体能力倍加。わざわざそんな能力を持たなくとも魔力を放出することで攻撃力や機動力を上げることが、魔力操作に優れた者ならば能力として持たなくても身体能力を強化することが可能だから。

故に、一輝は普通の使い方をしていない。

一輝は、生物ならば持つていないはずの生存本能リミッターを意図的に解除している。

本来人間が全力を出したところで出し切った瞬間に気絶するわけでは無い。そうならないのは生物が本能的に自分を生かそうとする生存本能リミッターが存在しているから。だからどれだけ全力を尽くすと決めたところで、本能はそれを許さずに生物としての機能を果たすための力を残している。

天才と呼ばれる者たちと自分では努力だけでは埋められない差がある事を一輝は理解している。その差を埋めようとするのなら、普通でいられるはずなどない。

狂気を——心を修羅にしなければ、それを覆せるはずが無い。

だから一輝は修羅になった。意図的に生存本能を解除して本能的に残されていた体力、筋力、魔力を強制的に引き出して活用する愚行。魔力が跳ね上がった事で副作用として得られた驚異的な再生能力。たった一分だけ、言葉通りに全力を尽くす事で全ての能力を数十倍も引き上げる伐刀絶技。ノウフルアーツ

「“一刀修羅”、それがこの技の名前だ」

一瞬、瞬きの間に一輝はステラとの距離を詰めて“陰鉄”を振るった。ステラの反応速度を超える速度で振るわれた一閃を“天壤焼き焦がす竜王の焰”カルサリテイオ・サラマンドラを使つた事で疲弊しているステラが避けられるはずもなくその身で受ける。そしてステラは呻き声一つこぼす事無く、足元が崩れ落ちるような感覚とともに意識を失つた。

「そこまで!!勝者、黒鉄一輝!!」

不知火たちを残して誰も居なくなった訓練場にレフリーである黒乃の声が響き渡る。

その宣言を聴くものは数人しかおらず、誰も一輝の事を見直そうとする者はいない。

しかし勝ち得た勝利を嘯み締めるように、勝者である一輝は“陰鉄”を持たない手を天に掲げた。

## 鍋パーティー

「ハイ、乾杯あい」

「乾杯あい!!」

「乾杯です」

「ええ……いや……ええ……」

黒鉄君とヴァーミリオンさんとの模擬戦は“一刀修羅”という隠し球を持っていた黒鉄君の勝利で終わった。Aランクを圧倒する剣術に、最低の能力だと言われている身体能力倍加を別次元と呼べるような位にまで昇華させた伐刀<sup>ウツブル</sup>絶技<sup>アイツ</sup>。天賦の才能を持つヴァーミリオンさんとは違う、無能であるか故に持ち得た狂気としか言えない努力の果てにヴァーミリオンさんを倒した彼に、新城君以外にもあんな人間がいるのかと呆気に取られ、そしてもしかしたら父を上回るかもしれない程の剣の腕前を持っている事に興奮し、気が付けば夕食時になっていた。

何時もは食堂で食べるので今日もそうしようかと思つていたが、新城君が親睦会のもりで自分が作りたいと申し出たのだ。断る理由も無いのでその申し出に了解し、彼が作つた鍋を新城君と彼の妹である火乃香ちゃんと一緒に食べるつもりだった。

「ん、どうしたんだ綾辻？早く食わないと食べられてしまうぞ？今丁度いい具合になつてるんだ……ああ待て火乃香、肉だけじゃなくて野菜も食べる。おいこら合法ロリ、てめえは酒ばかり行くのを止める。タダでさえ未成年飲酒の絵面なのに理事長に飲ませる酒が無くなるだろうが。ついでに俺の皿に白滝ばかりを放り込むのは止める」

「いや、自然な流れで座つてる西京先生に驚いてね……つて待つて、新宮寺理事長も来るの？」

鍋を食べる為に出した折り畳みテーブルを、さつき上げた2人以外に西京先生が座つている事に呆氣に取られてしまつていた。しかも当たり前のように理事長まで呼んでいたらしい。よく見ればテーブルは一人分空けられていて、そのスペースには伏せられた椀とコップ、箸が置かれている。

「固い事言うなつて不知火。ほら、絢瀬ちゃんだつてなんて言つたら良いのか分から



ない顔してるぜ？」

「それは見た目未成年の合法ロリが平然と飲酒してるからだろ？」

「いや、当たり前のように西京先生がいる事と理事長を呼んでる事なんだけど……」

「ああ、折角飯食うんだつたら大勢で賑やかに食った方が楽しいだろ？だから呼んだ。事後承諾になつて悪かつたな」

「……うん、そう言えば新城君はそんな人だったね」

彼との付き合いは彼が乱闘騒ぎを起こした時に知り合つてほんの数日程度だが、それでも新城君という人間を知るのには十分過ぎる時間だった。

彼は良くも悪くも自分本位な人間なのだ。多少は他人を気遣う事も出来るのだが、それでも最終的には自分の価値観や物差しによつて物事を判断して行動に移す。それが一般的な価値観から見れば善であるうが悪であるうが、彼はそれを理解した上で行動する。それをしてどんな結果になろうとも、彼は満足気にしてその結果を受け入れるだけだ。去年の乱闘騒ぎで学校から停学を言い渡された時だつて、彼はやらかしたと落ち込むだけで学校に文句一つ言わずにそれを受け入れていた。

「はあ……新城君、ボクにもお酒頂戴」

「酒なら一通り揃えてあるから色々あるぞ。何が良い？」

「甘い」

「ほい、カクテル。ああ、明日から頼まれてた事するから飲み過ぎるなよ。例え二日酔いだろうが無理矢理やるから」

「ん？今ヤルって言った？」

「言ってねえよ!!良い加減にしろよこの色ボケロリータ!!」

やんわりと注意されたが、それでもお酒に逃げたい気分だったので渡されたカクテルの缶のプルタブを開けて中身を飲む。新城君と同室になり、ボクの頼みを聞いてくれるので長い付き合いになるのは分かりきっている。

だから彼の行動に慣れるまでの間、こうしてお酒に逃げてもバチは当たらないはずだ。

「ふう、飲み過ぎたか」

「うん、普通に飲み過ぎだよ」

「お前が美味しい酒ばかりを持って来たのが悪い」

鍋パーティーを始めてからしばらくして理事長が合流し、そこから本格的な飲み会が始まった。理事長が来る前から日本酒を水のように飲んでいた寧音は一番早くに潰れ、酒は飲んでいかなかったが就寝時間が来た事で火乃香が2番目に寝落ちした。強い酒は飲まずに度数の低いカクテルばかりを飲んでいた綾辻は3番目に寝落ちしたのだが、酒に慣れていかなかったのか2本目辺りから目が据わっていたのが少しだけ怖かった。

俺は加減を心得ているので時折お茶などで休みを入れながら飲んでいたのだが、理事長はほぼノンストップで飲み続けていた。酔っているのか僅かに顔を赤らめているの

だが、彼女の周りに転がっている酒瓶や空き缶の量からしてそれだけで済むはずが無いのだが。

「それにしても綾辻とも知り合いだったとはな、意外と交友関係はあったのだな」

「クソみたいな風潮が蔓延ってるこんなところでも頑張ってる奴はいたらしくてな。向こうから声をかけられて友人になったんだよ。後もう一人親友がいるんだけど、そいつは明日にでも声をかけたら良いな」

アルコールを入れたので頭の中に霞がかかったようになり、それまで付けていた敬語が完全に外れてしまっている。目上の人間に対してタメ口という無礼を働いているのだが完全にオフ状態になっているのか、理事長は何も言わずに缶ビールを煽っていた。

「……なあ新城。一つ気になっていたことがあるんだが、お前は一体何が気に入らずにあの事件を起こしたんだ？」

「理由ならあの時に話したはずだから調べれば分かるはずだけど？」

「お前の口から直接聞きたいんだ」

去年の事件の後の取り調べで一応俺があれを起こした理由については話してあるのだが、理事長は俺の口から聞きたいらしい。断る理由も無いので空になったグラスに日本酒を注ぎ、それで口を湿らせる。

「ん、中々美味いな……理由なんてたつた一つだけだよ。気に入らなかつたからだ。努力と怠惰、そのどちらも人間として当たり前の行為だから個人的には前者の方が好きとは言え俺は気にしちやいない……だけどな、他人の足を引っ張る奴は許せないんだよ」

俺が入学して来た時の破軍学園は最悪だつた。未来を見据え、それに向かって努力している人間はたつたの一握り。残りは高い数値の書かれたカタログスペックに満足したり、自分よりも優れた者を見てあれは自分達とは違う人間なんだと諦めたり、自分よりも劣つた者を虐げて悦に浸っている者ばかり。当時の理事長がランク至上主義だつた事も拍車を掛けていたのだろうが、その時の俺はそんな光景を、ランクが低いからという理由で虐げる自称強者たちを見ていただけで吐き気が止まらなかつた。ランクが低い者たちはそのことを理解していて、どうにかしようと思つていた。しかし自称強者たちがその努力に唾を吐き掛け、その努力を無意味だと嘲笑い、その努力を無価値だと踏み躪つた。自分の意思でその場に留まることを選びながら、前に進もうと思つて

いる者たちの足を引つ張る。それが俺は許せなかったのだ。

だから俺は自称強者たちの性根を叩き直すつもりで全学年の一定ランク以上の生徒たちを挑発し、一輝とヴァーミリオンがやったような模擬戦を行った。中には俺が見つけたマトモな人間が混じっていたがその全てを叩き潰し、その結果俺はやり過ぎだと言うことで無期限の停学処分を受けた。本来ならば退学になってもおかしく無いと思っただのだが、恐らくは当時の理事長が俺に恩を着せる事で手駒にでもしたかったのだろう。もつとも、俺は恩など欠片も感じておらず、理事長は解雇されたのでその企みも無意味なのだが。

「言葉で言っても分からないのなら手を出すしかないだろう?」

「そうして手を出した結果がああ、の乱闘騒ぎか……で、それでどれだけがお前の思惑通りになった?」

「さあな、分からん。だけど今日訓練場に来ていた奴らはダメだな。俺の言った事を、俺のやった事を覚えているはずなのに一輝の事を笑っていた。全く、嘆かわしい事だな」

「お前は、全ての人間に黒鉄のようになって欲しいのか?」

全ての人間が一輝のようになる。成る程、それは俺好みの光景だ——実に吐き気がする。

確かに黒鉄一輝は無能でありながら狂氣的とも言える努力によりヴァーミリオンを倒すまでに強くなった。その努力は実に好ましいものだが、その努力が異常であると理解している。あれは一輝だからこそそのものであり、誰もが気軽に手を出していいものは無い。そんな世界は楽園などではなく、ただのデイストピアだ。

「馬鹿を言うなよ、そんな世界は存在しちゃいけない。俺はただ、少しでも良いから前に進んで欲しいだけだ。昨日の自分に胸を張れるような、そんな自分になって欲しいだけだよ」

「……成る程、新城不知火おまという人間の事を少し分かった気がする」

「こんな問答で知られる程に俺は浅い人間じゃないぞ？」

「だから少しと付けてるんだ。お前の事を完全に理解出来る人間なんて、私が知る限りでは寧音くらしいものだ」

「付き合いが長い上に、向こうから踏み込んでくるから自然と知られるんだよなあ……」

寧音との出会いを思い出しながら、俺の膝の上で空いた酒瓶を抱えながら眠る寧音の頭を撫でる。苦手だと口になっているが、俺は彼女の事を嫌っている訳ではない。そもそも嫌っているのなら、襲われるとはいえ身体を許すような事はしない。少なくともそういう事をされても良いと思う程に俺は寧音の事を好いている。

「だけど俺、惚れてる奴がいるんだけどね」

「む、惚れてる相手がいるのに寧音に襲われてるのか？」

「襲われてる。その事をちゃんと伝えたのに逆に興奮するっていつもよりも搾り取られた」

「まあ、その、なんだ。元氣出せ」

「その優しさが辛い」

嫌いじゃないけどその肉食っぷりを少しでも抑えて欲しい。湧き上がるそんな思いを押し込めるように中身の残っていた酒瓶に口を付け、一気に飲み干した。



## 新たな季節

まだ寒い四月の早朝。日課である20キロのランニングを済ませて破軍学園の正門の前に置いておいたスポーツドリンクを口にする。魔力方面の才能が無いので僕が他の「<sup>フレイザー</sup>伐刀者」と戦うためには肉体方面で補うしか無いと普通の人よりも過剰なトレーニングをする事になっているのだ。

スポーツドリンクで乾いた喉を潤して後ろを振り返れば、そこにはフラフラになりながらもステラが着実にゴールとしていた正門前に近づいていた。世間では彼女の才能ばかりに目が向けられているが、その姿を見れば彼女は才能に頼り切らずに自分を鍛えていた事がよく分かる。

ただの負けず嫌いだという可能性もあるけど。

「お疲れ様、3日目にしてようやくゴール出来たね？」

「はあ……!!はあ……!!」

劣りの言葉を掛けてスポーツドリンクをコップに入れて差し出すと彼女は引っ手繰るようにコップを奪って一気に飲み干した。3日前からステラとは同じ部屋で生活する事になり、僕のトレーニングにも付いて来るようになったのだが、僕のトレーニングは普通では無いと自覚している。

そのせいか、1日目は途中で倒れた。

2日目は半分ほど走ったところで蹲って吐いた。

そうして3日目になり、体力は使い果たしているが彼女は僕のトレーニングに付いてきて、見事に完走した。

一歩も動けないと息を切らせてその場に座っているステラから目を逸らし、正門に立て掛けられた始業式と書かれた看板に視線を向ける。

「ようやく始業式か……」

始業式、新たな季節の始まり、それはとても感慨深いものがある。去年は実家からの妨害により、何のチャンスも与えられずに過ぎすしか出来なかつた。不知火という旧友と再会出来たことは嬉しかったが、彼はあの時の学園の有り様に我慢が出来ずに暴れ、僅か一ヶ月で停学という形で別れる事になった。その時に掛けられた言葉が、僕を氣遣つて残してくれた置き土産が去年よりも僕を強くしたことは自覚している。だけど、去年は何もする事が許されなかつた。

しかし、今年は違う。破軍学園を立て直すために就任した新宮寺理事長の掲げる完璧な実力主義、徹底した実戦主義の元に全ての生徒に等しくチャンスが与えられる。『七星剣武祭』に出場し、これに優勝する。それくらいしなければ僕の憧れた黒鉄あ龍馬ののようになれないと考えているし、新宮寺理事長との取引で能力値が低くて卒業が見込めない僕は『七星剣武祭』で優勝しなければ破軍学園を卒業する事が出来ない。

待ち望んでいたチャンスの到来に冷静になろうとしても自然と興奮してしまう。まだまだ未熟だと情けなく思うが、不知火がこれを知ったら善き哉善き哉と笑つて肯定するだろう。それに、気分が高揚している理由はそれだけでは無いのだ。

「はあく……なんだか楽しそうね、イツキ」

「そう見える？」

「いつもよりも雰囲気が柔らかい感じがするわ」

「そっか……実はね、今年から僕の妹が破軍に入学して来るんだよ」

「イツキの妹さん？」

黒鉄珠雫くろがねしずく、四年前に僕が実家から飛び出したつきりご無沙汰だった僕の妹。人見知りなのか僕の後ろを小さな歩調で付いてきた、銀髪ツインテールの彼女の姿は今でも思い出せる。泣き虫で、寂しがり屋で、甘えん坊だった彼女は、存在しない者として扱われていた黒鉄の家で唯一僕の事を無下に扱わずに接してくれた人間だった。久し振りに会えるとなると、嬉しくならないはずがない。

不知火と珠雫を会わせる事による化学反応が不安なのだが、きつと大丈夫だと信じてたい。

「どうしたの？顔が青くなってるわよ？」

「何でもない!!何でもないから……!!」

無意識の内に想像してしまった未来を全力で消去していると、僕らが走ってきた方角から硬い物がぶつかり合う音が聞こえてきた。小さかった音は断続的に続き、徐々に大きくなっていく事から近づいている事を知らせていた。

そして、木刀を握っている不知火と西京先生が、木刀をぶつけ合いながら高速で僕らの前を通り過ぎて行った。

再び遠くなる木刀のぶつかり合う音。2人とも片手で持つて無造作に振るっている様に見えるながらその一振り一振りが一撃必殺を意識している。いかなる歩法を用いているのか、たった一歩で数十メートルの距離を移動しながら彼らの姿は見えなくなつた。

「天才と強い事はイコールじゃないって思い知らされたわ……」

「ステラ、深く考えたら駄目だよ。不知火の事を下手に理解しようと思つたら後悔する事になるから」

僕らが早朝にランニングをしているように、不知火も西京先生が暇な時にああして身体を動かしている。しかし、あれは彼からすればウォーミングアップでしか無い。振るっていた一閃一閃は一撃必殺を意識していたが、どれも力が込められていなかった。途中途中で遊んでいるかのようにアクロバティックな動きをしていた。

全く持つて規格外、10年に1人の天才騎士だと言われたステラでさえ、彼らと比べれば十把一絡げとして扱われる事になる。天才や無能などという括りなど歯牙にもかけない存在、その内の1人である不知火が“七星剣武祭”に出る事を考えれば――全身の血が滾る。

不知火と剣を交わしたのは一度だけ。負けはしなかったが勝ったと言えない結果で終わってしまった。だから、次は勝つと決めた。

確かに彼は強い。しかし、そんな事を理由に僕の夢を諦められるはずが無い。すでに僕は諦める事を諦めている。彼に敵わない事が運命だというのなら、その運命を粉碎して進むまでだ。

「僕が勝つ。『勝つ』のは僕だ」

いずれ訪れるであろう不知火と『七星剣武祭』の舞台上で対峙する光景を想像しながら、僕は小さく勝利を誓った。

しばらくしてから服が役目を果たすギリギリまでボロボロになっている不知火が西京先生の顔を壁に押し当てながら走って来たのを見て膝から崩れ落ちる事になるのを知らずに。

## 新たな季節・2

「はい、新入生の皆さん!!入学おめでとーっって言いたいんだけど、なんで新城君は初日からジャージ姿なのかな？」

「合法ロリに制服ポロポロにされてひん剥かれそうになったから」

2度目の一年生を始めるに当たって担任となった顔色の悪い若い女性教師、折木有里おれきゆうりが1人だけジャージを着ている俺の姿を見て質問されたので素直に答える。朝一の運動の時に制服を着たまま寧音を相手にして動いていたのだが、その時に寧音に襲われそうになり、抵抗した結果、制服が服としての役割を果たせなくなるほどにポロポロになってしまったのだ。新しい制服の申請はしているが発送の関係で半日ほど掛かるらしく、それまではジャージで過ごせと理事長からも許可を貰っている。一応罰として紅葉おろしを学園の外壁一周分を実行したのだが、寧音は傷一つつかないで逆に恍惚とした顔になっていた。



そして質問に答えた時に合法ロリというワードに反応して一部の男子生徒が席から立ち上がり、女子生徒から絶対零度の視線を向けられて半分ほど着席した。

残り半分は絶対零度の視線にも負けずにいた猛者なのだが、一部の女子生徒が対抗意識から制服の上着を脱いで胸を強調するポーズを自然に行う事で正気に戻して座らせていた。

「……私が1年1組の皆さんの担任をさせていただき、折木有里です。ユリちゃんって呼んでね!!」

「お、さっきのこと無かったことにしたぞユリちゃん」  
「不知火……止めるんだ……!! さっきの芸風は彼女には早過ぎる……!!」

確かにさっきのは理事長や寧音ならさらりと流し、月影さんなら苦笑いで済ませそうなのだが折木先生はまだそんな対応が出来るほどに教師歴が長く無いので無かった事にしたのだろう。

寧ろ、そんな状態でよく教師をやろうと思ったと感心する。

一輝の様に数合打ち合っただけで相手の剣術全てを見通せる様な観察眼は持つてはいないが、それでも目には自信がある。そんな俺の目からして、彼女の状態は奇跡の様な物に見えた。『七星剣武祭』の代表を決める選抜戦の説明を流し聞きしながら話す折木先生の身体を観る。彼女は身体中を病魔に侵されていた。全身の至る所に何かしらの病気を患っている。しかもタチの悪い事にそのどれもが重症ではあるが致命的ではない。こうして教壇に立って話しているだけで絶え間ない苦痛を味わっているはずなのに、折木先生は顔色を悪くしながらも笑顔で振る舞っていた。常人ならば発狂してしまう苦痛の中で、彼女は笑っている。何が彼女をそこまでさせているのかは分からないが、その意志力の強さには感服するしか無い。

俺が片思いしていなければ、口説いていたかもしれないとあり得たかもしれない未来を想像して思わず笑ってしまう。

「じゃあみんな、これからの1年、頑張ろお!!はーいみんなと一緒に……えいえい、オブアアアーツ!!」

……そんな未来を想像していたのがいけなかったのか、折木先生が突然吐血し、目の前にいた俺はその血を頭から被る事になってしまった。これは片思いしているのに他の女性を口説こうかと考えてしまった罰なのだろうか。寧音とやった時にはこんなことは無かったのだが、やっぱりあいつは論外らしい。これからは他の女性に移りしない様にしないと。

「「ゆ、ユリちやあああああん!?!」」

「あー大丈夫大丈夫、みんな落ち着いて。折木先生ってものすごい病弱で良く吐血するから」

「せ、先生の日課は1日1リットルの吐血だから……」  
「嫌な日課もあったもんだな」

ジャージの袖で顔を拭って視界を確保して席から立ち上がり、口の端から血を流している折木先生に肩を貸す。

「ちよつとこれの処理のついでに先生を保健室に運んでくるから、後片付け任せても良いか?」

「うん、僕がやっておくよ」

同じクラスになっていた一輝がそう申し出てくれたので任せる事にして、ダウン寸前のボクサーのようになっていた折木先生を連れて教室から出る。

「ありがとう、それとゴメンね新城君……折角のおめでたい日に頭から血を被せたりして……」

「ジャージのクリーニング代は先生持ちでお願いします」

「ゴフーーーーッ」

「吐血すりゃあ許されると思うなよ……ッ!!」

クリーニング代のワードを聞いた瞬間に折木先生は再び吐血して今度は俺のズボンが真っ赤に染まる事になった。

「はあ……始業式から災難だった」

折木先生を保健室に運び、途中で見つけたシャワー室で服ごと血を洗い流す。まだ赤いシミがジャージの彼方此方に残っているが、それでもさっきまでの全身真っ赤っかよりは良いだろう。クリーニング代の要求は本当なら本人にしたいところだが、あの様子だとその話を持ちかける度に吐血しかねない。理事長に彼女の給料から天引きしてもらえないか相談することを心に誓う。

能力である炎で手早く服を乾かしながら午後からの予定を考える。折木先生から今日はこれで帰って良いと言われたのでこれを教室に残っている生徒たちに伝えた後はフリーになるのだ。先ずすることは理事長に預けていた火乃香の回収、次に頼んでおいた制服の受け取り。残った時間は綾辻の特訓に回すか。

綾辻との特訓はひたすら俺との模擬戦をするだけだ。訓練場が確保出来ればそちらでやるのだが今日は難しそうだから空いている場所でやる事になるだろう。綾辻が力尽きるまで続け、しばらく休憩をしてから再開する。綾辻はキチンとした師匠がいるからかすでに土台は出来上がっていた。だから後は経験を積んで習い修めた物を自分の物として磨く事だけだ。その為には模擬戦が手っ取り早い。本当だったら能力有りて殺し合いをさせた方が早いのだが、流星にそれが出来るほどに精神が成熟していないで断念した。それを綾辻は文句一つ言わずに素直に従ってくれている。オヤジから教わったやり方とは全く異なったやり方だが、日に日に綾辻が成長しているのを感じられる。

今日はどこまで強くなるのか、明日はどれだけ強くなれるのか、綾辻の成長を楽しみにしながら教室に辿り着くと、その目の前には1組の生徒たちが廊下に出て教室を覗き込んでいた。

何事かと思いながら人混みを断りを入れながら掻き分けて教室を除くと――そこには銀髪の小柄な少女にキスされている一輝の姿があった。

## 新たな季節・3

私は他人という存在が嫌いだ。人間嫌いと言えるレベルだと自覚しているがそれは先天的なものでは無くて後天的な物だ。

私がそうなったのは四年前、兄である黒鉄一輝が家出をした後の事。当時から兄が両親や家の者たちから嫌われていると思っていたが、彼らは何も言わずに姿を消した兄を探すどころか心配する素振りすら見せずにいつも通りの生活を送っていた。兄が居なくなつた事を私が告げ、探さなくて良いのかと訊ねても帰ってくる返事はいつも同じだった。

あんな無能、居なくなつたところで構いはしないと。

その時になって私は初めて兄は嫌われているのでは無くて居ない者としても扱われている事を理解した。唯一、一番上の兄だけは興味無さげにしながらも折れるのならば

それまでの人間だっただけだと言っていたのは覚えている。

そこから私は兄以外の黒鉄の一族に、そして他の人間に対して怒りを抱き、気が付けば嫌う様になった。

そして去年の春、私は偶々一族の人間たちが会議をしている部屋を通りかかった時に兄が破軍学園に入学した事と、奴らが黒鉄の家からF落ちこぼれランクを出すのは恥だという訳の分からない理由で兄の未来を邪魔しようとしているのを聞いた。何故才能が無いという理由であんなにも優しい兄を蔑ろにし、あまつさえ家を出て黒鉄との関係を断った彼の邪魔をしようとするのか私には全くもって共感することが出来なかった。

だから私はある決意をした。

禁忌タブーも何も知ったことかと。

誰も彼も兄を見ようと、愛そうとしないのならそれでいい。

私はお前たちにもう何一つとして望まない。

誰も彼の事を愛そうとしないのなら――その分、私が彼の事を愛そう。



例え世界が兄の事を認めようとしなくても、私が彼の事を認めてその背中を押してあげよう。

そう決めたから私の行動は早かった。当時中学3年生だったので進路先を破軍学園に変更し、兄の力になる為に「伐刀者<sup>ブレイザー</sup>」としての鍛錬に一層励んだ。黒鉄の一族はそんな私を見て顔色を伺いながら褒めちぎっていたが、奴らの言葉など何一つ響く事はなかった。

しかしそれでも私が破軍学園に入学するまでの一年の間、兄は周囲を敵に囲まれて過ごす事になってしまう。なので私は兄以外に友人と認めていたあの人に連絡を取って頼んだ。

どうか私が入学するまでの間、兄の事を守って欲しいと。  
それに対して彼は難しいと答えた。

理由を聞けば当時の破軍学園の状態は彼からしてみれば最悪のものだったらしく、今は我慢しているが近いうちにその我慢も限界を迎えて行動を起こし、最悪退学するかも

しれないからだと答えた。どうにかならないのかと涙まじりに懇願すれば彼はしばらく電話越しで悩み、彼の友人に兄の事をあえて虐めさせる事で、被害を最低限に出来るかもしれないと言った。普通ならばそれで周囲が増長して虐めが一層酷くなるのが目に見えているのだが、その友人というのは現在の破軍学園でも優秀な部類に入るらしい。ランク主義者の蔓延る破軍で、そんな友人の機嫌を損ねようとする者はいないかもしれない、それが考えられる最善だと言った。

そして彼は言葉通りに乱闘騒ぎを起こし、無期限の停学処分になり破軍から離れた。定期的に伝えられる彼の友人から彼を通して聞いた限りでは、彼の目論見通りに兄の事を表面上で虐めているのは彼の友人だけだとの事、しかし言葉までは止めることが出来ずに兄は常に悪意のある言葉をぶつけられている事を告げられた。

そんな兄の境遇に周囲の存在に、そして何も出来ない自分自身に怒りを抱きながら私は鍛錬に励んだ。言葉通りの意味で血反吐を吐いた事もある。だが、そんな苦痛は今も破軍学園で味方のいない中で折れずに戦っている兄の事を思えば耐えられた。

兄の事を想いながら、定期的に伝えられる話を聞き、鍛錬に励み、ようやく私は破軍

学園に入学することが出来た。入学試験の時に魔力制御がどうのこうのと周りが騒いでいたのだが、私の関心は別の所にあつた。

それは破軍学園の理事長と数多くの教師が解雇されると言う話題だつた。以前の破軍学園の理事長は黒鉄からの圧力に屈したのか、それとも賄賂でも渡されたのか、兄を学園から卒業させない為に実戦教科を受講する最低水準を新たに作つて、兄だけ授業を受けられないようにしていた層だつた。恐らくは解雇された教師も前理事長に同調していた層で、新理事長の琴線に触れて一掃されたのだろう。しかもそれだけでは無い。新理事長の意向により、彼が無期限の停学処分を解かれて学園に戻つてくると連絡があつたのだ。それも私と、単位不足で留年させられた兄と同じ一年生として。

期待に胸を膨らませながら破軍学園に入学すると、学園内はとある話題で持ちきりだつた。それは、FランクがAランクを倒したというもの。映像などの証拠は無く口伝で語られる物だつたが、最低ランクの「ブレイザー伐刀者」が最高ランクの「ブレイザー伐刀者」を倒したという下克上ジャイアントキリングに誰もが興味を惹かれていた。

Aランクが誰なのかは知らないが、Fランクの「ブレイザー伐刀者」はこの破軍学園にはたつた

一人しか存在しない。私の最愛の兄だけだ。なのでつまらないホームルームが終わると同時に教室を飛び出し、彼から聞いていた兄の教室へと向かった。四年ぶりに会った兄は当然の事だが私の記憶の中にある兄よりも成長していたが、優しげな顔つきは変わっていないかった。

なんと声をかけて良いのか分からず、だけど愛おしさだけは募っていきーー気が付けば、私は兄の唇に自分の唇を重ねていた。

「なんか少し目を離した隙に面白い事になってるな」

折木先生を保健室に運んで浴びた血の処理をして戻ってくると一輝の妹である黒鉄珠雫くろがねしずくが実の兄である一輝にキスをし、それに嫉妬したヴァーミリオンが珠雫を引き剥がして言い合いをしていた。突然にあつたことらしく一輝が珍しく動揺していた。俗に言う修羅場的な光景で、止めるのが良いのだろうが面白いので放置しておく事にして荒れている教室を見渡す。

「ねえ、何でこんなに教室が荒れてるの？」

「あ、ああ……黒鉄先輩が女子に囲まれているのが気に入らないからってあそこにいる5人がちよつかいかけたんだよ……って、新城先輩!」

「説明どーも。あとそんなに畏まらなくて良いからな? そう言う場面なら兎も角、堅苦しいのは苦手なんだよ。もっとフランクにあだ名で呼んで良いのよ?」

「じゃあフランクで」

「誰がフランクをあだ名にしろと言った」

初めは俺が留年しているからなのか固かったクラスメイトの男子だったが適応能力は高かったらしく、すぐに対応が柔らかくなった。だけどフランクというあだ名は許さ

ない。

「えっと、新城先輩。ユリちゃん先生は大丈夫なんですか？」

「保健室に運んだら手慣れた手つきで点滴刺してたから大丈夫だと思うぞ？ ああ、今日はこれで終わりらしいぞ」

「分かりました。みんなに伝えておきますね？ あ、私は日下部加々美くさかべかがみです」

「丁寧にも。俺は新城不知火だ、好きに呼んでくれ」

軽く自己紹介を済ませ、日下部と名乗った眼鏡をかけた女子は折木先生からの伝言を隣にいた生徒に伝えた。これで伝言ゲームのように一年一組の生徒に帰って良い事が伝わるだろう。それでも日下部は帰らずに、教室で行われている修羅場の見学に勤しむ事を決めたらしい。

「いやあ、それにしても凄いですね。ヴァーミリオン皇国の第二皇女のステラ・ヴァーミリオンさんと新入生次席の黒鉄珠雫さんが留年したフランクの黒鉄先輩を取り合うなんて」

「改めて説明されると業の深い修羅場だよな……面白いから放置するけど」

「それは同感です」

他人の不幸は蜜の味というのは常識らしい。

「飛沫けーー〃宵時雨〃」

「傅きなさいー〃姫竜〃の罪劍〃」

「つて、なんか〃固有〃靈装〃顕現してゐぞ」

「あゝこれは不味そうですね」

ヴァーミリオンが炎を纏う大剣を、珠雫が小太刀を構えて睨み合っている。一触即発の空気の中、一輝が何とか言葉で止めようとしているが2人は聞く耳を待とうとしない。

2人が周囲への被害を考えずにぶつかれば専用の備えのしていない教室なんて簡単に吹き飛ぶだろう。理事長の能力があれば簡単に直せる事は知っているが、流星にこれ以上は見過ごす訳にはいかない。

なので日下部が避難を始めているのを尻目に教室へと入り、斬りかかろうとしている2人の間に割って入って、<sup>デバイス</sup>「固有霊装」を掴む。

「……何のつもりよシラヌイ」

「いやね、流石に<sup>デバイス</sup>「固有霊装」出したとなったら止めない訳にはいかないからな」

「止めないでください不知火さん。お兄様を誑かすその雌豚を排除しなくてはいいですから」

「教室では止めろと言ってるんだ。せめて訓練場でやれ。でないと校則違反で処分食らうぞ?」

「ねえ、何でもつと早くに止めてくれなかったのさ」

「修羅場が面白かったから」

「不知火イツ!!」

しばらく2人からは睨まれていたのだが、俺が引くつもりは無いと理解したのか溜息を零して<sup>デバイス</sup>「固有霊装」をしまう。

「……訓練場に行くわよ。シラヌイに感謝なさい」



「貴女と同意見なのは気に食わないですけど流石に不知火さんに迷惑を掛けるわけには  
いかないですからね。それでは不知火さん、この雌豚を殺してから改めて挨拶に伺いま  
すので」

「おー頑張れよー」

一番の望みはこれで2人の頭が冷えて落ち着いてくれる事だったのだが流石にそこ  
までは冷静になれなかったらしい。ヴァーミリオンと珠雫は殺意をばら撒きながら教  
室から出て訓練場に向かっていった。

「……不知火、そういうえば訓練場って事前に使用を申請しないと使えないんじゃないか  
つたつて？」

「知ってる」

一輝が言ったように訓練場を使うには事前に申請しておく必要がある。それを知っ  
ていて、俺はあんな提案をしたのだ。

「使えないって分かったらその場で始めるんじゃないかな？」

「それでも校舎内で暴れられるよりはマシだろ？」

そして数時間後、2人は校外で“固有<sup>デ</sup>霊装<sup>パイス</sup>”を使用して近くを通りかかっていた寧音に鎮圧され、校則違反という事で一週間の停学処分を食らうことになった。

## ガンジー怒りの解脱

「不知火さん、あの雌豚をどうにかして学園から排除する方法を思いつきませんか？」

「残念だけど思い付かないな」

「そうですか……使えない」

「毒を吐くのは構わないが、せめて俺に聞こえないように吐けよ」

珠雫の停学処分が解けた翌日、彼女は夜になると俺の部屋にやって来て開口一番にとんでもない相談をして来た。どう考えても玄関先でする話ではないので珠雫を部屋に招き入れ、座布団を敷いてそこに座らせる。

「いやね、何も考えずに排除する方法なら幾らでも思い付くんだよ。だけどヴァーミリオン皇国との確執とか、一輝が傷付かない方法でとか条件が付くとゼロになるだけだ」  
「お兄様……」

ヴァーミリオンとの模擬戦で一輝は彼女と賭けをしていた。負けた方が勝った方に服従するという内容だったが、なんやかんやあってヴァーミリオンが一輝の友人になるという事で落ち着いたらしい。しかし、側から見させて貰えばヴァーミリオンは一輝に對して女の顔をしているのが分かる……つまりは、ヴァーミリオンは一輝の事を異性として意識しているのだ。

黒鉄の家の事が原因で、一輝に對して行き過ぎた愛情を向けるようになった珠雫からしてみればヴァーミリオンの存在は不愉快極まりない。黒鉄一輝という人間を才能の有無で差別しないという点に関しては喜ばしいかもしれないが、そんな理屈で納得出来るようなものならば彼女はここまで拗らせはしなかつただろう。

来客用の湯呑みを出し、お茶を注いで珠雫の前に置く。本当だったら茶菓子の一つでもあった方が良くかもしれないが、今の時間は夜。太る事を気にしているだろうからお茶だけにしておく。

「一輝は優しいからな。あんな過去があつたら捻くれてもおかしくないっていうのにガキの頃から魔導騎士になるって目標を掲げたまま変わらない。ヴァーミリオンが居な

くなつたら気落ちするだろうし、下手をしたら自分のせいだと責任を感じてヴァーミリオンの後を追いかけてかねないぞ」

「……私だって、分かってるんですよ。あの女がちゃんと一人の人間として、一人の男性として色眼鏡無しでお兄様の事をちゃんと見てるんだって」

他人が嫌いで、一輝の事になると盲目的になる珠雫だが、だからと言って他人のことを見ていないわけではない。ちゃんとどんな人間なのかを見分けられるほどの目は持っている。

「でも、だからと言って諦められる程に、私は大人じゃないんですよ。私はお兄様の事が好きで、好きで、大好きで……妹としてではなくて女として見てほしいんです」

「良いじゃないか。命短し人よ恋せよ、だ。一般적におかしいと指を指されるような恋だと理解していながらも、それでも好きだと胸を張って言えるのならそれは立派な愛だよ。俺は応援するよ」

顔を伏せていた珠雫の頭を手荒く撫でる。一輝と知り合った頃からの付き合いである彼女が気落ちした時には姉ちゃんとかうやって珠雫のことを慰めていたなあと過去

を懐かしみながら。

「……ありがとうございます。そうですね、肝心なのは私がそれを貫けるかですよね」  
「そもそもひと昔前なんて近親相姦とか普通にあつたから大丈夫だろ。ウチの一族でも時折血を濃くする為とか、兄妹もしくは姉弟でガチの恋愛感情が生まれてとかであつたらしいし」

「あ、ごめんなさい。不知火さんのところの変態一族と私を同じにしないで下さい」  
「悔しいけど否定は出来ないんだよなあ……」

新城の姓を語っているが俺の元々は漣の一族だ。その漣は最新である俺からしてみてもドン引きするレベルの変態っぷりを誇っている。『解放軍』の襲撃により大半の記録は喪失し、僅かに残っていた記録によればさつき言った近親相姦なんて度々あり、何を考えたのか分からないが獣姦なんていうジャンルにまで手を出している者までいたらしいのだ。

『解放軍』の行動を肯定するのは癪だが、そんな事をしていた変態一族は滅んだ方が世界の為なのかもしれない。

「そう言えばルームメイトの方はまだ帰らないのですか？それに火乃香さんも」

「綾辻と火乃香なら訓練場でぶつ倒れるまで模擬戦やらせてるぞ。寧音が見てるからやり過ぎるって事は無いと思うけど」

綾辻はそう区分して良いのか分からないが、火乃香は俺の弟子だ。新城の剣ではなくて漣の武を教えている。とは言っても、漣の鍛錬なんて至極簡単なものだ。

基礎を教えたら、あとはひたすら模擬戦をやらせる。

基礎というものはあらゆる武芸の始まりになる。それを教えて、完全に修めたと判断したらそれからは経験を積みませ、自分にあつた形にへと研鑽していくだけだ。それが漣の血から知つた漣の鍛錬であるし、俺も姉ちゃんもそれに習つて鍛錬をしてきた。それが正しいのかは分からないが、それにより俺が強くなつた事は確かだ。

「模擬戦って、確かルームメイトの方は三年生でしたよね？8歳の火乃香さんと模擬戦だなんて……」

「普通だったならそうなんだろうけど、生憎と俺は火乃香の事を漣として育てるって決めたんだ。本人もそれに了解して、漣として育てられている。あいつが決めた事だ。あいつが泣き喚いて必死に嫌がるまではそれを続けるって決めたんだよ」

「そう、ですか。だったら私ごとやかく言うのは無粋ですね」

「物分りが良くて助かる。自称弱者の味方の連中は児童虐待だと言って火乃香の意思を無視して俺の事を責め立てるからな」

「17歳の男性が8歳の少女と模擬戦……確かに虐待しているように見えますね」

「……改めて言葉にするとヤバい絵面だな」

今度から火乃香の鍛錬をする時には人目に付かない場所でしょうと決めた。

そこから暫く話をして、良い時間になったので今日はお開きにする事になった。玄関での別れ際の際に明日、一輝とヴァーミリオンと珠雫のルームメイトと一緒に遊びに行くから一緒に来ないかと誘われたが俺はそれを有事があるからという建前で断った。本当だったら行きたかったのだが、珠雫のルームメイトが問題なのだ。

珠雫のルームメイトの名前は有栖院<sup>ありすいんなんぞ</sup>風……月影さんによって設立された暁学園の生



徒であり、「黒の凶手」という二つ名で呼ばれる「解放軍」の暗殺者。彼の目的は破軍学園の代表となるだろう生徒と信頼関係を築くこと。そうする事で破軍学園の主力たちは有栖院に無防備に背中を預ける事になる。その目的を考えれば有栖院が珠雫に何かをするとは考えられない。しかし万が一の事を考えれば見過ごせるような存在でも無いので一応「眼」を飛ばして監視はしている。

有栖院と……「解放軍」と遊びに行くと考えただけで吐き気を催す。月影さんは有栖院が裏切る未来を見たと言ったが、今はまだ「解放軍」の暗殺者のままだ。月影さんの見た未来が訪れてからなら兎も角、现阶段で有栖院と一緒にいるなど考えられない。だから珠雫の誘いを断った。

「おーい、倒れた2人連れて来たぞー」

珠雫と別れて有栖院の監視をしている「眼」と視界を共有し、妙な事はしていない事を確認して安心していると、力尽きて動けなくなった火乃香と綾辻を担いだ寧音がやって来た。見た目少女の寧音が人2人を担いでいる光景は信じられないものかもしれない。寧音の能力は重力。それに魔力を使って身体能力を強化すれば2人を担ぐことな

んて容易いことだ。

「ありがとな。また今度お礼でもするよ」

「じゃあ身体で」

「ハハツ、せめてもちつと色気込めて誘えよ」

「うちの魅惑のボディで勃たないというのか……!?!」

「何度もやられてるけど、俺の好みは我儘ボディだからな？」

のっけからフルスロットルで俺の身体を狙ってくる寧音の獣の如き視線を出来る限り見ないようにしながら2人を受け取ってベッドの上に放り投げる。

「むく……あ、だったら明日うちとデートしてよ。ちよつと気になる映画があるから、それを観に行きたいんよ」

「映画ねえ……寧音が気になるなんてどんな映画なんだ？」

「〃ガンジー怒りの解脱〃許す事は強さの証と言ったな？あれは嘘だ〃〃って映画」

「何それ、凄い気になる」

タイトルを聞いただけでもどんな映画なのか気になってしまい、俺は寧音に誘われてデートをする事にした。

## ガンジー怒りの解脱・2

「やべえ……やべえよ……語彙力が死んでるけどそれしか言えない」

「同感だわ……タイトル見た限りだとクソ映画臭がプンプンしてたのにあんな名作とか卑怯っしょ……」

「ガンジー怒りの解脱く許す事は強さの証と言ったな？あれは嘘だ」を破軍学園の近くにあったショッピングモールの映画館で見た感想がそれだった。一階のフードコートで軽食を頼みながら、寧音と一緒に顔を手で覆い隠しているのは「ガンジー怒りの解脱く許す事は強さの証と言ったな？あれは嘘だ」が予想を良い意味で裏切る良作だったからだ。

「当時インドがイギリスの領地だった事は知ってたけどまさかそれを活かしてくるとは」

「非暴力を説いて戦うことの無意味さを謳っていたガンジー。それなのにイギリスから

目をつけられたことでガンジーを除いて村の人間が虐殺されて、その教えを捨てて一人イギリスに立ち向かうって」

「ラブロマンスあり、コメディあり、それでいてアクション映画の質を落としていないのは見事だつて言うしかない」

「最後のイギリスのロンドンで行われたガンジーVSブッタのクライマックスは涙無しには語れぬーよ」

「これは他の映画も観るしか無いな。地雷臭がプンプンするのが山ほどあるけど……!!」

現在上映されている映画の案内のピラを取り出す。『ガンジー怒りの解脱』以外にも上映されているのは映画館の規模が小さいからなのか3つだけ。『私は妹に恋をした』※R15』とか、『男たちの失樂園』※R15』とか。唯一まともそうに見えるのは、『砂漠の王女カルナ』というアニメ映画なのだが、カルナと思われる色白で白髪の人物が、『固有<sup>デバイス</sup>霊装』と思われる馬鹿デカイ槍を持っているのは何故なのだろう。そして、『求められたのであれば応えよう』などという男らしいセリフを口走っている。もしかするとこの映画は、『私は妹に恋をした』※R15』と、『男たちの失樂園』※R15』を超えろクソ映画なのかもしれない。

「よくまあこんな色物作品ばかりを集めたもんだな」

「ここの経営者の趣味じゃないか？ 正気を疑うような趣味してるけどな」

「うーん……取り敢えず保留にして、時間もあるし買物しない？」

「賛成、破軍来るのに最低限の荷物で来たから私服が少なくてな。俺は困らんけど火乃香には女の子らしい格好してほしいし」

漣として育てている火乃香だが、だからと言って女として生きる事を諦めさせている訳ではない。無表情で適当なですます口調が目立っているが可愛い物やお洒落に興味を持っている事は理解している。寧音とデートなので理事長に任せて置いてきてしまったので、お土産として何か買って帰りたい。

「そーいや不知火、今日のうちの格好はどうよ？」

そう語る寧音の格好はいつもの和服姿では無く肩を出すタイプのシャツにホットパンツという洋服を着こなして、床に着きそうな程に伸ばされていた艶のある黒髪はポニーテールで纏められていた。西京寧音という<sup>ブレイザー</sup>伐刀者<sup>は</sup>はKOKの現役選手であり、

公表されている現世界ランキングで3位であることから知名度が非常に高い。だからこうして人前で見せる姿とは違う格好をしなければまともな街を出歩く事も出来ないのだ。もしもこの場でいつも通りの和服で来ていたら、サインを求める人の群れが出来上がっているに違いない。

「新鮮だけど違和感があるな。俺の中でのお前のイメージってどうしても和服ロリだからな。今の格好も似合ってる事は似合ってるけど」

「そういう不知火の格好は変わらねえな。それしか服無いの?」

「服にはデザインじゃなくて機能性を求めるタチだからな。あと、誰かさんのせいで俺の私服が絶滅しかけてるってのもあるけど」

「誰のせい?」

「殴りてえ……!!」

俺の格好はカーゴパンツに黒地のシャツ、その上から赤いコートを羽織るだけの物だ。機能性を求めているので丈夫で長く使えるような物だが見る者によつてはつまらないと評価されるようなシンプルな格好。本当ならばもう少しあったのだが、目の前にいるロリータが性的に襲うために物理的に襲いかかって来てそのせいでお亡くなりな

なってしまうっている。

「まあまあ、今日のお金はうちが出すからさ」

「よし、言質は取った。それならトウワレに行こうか」

「待て……待て……!! トウワレって言ったら超一流のブランドじゃねーか!! そんなところで買物したらうちの財布が亡くなるんだけど!」

「ん? 気の所為かな? “夜叉姫”ともあろうロリータが一度言ったことを覆すような発言をしてるように聞こえたのだけど……」

「……今度ゼツテー媚薬ガン盛りして襲ってやる」

「止めろ……止めろよ……!!」

揚げ足を取っただけで貞操の危機が訪れた。一応大体の薬物に対する耐性は持っているのだが、それでも使用量を遥かに超えた量だと効き目が薄いとは言え効果が出てしまう。過去に一度、使用量の10倍の媚薬を使われた状態で寧音に襲われて三日三晩致してしまっただ事がある。こいつの事だから絶対にその時の量を超える媚薬を使うに決まっている。



しばらくは口にする物には気をつけるようにしなくては。

「はあ、しゃーねーな。見た目一桁のうちが不知火に奢ってやんよ」

「言葉にすると凄い光景だな」

「ところでさ、うちと不知火って側から見たらどんな関係に見られてると思う？」

「どこからどう見ても兄妹だろうな」

「兄妹、兄妹かあ……どうやったら恋人として見られるんだろうな？」

「身長伸ばせよ」

「なんでうちってこんなにちっせーんだろう……」

ずーんという効果音が着きそうな程に寧音はくらい雰囲気を漂わせながら落ち込んだ。身長のことでも落ち込むと何を言っても無駄で、元に戻るまでが長く事はこれまでの付き合いで分かっているので何も言わずに寧音の手を引いてトウワレに向かうことにした。

「いやあ、買った買った」

「おかげでうちの財布がお亡くなりになったけどな……」

宣言通りにトウワレで俺と火乃香の服を買い漁った事で寧音の財布は見事にダイエットに成功していた。生憎と服に関するセンスは無いので店員と相談しながらの買い物になってしまったが、それでも良い買い物が出来たと思う。それに寧音だつてしつかりと自分の服を買っていた。ただ、時折ランジェリーコーナーへと姿を消していたのは……うん、考えないようにしよう。

「そろそろ良い時間だな。映画観に行くか」

「よっしゃ、『男たちの失樂園※R15』観ようぜ」

「よりよつてそれをチョイスするのかよ……!!」

どこからどう見ても嫌がらせだ。自分から言いだした事なのにどうやら根に持っているらしい。映画を観ないという選択肢は存在せず、他の2作も地雷臭がプンプンする物しか存在しない。

どうやったらこの危機的状況を脱する事が出来るのか頭を回転させていると——銃声と悲鳴が響き渡った。

## 漣

「おい、誰かいたか？」

「いいや、誰も見ていない。もう全員集め終わったんだらうよ」

一流のブランドとして知られているトゥワレは見るも無残な状態になっていた。客に見せるためにトゥワレの服を着飾っていたマネキンは倒れて碎け、一着で数万もするはずの服はグチャグチャのままに床に放り投げられている。

それを気にすることなく歩くのは黒の戦闘服とガスマスクに身を包んだ2人の男。アサルトライフルを構えたまま店内を搜索した結果を報告しあい、唯一閉じられている試着室に目を向ける。

「あとはここだけだな」

「俺が開けるから頼んだ」

それに声ではなく行動で肯定し、1人は試着室のカーテンに手を掛け、もう1人はアサルトライフルを構えて試着室の正面に立つ。そしてカーテンを勢いよく開いて——そこには誰も居なかった。

「……クリアだ」

「了解。さっさとビシヨウさんの所に戻ろうぜ」

「そうだな」

誰も居ないと分かりながらも2人は周囲を警戒しながら小走りでトウワレから立ち去った。それを見て、周囲に人の気配が存在しないことを確認し、天井から寧音と共に床に降りる。

「見事なまでにテロだな。しかもあの装備は、リベリオン解放軍リベリオン。ときたもんだ……不知火、頼むから落ち着いてくれよな？」

「分かってるよ。流石の、リベリオン解放軍、絶対殺すマンの俺でも被害を出したいわけじゃ無いからな」

何かが起きたと判断した瞬間に俺は寧音と一緒に天井に張り付き、事が落ち着くのを待っていた。『伐刀者』<sup>フレイザー</sup>である俺たちがすぐに動けば、少なくともこの階層の安全くらいは確保出来ただろう。しかしそれだところこ以外の階層を見捨てる事になる。それに下手人たちの行動からあいつらは殺す事を目的にしていなと分かった。それならば人を一箇所に纏めて貰った方がこちらとしてもやり易くなる。

本音を言えば下手人が『解放軍』<sup>リベリオン</sup>だと分かった瞬間に奴らを殺してやりたかったのだが、それでは要らない被害が出てしまう。

「で、外部との連絡は出来たか？」

「全然ダメだ、妨害でもされてんのか通じねえよ。幸いな事に中にいる奴になら連絡は取れるけどな」

外部との連絡を断つことは定石と言えば定石、在り来たりの手段なのだが実際にされると厄介だ。寧音が言うには内部にいる者同士ならば連絡は取れるらしいが……と、考えたその時に珠雫が遊びに行くと言っていたことを思い出した。このシヨッピング

モールは学園の近くにあることからよく破軍の学生が利用している。もしかすると珠雫たちもここにいてのでは無いかと期待をしてアドレス帳にあった一輝と珠雫のメールアドレスにメールを送る。

するとすぐに一輝からメールが返ってきた。内容を確認すれば、有栖院と共に男子トイレに隠れているらしい。『男たちの失樂園※R15』の存在を知っているので一輝の貞操が心配になってしまふ。そして珠雫からもメールが返ってきた。珠雫の方はヴァーミリオンと共に人質の中にいるようで、変換されていない平仮名だけの文面でフードコートにいることを知らせていた。

「おつとこいつは僥倖だな。どうやら一輝と珠雫がここにいらしい。一輝は男子トイレに隠れてて、珠雫はヴァーミリオンと一緒に人質に紛れてフードコートにいるつてよ」

「黒坊にステラちゃんがいるならどうとでも出来そうだな。どうせこの規模なら『解放軍』の使徒は1人だけで後は真人間だろーしな」

『リベリオン』は『ブレイザー』至上主義を掲げているがだからと言って『ブレイザー』のみで

構成された組織では無い。『ブレイザー 伐刀者』至上主義に賛同した非伐刀者が大半で、今回の規模ならば『リベリオン 解放軍』の『ブレイザー 伐刀者』は1人か2人が良いところだ。ヴァーミリオンはともかく一輝と寧音がいるのなら簡単に対処出来る規模でしか無い。

「それじゃあ、ここ任せても良いか？」

「良いけどどこに行くのさ？」

「上からさ、プンプン匂うんだよ……臭い臭い『リベリオン 解放軍』のクソ野郎の匂いがな。多分そいつが通信妨害してる。だからそいつの相手してくるわ」

「あ……やるのは良いけどせめて喋れる程度に留めてくれよ？殺したら色々厄介だかな」

「努力する」

努力をするとは言ったものの、口だけでそうするつもりは無かった。月影さんの指示とは言え暁学園という枠組みで『リベリオン 解放軍』と一緒にされているのでストレスが溜まっているのだ。ここら辺で一度息抜きをしてやらなければ近い内に大爆発を起こす事になる。



寧音もそのことを分かってくれているのか、軽く忠告をした程度で済ませた。それに殺したら厄介だと言っていたが、それは裏を返せば殺した事がバレなければと言っているのと同じだ。死体が見つかる事で殺されたと分かるのなら、死体さえ見つからなければ殺されたと分からない。

「滾れよーーー」  
 // 鬼灯 //  
 「ほおずき」

屋上に向かう道中で野太刀型の「固有靈装」を展開し、鞘から引き抜く。刀身から唾、そして柄に至るまで黒で塗り潰された野太刀だが、唯一刀身だけには炎のような真紅のラインが刻み込まれていて、それは俺の感情を表しているかのように点滅している。

屋上に続く扉にたどり着き、邪魔なそれを「鬼灯」で切り刻む。イベントがある時には色んなもので埋め尽くされるはずの屋上はその予定が無かったからなのか伽藍堂、そしてそこには黒地に金刺繍の外套、「解放軍」の使徒が着用する法衣を着込んだ男が一人いた。

「……  
 「<sup>フレイザー</sup>伐刀者」か」

「臭えから話すなよ。お前らと話しているだけで吐き気が止まらないんだ……俺が聞きたいのはただ1つ。17年前、漣。この2つに心当たりはあるかどうかだけだ」

「あると言ったら、どうする?」

「選択肢を3つくれてやるよ。1つ目、素直に喋って死ぬ。2つ目、拷問されて話してから死ぬ。3つ目、意地を張って喋らないで苦しみながら死ぬ」

「そこまでして殺したいとは……お前、漣か?」

「だとしたら?」

「<sup>ナンバース</sup>暴君」からの御命令だ。貴様を殺させてもらう——私は<sup>ナンバース</sup>十二使徒」が1人、<sup>雷霆</sup>のヴォールドだ。我が名を覚えて逃げ」

顔を隠していたフードが外され、その下から刈り上げられた金髪で彫りの深い顔が現れる。本当ならば今すぐにでも斬り捨てたいのだが、今のやり取りで実在するかあやふやだった<sup>ナンバース</sup>暴君」がいる事が分かった。それに<sup>ナンバース</sup>十二使徒」という<sup>ナンバース</sup>解放軍」の重鎮クラスならば、17年前に何故あんな事があったのか知っている可能性がある。どうして<sup>ナンバース</sup>十二使徒」がここにいいのか分からないが、素直に幸運だと喜ばせて貰おう。

「……<sup>リベリオン</sup>解放軍<sup>〃</sup>は嫌いだ。正直言つて向かい合つてるだけで殺したくなる程にな。だけど、お前の事は嫌いじゃ無い」

〃解放軍<sup>リベリオン</sup>〃に所属しているだけで殺したくなるが、だからと言つてそいつの人間性までも否定するわけでは無い。ヴォルドは〃暴君<sup>〃</sup>に命じられたと言っているがその目には俺を殺してやるという殺意を燃やしている。全力を持つて殺してやると叫んでい

る。  
「新城不知火だ。二つ名なんて洒落たものは無いから、代わりにこつちを名乗らせてもらう」

構えを解き、〃鬼灯<sup>〃</sup>をダラリと下げる。敵を前にして構えを解く事は馬鹿がする事だ。構えるという事はこれからする行動を相手に教えることでもあるのだが、その行動をし易くするという備えでもあるのだから。

しかし、漣はそれをしない。

構えない事で相手に行動を教えずに、そして構えという備えをしないでその行動を容易く行う。

「漣不知火だー死ね」

漣の名と死刑先行を告げ、目の前の<sup>リベリオン</sup>解放軍<sup>〃</sup>を殺すために一歩踏み出した。

## 漣・2

不知火とヴォルドの視線が交差する。その瞬間に伽藍堂だった屋上は2人の魔力により異界へと変貌する。それは2人の邪魔を望まないという利害が一致したことによって作られた外部からの干渉を一切遮る結果。副作用として内部からの影響を外部に漏らさないというものもあるが、それは2人からすればオマケでしか無い。目の前の敵との戦いに水を差されたく無い。シヨツピングモール内には一輝と寧音を始めとした破軍学園の「ブレイザー伐刀者」が数人いるし、「リベリオン解放軍」がテロを起こしたことで国から鎮圧部隊が派遣されるのは目に見えている。もしもそれらの妨害の心配が無ければ、2人は周囲への被害など考えずに戦い始めただろう。

そして作り上げられた異界は地獄と呼ぶに相応しい光景が広がっていた。

天には稲光と共に無数に降り注ぐ雷。

地には煌々と紅蓮に燃え盛る業火。

2人の魔力で作り上げられた異界であるが故に、その異界は2人の能力をそのまま内包した世界になる。ヴォルドは「雷霆」の二つ名が指し示す通りに電気の異能。不知火は「解放軍<sup>リベリオン</sup>」への赫怒と殺意が反映された炎の異能。天から降り注ぐ雷を地に燃える炎が焼き尽くし、それを別の雷が打ち砕く。並みの「伐刀者<sup>ブレイザー</sup>」ならば存在など許されずに即座に蒸発するような原初の如く地獄にあつて、2人は未だに健在だった。

不知火は野太刀を、ヴォルドは「固有<sup>デバ</sup>霊装<sup>イス</sup>」であるレイピアを持ったままで不動。この地獄の中で動かないでいるのなら当然のように炎と雷に襲われる事になるのだが、2人は襲いくるそれらに視線すら向けずに己の異能で迎え撃つ。互いの視線は眼前の敵に向けられている。隙を見せた方が殺される、自身の喉元に切っ先を向けられて相手の喉元に切っ先を向けたこの状況でたかだか余波程度に割けるような注意など存在しない。

不知火は赫怒と殺意に燃えながら、ヴォルドは「暴君」から与えられたら使命に燃えながらも冷静だった。殺意による気当たりで互いに互いを牽制しながら、その通りに動けばどうなるのかを脳内でシミュレートする。初手で呆気なく殺される結果があれば、

あと一步のところまで来たところで殺される結果もある。血で血を洗うような世界の住人であるから2人は自身の能力を過大評価せずに、相手の能力を過小評価しない。確実に相手を殺せる瞬間を作り出すための手段を模索し、膠着状態に陥る。

「――止めだ、まどろっこしい」

それを不知火はたった一言で切り捨てて動き出した。自身の異能で彩られた大地を踏みしめてヴォルドに向けて前進する。そんなことをされては動かないという選択肢はヴォルドには存在しない。意識を向かってくる不知火に向け、無差別に降り注いでいた雷全てを不知火1人に向けて落とす。魔力によって再現された雷だが自然現象のそれと変わらない数億Vという電圧を光速で、たった1人に向けられ――

「『妙技：雷斬り』  
邪魔だ」

――邪魔だの一言で斬り捨てられた。

「――」

まさかの光景にヴォルドは言葉を失うが即座に正気を取り戻し、再び雷を落とす。しかしそれできえ前の光景を再現するかのように再び斬り捨てられる結果に終わる。人間では反応する事が許されない、知覚した瞬間にはもう遅い光速をさも当然のように斬り捨てる。

そのカラクリは至って簡単。ただ、光速に反応出来る程に反応速度と身体能力を上げているだけだ。

言葉にすればたったそれだけの事。しかしそれを実現するのは至難の技だ。まず人の身体は動かさずと思つた瞬間に動くわけではなく若干の間を開けて動く。どれだけ鍛え上げたとしても0.1秒を切ることがないというのが常識だ。それに仮に反応出来て身体を動かしたとしても、光速を斬り捨てる速度に身体が追いつけない。光の速さに追いつくためには光の速さに至らなければならない。

それを不知火は漣の血と ブレイザー 伐刀者<sup>が</sup>が持つ魔力によつて解決する。



漣の家系は判明しているだけでも1000年以上は続いている家系。当然の事ながら早く反応する為にはどうすれば良いのか考えられていて、それを実現させて子孫に特性として受け継がせている。不知火の反応速度は数値では測れない。動かそうと考えるのと同時に動かせる。肉体面の問題に関しては流石の漣でも解決出来なかったが、それは「伐刀者」として生まれた不知火が解決する。魔力により全身を補強、強化する事で光速で動ける様にしたのだ。

無論、そんなことをしてタダで済むはずがない。雷という電気の塊を斬った事で不知火の身体は感電し、魔力で補強しているとはいえ光速で動いた事により全身を引き裂かれんばかりの激痛が襲う。常人ならば発狂しかねない激痛を感じながらも不知火は顔色一つ変えることなく歩みを止めない。桁外れた意思力という精神論にてそれを耐える。

「手が足りんな」

絶え間無く降り注ぐ雷を斬り捨てながら不知火はそう言い、左手にもう一本野太刀を顕現する。それは不知火が右手に持つ「鬼灯」と全くの同一の「固有霊装」。

「固<sup>デ</sup>有<sup>バ</sup>靈<sup>イ</sup>装<sup>ス</sup>」というのは双剣などの一対になる武器でない限りは一つしか現れないものであり、不知火の様に自分の意思で数を増やす事など出来る物ではない。しかし不知火はそれを成し遂げる。固<sup>デ</sup>有<sup>バ</sup>靈<sup>イ</sup>装<sup>ス</sup>が己の魂を具現化させたものであるのなら、自分の意思で数を増やせるはずだと幼い頃に考え、彼はそれを実現させた。

そして再び始まる雷斬り。一度成功させるだけで絶技と称されてもおかしくないそれを不知火は息をする様に自然に行う。それを不知火は誇る様な事はしない。何故ならそれは、彼にとつて当たり前のことをしているだけに過ぎないのだから。雷に焼かれながら、全身を引き裂かれんばかりの苦痛に呻き声一つ溢さずにヴォルドに向けて進む。

「素晴らしいな」

その姿を、常人が見れば異常だと叫ぶ様な不知火の様を見てヴォルドは素直に賞賛した。例え漣の血を引き継いでいたとしても、伐<sup>ブ</sup>刀<sup>レイ</sup>者<sup>ザイ</sup>であったとしても、同じ事を出来るのかと問われればヴォルドは出来ないと言首を横に振る。それを自分よりも年が二

回りは離れている不知火がやって見せているのだ。賛辞を送って然るべきだとヴォルドは考え、その通りに言葉を紡いだ。

だが、だからと言って攻撃の手を緩める事はしない。全身全霊、全力で滅殺する事を誓い、行動する。

無差別に降り注いでいた雷が、不知火に向けて落とされていた雷が、全ての雷がヴォルドの前に集う。集束される雷は球体となり、圧縮されて電圧を数十倍にも跳ね上げさせる。

間違いなく自身を殺すことが出来る一撃が放たれる。それを理解して——不知火は臆するどころかさらに速度を上げる。二本に増えていた「鬼灯」を一本に戻し、ただ真つ直ぐにヴォルドに向かって全力で駆けた。

そして一步、あと一步でヴォルドを斬り伏せられる。その距離まで詰めた瞬間——

「神の雷霆はここにあり——浄滅せよ、ケラウノス神の雷霆」

圧縮された雷が指向性を持つて解き放たれた。それはもはや雷では無く光線。不知火の反応速度を持つてしても回避する事を許さないタイミングで解き放たれた光線は不知火を飲み込んだ。

「——」

焼く、感電させるなどという生温いものでは無く、消し飛ばす一撃を受けながらも不知火は前進を止めようとしない。前へ、前へ、少しでも前へと破壊の閃光を浴びながらも止まらない。

そしてついに、左腕だけとはいえ破壊の閃光を超えた。しかしそれまでだ。すでに不知火の身体のほとんどは浄滅されていて、そこからの反撃など出来るはずがない。そうヴオルドは考えたが——開かれた不知火の手を見てその顔を驚愕に染める。

不知火の掌にあったのは炎の塊。しかし、それはただの炎などでは無い。そもそもだ、前に進む事を良しとする不知火が自身の能力を磨く事をしないわけがない。どうす

れば火力が上がるのか考えに考え、身近に存在するある物を真似する事にした。

それは太陽。地球より遙か彼方に存在しながら地球を照らす、核融合を起こす恒星。不知火はそれを目指し、実現させた——そう、不知火は炎の異能を成長させ、核融合を起こすことが出来るのだ。

「フュージョン創生——ハイドロリアクター純粹水素爆発」

炎の塊が一層激しく膨張する。それは現代兵器の水素爆弾と同じ原理。重水素と三重水素の核融合は放射能を発生させないクリーンな虐殺の火が解き放たれた。

## 漣・3

ハイドロリアクター  
 純粹水素爆発の爆炎が収まった時、そこには何も残っていないかった。地獄としか言えないような炎と雷で築き上げられた異界も、その異界を作り出した張本人達も、影も形も無い。浄滅の神の雷霆と虐殺の純粹水素爆発が放たれたのだから当然の結果だと言える。幸運なのは互いに指向性を持って放たれたので周囲に被害を出さず、本人と異界だけで済んだことか。

勝者も敗者も決まらないという結末——それでも、彼らは終わらない。この程度では終われない。

2人が衝突する前と変わらぬ屋上の一角が突如として燃え上がる。しかもそれだけでは無く同時に別の場所に紫電が走る。炎と雷、発生する要因など存在しないはずなのに発生したそれらは徐々に規模を大きくし、人の形を作っていく。そして数秒後には炎は不知火に、雷はヴォールドになっていた。不知火は変わらず、ヴォールドは多少消耗した

様子を見せているが、2人の肉体はおろか服まで無傷のまま。互いに必殺を向けられたとは到底思えないような状態だった。

2人がした事はごく単純。自分の肉体を自分の能力の属性に変換する事で互いの必殺をやり過ぎ、そして肉体を再構築したのだ。

それは狂気じみた行いだった。

炎や水などの属性を持つ者ならば誰しも一度は自分の身体を自分の属性に変換する事を思い付き、無理だと諦める。それを行えるだけの魔力制御であり、ほとんどの者はそれを持つことができずに不可能だと悟る。仮に超一流の魔力制御を以て肉体を分解、そして再構築する式を組んでいたとしても、発動するかどうかは不明。さらに発動したとしても、数十兆の細胞でできている人間の再構成をほんの少しでも誤ればどんな障害が発生するか分かったものではない。いや、障害が発生したとしても人の形をしていればまだマシだろう。最悪の場合、2度と人の姿に戻れない可能性すらあるのだから。それ以前に全身を己の属性に変換するという事は、一時的にはいえ自分で自分の命を絶つことに等しい行いだ。

それを2人は平然とやってのけた。それをしなければ自分は死ぬと理解していたから、自分の手で自分を殺す事で相手の必殺をやり過ぎす事を決めて、それを成功させたのだ。

「ハイドロリアクマ純粹水素爆発……成る程、水素爆弾と同じ原理か。よもや炎という有り触れた属性を

核融合に進化させるとはな。見事というしかあるまい」

「そちらこそ中々の物をお持ちのようで。あの一撃は確かにギリシャ神話のゼウスの雷霆に等しい一撃だった」

出てきた言葉に嫌悪は欠片も感じられず、純粹に相手の必殺を賞賛する感情だけが込められている。確かに彼らは殺し合っているが、だからと言って相手の全てを否定したわけではないのだ。素晴らしいと思ったから素晴らしいと褒めた、極く当たり前の事をしているだけだ。

「だけど、厳しいみたいだな？ たったあれだけのやり取りで息が上がってるぞ？」



しかしそれとこれとは話が別だ。いくら相手の実力を認め、褒め称えたとしても殺意が消え失せるわけではない。不知火の中でたうち回る赫怒と殺意は一切の陰りを見せずに、脳はヴォルドを殺す手段を考えている。

「そうだな……年は取りたくないものだ。若い頃ならば、お前の全力に付き合えるだけの気力と体力があったのだがな」

「年の所為にするなよ。年を取ってそれまでの戦い方が出来ないのなら、それに合わせた戦い方を考えれば良かっただけの話だ。お前はそれを怠り、その結果疲弊している。要するに、これはお前の怠慢だ」

「手厳しいな。その通りなのだから返す言葉も無いが」

そう言いながらヴォルドは薄く笑うがそれで事態が好転するはずもない。ヴォルドの消耗は変わらず、不知火の殺意も変わらない。このまま戦ったとしても自身が殺されるとヴォルドは客観的に理解していた。

ヴォルドの「暴君」に対する忠義は高い。どんな悪逆非道であろうとも、どんな無理難題であろうとも、「暴君」からの命令であればヴォルドは必ず成し遂げていた。故に

ヴォルドは必ず漣不知火を殺す。しかし、今の自分の状態ではそれは不可能。故に、ヴォルドが出した答えは一つ。

「口惜しいが、今回はここまでにさせてもらおう」

それは撤退。予備動作一切無しで後ろに飛び退き、先と同じ様に自分の肉体を雷に変換しようとしている。

「逃すかよ」

「……逃しますよ」

ヴォルドの逃亡を阻止しようと不知火、それを妨害したのは不知火の死角から放たれた大質量の一撃。誰も居なかったはずの空間から突如として現れた下手人のカラクリを能力による転移だと当たりをつけながら、不知火は隕石に匹敵する破壊力を伴ったその一撃を“鬼灯”で受け止め、完全には受け止めることが出来ないと判断して自分から吹き飛ばす事で難を逃れた。

下手人の正体は少女だった。金糸の髪は伸ばし放題で、見えているのか怪しくなるようなレベルで顔が隠れているが、ミニスカートに改造されたボロボロの巫女服と胸の双丘で女性と分かった。特徴的なのは手に持つ巨人のナイフのようなサイズの大剣、そして見えている手足に付けられた痛々しい継ぎ接ぎ。

「初めまして、漣。私はオルゴール、<sup>リベリオン</sup>“解放軍”に所属しているしがない人形遣いでございます」

「はあ……残念だよ。改造巫女服とかいう趣味は素晴らしいのにそれ以外の趣味が悪い。そいつ、作ったな？」

「ええ、私自慢の一品です」

作ったというのは言葉通りの意味だ。彼女の身体の継ぎ接ぎと合わせれば、彼女が作られた存在だと理解するのは容易い。複数人の<sup>ブレイザー</sup>“伐刀者”の肉体の優れた部位を切り分けて繋ぎ合わせ、魂さえも融合させて放り込んだオルゴールの手足と成るべくして作り上げられた肉人形。それが、オルゴールが操っている少女の正体。そんな少女に自我などあるはずが無く、今はオルゴールが彼女の口を通して話し、糸を使って彼女の身体を操っているだけだ。

「はあ……そいつを作るために何人犠牲にしたかなんて聞かんど。聞いたところで俺がやる事は変わらないからな」

「殺すと？ 私が対 ブレイザー 伐刀者<sup>1</sup> の為に作ったこの人形を殺すと？ 傲慢が過ぎますよ」

「傲慢じゃねえよ、歴然たる事実だ。本人が出張つて来るのなら兎も角、そんな奴を使つて来られてもちつとも怖くない。それならヴォールドがそのまま戦つてた方が厄介だった」

自分の事をヴォールドよりも下に見ている。不知火の言葉をそう捉えたオル<sup>1</sup>ゴールは見くびられた事に憤りを感じ、齒軋りをする。

「……そこまでいうのなら、この人形を容易く倒せるんでしょうね？」

オル<sup>1</sup>ゴールの糸が少女の魂に干渉して能力を発動させる。 ブレイザー 伐刀者<sup>1</sup> の能力は魂に由来するもので一人一種が原則であり、不知火がやったように進化させる事は出来ても全く別の能力にする事は不可能である。だが、どこにでも例外は存在する。複数の魂を融合させた事により、この少女は複数の能力を発現させる。炎、水、風、雷……そ

れだけに留まらず身体能力倍加、効果能力エトセトラエトセトラ……数十種類もの能力を同時に発動している。

この少女が作られたコンセプトは対<sup>ブレイザー</sup>「伐刀者」。<sup>ブレイザー</sup>「伐刀者」を封殺する為に、その<sup>ブレイザー</sup>「伐刀者」の苦手とする能力を使えば良いという思い付きを実行した結果がこれだった。

そんな規格外な少女を前にしても不知火は変わらない。寧ろ呆れたような視線を少女に、正確には少女を操るオルゴールに向ける。

「阿保か。人形遣いを相手するのに馬鹿正直に人形とやり合っても意味は無い」

そう言いながら不知火は「鬼灯」で虚空を斬った。

「――」

するとどういふカラクリなのか――少女が膝をついた。そこには何も無い、何も見えないのだが、不知火の感覚はそこにある物をしかと捉えていた。

「……成る程、糸を切られましたか」

「人形遣いが人形を操るのには糸が必要不可欠。そんなの子供だつて分かることだ。なら、その糸を切れば人形を操れなくなるのが道理だ」

少女を操る為の糸を断ち切った。いかに巧妙に存在を隠しようとも、確かにそこにあるのだ。だから少女は崩れ落ちて動かなくなった。唯一残っているのはオルゴールとの意識を繋ぐ糸だけ。だからオルゴールは不知火と話していられる。

「それで？彼女を殺すのですか？私の思い付きの犠牲になった哀れで可哀想な彼女の事を残酷に殺すのですか？」

「いや、殺さないさ。こう見えてもちゃんと殺す奴と殺さない奴の区別はつけているんだ。殺すのならお前なんだが……距離が離れ過ぎてるな。これじゃあ殺し切れない」

“鬼灯”でオルゴールの糸を切った時、魔力を流す事で大雑把にはあるがオルゴールの居場所を探っていた。その結果、途中で幾つもの中継地点を経由しながら少なくとも一万キロは離れていると分かった。流星にそこまで離れられれば殺す事は出来

ない。

だから、出来ることは精々殺しかける様な事くらいだ。

不知火が指を鳴らす。それと同時に少女に残されていた最後の糸が炎上し、遙か彼方へと消えていった。幾つもの中継地点を経由しているとしても、少女とオルゴールは間違ひなく繋がっている。ならばあの糸を導火線にすれば炎はオルゴールの元に辿り着く事になる。糸を燃やした事でオルゴールとの会話も出来なくなったが、今頃突然燃えた事に慌てふためいているだろうとその光景を想像して悦に浸りながら倒れようとしている少女を支える。

念のために脈拍や瞳孔を調べてみるが正常、魔力操作の応用で体内に何か仕掛けられていないか探ってみたが異物は見つからなかった。

「どございようかね、こいつ」

無防備にあどけない表情で眠っている少女を横抱きで抱えながら、不知火はこの少女

の  
こ  
れ  
か  
ら  
に  
頭  
を  
抱  
え  
た  
。



## 後始末

「ねえ不知火君、何がどうなったら『<sup>ナンバーズ</sup>十二使徒』なんて大物とやり合う事になるんだい？」

「日頃の行いが良いからじゃないかなあ？」

「本当にもお……」

顔を手で覆いながら涙を流している月影さんの姿を見て笑いながらタバコの灰を灰皿に落とす。シヨツピンググモールの件は一輝たちの手により無事に解決した。数人ほど精神的に弱っている者たちもいるが、そこはメンタルケアでどうにかなるレベルで済んだらしく、死傷者はゼロという結果に終わった。一輝たちは事情聴取を終わらせてすでに破軍に帰っているが、俺は『<sup>ナンバーズ</sup>十二使徒』という『<sup>リベリオン</sup>解放軍』の幹部クラスの間人と戦ったので月影さんに呼び出されたのだ。

すでにヴォールドとオルゴールのことは話してある。それを聞いて月影さんは泣き

出した。

「なんで『雷霆』と『傀儡王』のオルゴールが日本に来てるんだよ……」

「観光しに来たんじゃない？あ、お代わり頂戴」

「畏まりました」

グラスの中身が空っぽになっているのに気が付いてお代わりを要求すれば、部屋の隅に立っていたボディービルダー並みの筋肉を付けたメイド服の男性が白い歯を光らせながら二つ返事で新しい酒を注いでくれる。

「それよかさあ、この冒流的なインテリアどうにかならないの？見てるだけで精神がガリガリ削れていくんだけど」

「私だつてこんな冒流的なインテリアよりも可憐で可愛らしい女性にメイド服着て欲しいよ？でも『連盟』のトップが真性のガチホモ野郎でね、ガチムチの男性のみを秘書、ボディーガードとして側に置く事を日本に要求して、当時の総理がそれを許可してるんだよ。服装も『連盟』からの要求だからね？」

「おいおい、完全に布教しに来てるじゃねえか!!大丈夫かよ……月影さんの貞操」

「大丈夫大丈夫、秘書もボディーガードも既婚者以外は全員去勢させてるから」  
「ちなみに私は既婚者ですのでパイプカットはされていません」

キラリと輝く白い歯と左手の薬指に嵌っている指輪を見せ付けながらポーリングを決める冒流的なインテリアを視界から追い出す。

「まあ、兎も角話すことは話したから帰って良いか？」

「待って、君が連れて来たあの少女の事について話がまだだよ」

「ああ、あいつな」

オルゴールの人形となっていたあの少女は、今は月影さんが信用している医者を呼び出して、別の部屋で検査されている。俺が診た限りでは異常は見つからずに眠っているだけに見えたのだが、専門家の方が詳しく調べられると判断して月影さんに呼び出してもらった。

「『傀儡王』に操られていただけというのならこちらで保護する事も吝かでは無いのだが……」

「二度人形にされてるからな。俺が糸を切つてるとは言えど、繋がったつていう事實は残つてる。何かの拍子に、もしくはオルゴールが意図的に繋がる話もあり得なくないから俺が預かるのが一番なんだよなあ……」

オルゴールの糸から解放する事には成功しているが、再びオルゴールに操られるかもしれない可能性がある。そうなると対「プレイヤー伐刀者」として作られた彼女を抑えられる様な存在が彼女の側にいる必要がある。月影さんが保有している戦力という条件ならば該当している者は多少はいるだろう。しかし、それは防衛の為に使われる戦力で、四六時中彼女の側に置いて置くわけにはいかない者たちだ。そうなると動かせるのは俺か、後は王馬くらいだ。だが、王馬は絶対に断るのが目に見えている。なので俺が預かるか、もしくは操られても問題ない様に拘束するかのどちらかとなる。

折角あの悪趣味な野郎から解放されたのだから拘束されるのは嫌だろう。そうなる  
と俺が預かるのが一番良い。

「そうしてくれるのならばこちらとしては助かるんだけど、良いのかい？てか、君つて寮暮らしだろ？」

「そこは、ほら、月影さんの力でなんかこう良い感じに……」

「他力本願か……いや、出来なくは無いですよ」

「使える者は使わないとな」

俺が預かる意思を持っていて、月影さんがそれを求めているのなら協力するのが筋だ。幸いな事に金銭的には困っていないので、後はどうやって彼女を破軍に連れてくるのかだけだ。

「しょうがないな……じゃあ彼女はどうかにかして破軍に出来るようにしておくよ。あ、ついでに暁学園に入れて応援団長でもしてもらおう。もちろんチアコスで」

「月影さん……あんた天才かよ……!!」

「私のお古で良ければメイド服の用意も出来ますよ?」

胸筋を強調するようなポージングを決める冒険的なインテリアを目撃してしまい、月影さんとアイコンタクトでさっきの光景は無かったことにする為に注がれていた酒を同時に一気飲みする。

するとそのタイミングで月影さんの電話に着信が入った。話している内容は月影さんの物しか聞こえなかったが、それだけでも相手が彼女を診ている医者だということが分かった。

「はい、はい、そうですか。分かりました……不知火君、どうやら件の少女が目を覚ましたらしいからついて来てくれ。ああ、君は片付けを頼む」

「畏まりました」

「一つ聞きたいんだけど、もしかしてその格好楽しんでる？」

「娘に見せたらパパ可愛いと喜ばれました」

「娘」

「はい、今年で15になる自慢の娘です」

「15歳」

なにやらとんでもない事を話された気がするがそれを理解してはいけなさと直感と理性と本能が同時に叫んでいたのだからそれに素直に従い、スカートの中を見えそうで見えない角度で尻を向けている冒険的なインテリアの存在を忘れる事を決意する。

月影さんの案内で辿り着いたのは国会議事堂の地下室。日本の現総理である月影さんが在中するそこは万が一に備えて超一流の医療設備が整えられている。アルコールを吹きかけられて殺菌して地下室に入ると、ヨボヨボで腰が曲がった老人が出迎えてくれた。

「ん？おお、月坊か」

「お久しぶりです、先生。夜分遅くに呼び出してしまい申し訳ございません」

「なあに、患者がいればそこに行くのが医者じゃからな。気にせんでもええよ。ところで、そちらの若いモンは誰じゃ？月坊の子供じゃったか？」

「違いますよ。彼は新城不知火、新城空の義理の息子です。不知火君、彼は<sup>おおよどげんばく</sup>大淀玄白。私

がはなたれ小僧だった頃からヨボヨボの爺さんをやっている年齢不明の医者だ」

「初めまして、新城不知火です」

「御丁寧にどうも。月坊は先生なんぞ呼ぶが好きに呼んでくれ」

「じゃあ淀爺で。早速なんですけど、彼女の具合はどうですか？」

「ああ、あのお嬢さんやな……診たんじゃが酷いもんじゃよ」

そう言って淀爺が差し出したのはカルテ。それを受け取ってぎっと流し読む。医療

の知識はほとんど無いのだが、走り書きされているメモを見れば良く無い状態であるのが分かった。

「あのお嬢さんは一言で言えば寄せ集めじゃな。ベースとなる人間の劣っている部分を切り取って、他の人間の優れている部分を引っ付ける。ざっと調べてみたが、お嬢さんの元々の身体は一割しか残つたらんかったわ。そんな事をすれば当然拒絶反応も出るんじやが、それは薬を湯水の様に使って無理矢理抑えとつたらしいの。このままの状態じゃつたらあと3年も生きられれば良い方じゃつたわい」

「このままの状態だったってことは？」

「もう治してあるぞ？お嬢さんの診察をするのと並行してな。これで真つ当な人生を送れるはずじゃ。問題があるとするとするなら魂の事じやが、こればかりは様子見をするしかないのう。流星に専門外じやて」

恐らくは世界中から名医を集めても頭を悩ませるであろう問題を淀命は診察の片手間に終わらせていた。これだけで彼がどれだけ規格外な存在なのか分かってしまう。

「まあ、問題は他にもあるんじやがな」



「他にも？ 一体なにが？」

「……それは直接見てもらった方が早かろうて」

そう言いながら淀爺は奥の治療室の扉を開ける。すると治療室から人影が俺に向かつて飛び掛つて来た。悪意や殺意があるのなら俺は例え五感が使えなくても反応が出来るのだが、この人影からはそんなものは微塵も感じられなかったので反応が遅れてしまい、避けられずに押し倒される事になる。

背中から床に倒れて、俺はようやく飛び出して来た人物の姿を視界に納める事が出来た。無造作に伸ばされていた金髪は邪魔だと思われたのか一括りで纏められていて、巫女服から診察の為に病衣に変わっていたが、オル・ゴールに操られていた少女が俺に馬乗りになっていた。

「よお、元氣そうだな？」

「あー……ああ？」

「……先生、もしかして」

「月坊の考えている通りじゃわ。このお嬢さん、記憶どころか言語能力すらゼロ、生まれ

たての赤子と変わらんわい」

「マジかよ……」

「うっ？」

あどけない表情でコテンと首を傾げる少女は現在の態勢も相まって眼福なのだが、淀爺から告げられた衝撃の事実には思わず顔を覆い隠してしまった。

## 選抜戦

“リベリオン解放軍”の襲来の翌日の早朝。まだ日が登り切っておらず、若干薄暗い時間帯で俺は木刀を持った綾辻と対峙していた。綾辻の構えは正眼。オーソドックスな構えで在り来たりだと言えるかもしれないが、それは正眼の構えがそれだけ幅広く、様々な状況に対応出来る事の証左である。

肩幅程度に開かれた足からも、木刀を握る手からも必要最低限の力だけしか込められていないのが目に見えてわかる。動かす時に力を入れるのは当然なのだが、止まっている時から力を入れればそれだけ動きは鈍くなる。初速からハイスピードで動こうと思えば力は最低限で良いのだ。綾辻の鍛錬に付き合った初日には緊張していたのか目に見えて分かるくらいに力が入っていたのだが、火乃香との試合でそれは自分の動きの邪魔になると分かったらしい。

そして合図も掛け声も無しに綾辻が切り掛って来た。それを咎めるような阿呆はこ

の場にはいない。試合、模擬戦ならば必要になるのだが、実戦になれば用意ドンの合図なんて物は存在しないのだから。最初の頃は戸惑っていたが、実戦形式での試合を繰り返し返して来た綾辻は今では素直に初手から斬りかかれるようになっていた。

綾辻の斬撃をひたすら片手で持った木刀で受け止める。渾身と言うほどには力は込められていないものの俺を倒すつもりで放った一撃をあつさりを受け止められながらも綾辻は剣を振るう手を止めない。全くブレることなく振るわれる剣を見るだけで綾辻がどれだけ剣を振るって来たのかが伺える。

基礎とは即ち土台だ。磨き上げ、積み重ねて、流した汗の量だけ安定した骨子を作り上げる。基礎を固めずに有りとあらゆる剣術の秘奥を納めた超絶天才の世界最強剣士と、才能に恵まれずにひたすら剣を振り続けた凡百の剣士のどちらが怖いかと聞かれれば、俺は迷う事なく後者の方が怖いと即答する。前者はいかに最強であろうとも基礎を疎かにしているので土台が脆い。初めのうちは嬉々として見せつけるように秘奥を矢継ぎ早に放つのだろうが、そのどれもが通じないと分かると勝手に自滅するのが目に見える。対する後者はただ基礎だけを磨き上げてきた分だけ土台が安定している。秘奥が使えず、奇をてらった攻撃など思い付かず、ただ自分が振ってきた剣だけを愚直

なまでに練り出すのだろうが、何度防がれようと、自分の剣が通じなくても、折れる事なく剣を振るってくる。

その点で言えば綾辻は後者の人間だった。『ブレイザー 伐刀者』というのは武術も習うが大多数が能力の方を伸ばそうとしている。能力に何かしらの問題がある等の例外でなければそうした方が強くなれると認識されているからだ。その点に関しては文句は無い。例え人間で出来ることを極めた真人間であろうとも、物理法則を無視して能力を使う『ブレイザー 伐刀者』には勝てないと漣の歴史から経験している。だというのに綾辻は能力よりも剣術に重点を置いている例外だった。なんでも綾辻の父親は非『ブレイザー 伐刀者』の剣客だったらしく、その影響から能力よりも剣術を磨きたいと言っていた。

本音を言えば能力も剣術もどちらも磨いて欲しい。天から与えられた才能と、父親から貰った剣術、その2つはどちらも大切な物なのだから。俺の場合は漣の血というインチキがあったので能力を磨く事に集中出来た。どちらも磨くのは困難な事だと分かっているが、綾辻の様な人間にこそ、どちらも磨いて欲しかった。

体感で100ほど打ち込んで来た。流石に一方的にここまで打ち込めば疲れは出て

くるが、それでも綾辻の剣はブレずに鈍らない。倒れるまで試合を続けるという馬鹿げた方法により、疲れた身体でどうすれば効率的に剣を振るえるのかが身体に染み付いているからだ。ほとんどの人間が素振りを疲れたら止めてしまいがそれは間違っている。疲れている状態でこそ素振りをして、疲れている時の剣の振り方を身につけるべきなのだ。そうしなければ戦っている最中に疲れにより剣がブレて鈍くなってしまうから。

まだ綾辻の鍛錬に付き合ってから二週間程度なのだが効果が出ていることを確認し、綾辻の木刀を弾くことで攻勢に転じる。剣速は綾辻が振るう物よりもやや速い程度。俺が本気で振ってしまえば、綾辻はマトモに反応することが出来ないから。初めは不服そうにしていた綾辻だったが、俺が本気で振った剣を見たら無言で首を振って肯定してくれたのは記憶に新しい。

首、鳩尾、肝臓などなどの人体の急所に目掛けて打ち込まれる剣閃を綾辻は危うげなく防ぎながらそれに対するカウンターを放ってくる。綾辻が父親から習った剣……”綾辻一刀流”は後の先を取りに行く受けの剣術。自分から攻めるのではなくて相手に攻めさせ、それを受け流しながらカウンターを決める。同格を相手にするのなら、回避不能の必殺になるだろうカウンターは受け止め、流し、放つまでの一連の動作が淀みな

く行われる。

そのカウンターカウンターの練度を内心で賞賛しながら、空いている左手でそのカウンターを殴って防ぐ。

剣を使うから剣しか使つてはいけないという道理は無い。隙があるのなら、必要があるのなら殴りもするし蹴りもするのが普通なのだ。漣しのの血はそうだと叫んでいるし、オヤジもそれを苦笑いしながらだが肯定してくれた。真つ当な剣士からすれば邪道だと指を指されそうなのだが、これが俺なのだから仕方がない。

「よし、今日はこのくらいにしておくか」

喉に目掛けて放たれた刺突を殴って防ぎ、同時に綾辻の手から木刀を弾きとばすことで手放させる。近くに置いていた水の入ったペットボトルを綾辻に差し出したら、彼女はそれをひったくる様にして受け取ってゴクゴクと勢い良く飲みだした。

「ぶは〜!!生き返るう〜!!」

「俺から見てただけど中々良くなってるじゃないか。綾辻からはどうかは知らないけど」  
「んくボクからしても強くなってるって実感はあるよ？前までだったら疲れただけで剣がブレてそれを直そうとして余計に変になったりとか良くあったし」  
「それは良かった。頼まれて手を貸してるのに結果として出てなかったら意味が無いからな」

弾き飛ばした木刀を拾い上げて外見を確かめる。都合200近くは打ち合っているはずなのだが、木刀には目立った傷は一切入っていない。綾辻の鍛錬と並行して、俺の加減の練習もしていたのだが上手くいった様だ。

これなら、去年の様に再起不能になる奴を出さずに済みそうだから。

「にしても、今日から代表決定戦だね？」

「ぶっちゃけ、授業が減るのは嬉しいけど学校としてそれで良いのかって思ったりしてる」

「あははは……破軍は騎士を育てる事を目標にしてる学校だから、普通の学校とは勝手が違うんだよ」



「それは分かっているけど……ねえ？俺の言いたい事分かる？」  
「分かるけどさ……」

“七星剣舞祭”の枠は各学園で6つずつ、それを奪い合う選抜戦が今日から行われる。月影さんの企みを実現させる為にはその6枠の1つを手に入れなければならないのだが、その心配はしていない。少なくとも現在の破軍学園で俺の相手になる様な存在は教員である寧々と理事長を除いて存在しないから。これは傲慢や慢心などではなくて事実。一輝やヴァーミリオンなどの将来性に期待出来る者は何人もいるが、現段階では相手にならないと客観的に見て理解している。

「あー!!」

「あ、ナナちゃん、おはよう」

結果は決まっている、なのでその過程を楽しもうと考えていると破軍学園の制服を来たオルゴールに操られていた少女がやって来た。記憶も言語能力も無くなった彼女を月影さんの力でどうかして破軍学園に連れてくることに成功したが、彼女を綾辻に紹介した時に呼ぶ名前が無いことに気がついた。

なので名無しからとってナナと呼ぶ事にした。ネーミングセンスの無さが露呈してしまっただが、少なくとも綾辻の考えたメリーさんよりはマジだと思う。

ロングヘア程度まで切り揃えられた金髪は紐で束ねられ、それを揺らしながらナナは俺に向かって飛び込んで来た。彼女の身体のパーツとなった者が俺の事を知っていたのか、それとも俺がオルゴールから解放したからなのか、ナナは俺によく懐いている。ハグなどのスキンシップは良くやるし、昨日なんて俺が風呂に入っている時に入ってきてひと騒動あったりもした。

知能が赤ん坊レベルだから、何も考えずに行動しているのだろうが俺の理性に悪いので控えて欲しい。その内手を出しそうで怖いから。

「うー!!うー!!」

「ハイハイ、ご飯だな? 帰ったら作るから楽しみにしておけ」

「あー!!」

「良くナナちゃんが言ってることが分かるね?」

「読心術だよ」

俺にコアラの様に抱き着くナナの身体の感触を味わいながら、朝食を作る為に部屋に戻る事にした。

## 選抜戦・2

本日4度目となる選抜戦が行われる訓練場では数多くの生徒が集まっていた。その中心にあるのは第4試合を戦う2人の「プレイヤー伐刀者」。

方や、去年の「七星剣武祭」に出場し、優勝候補の1人を打ち破った前年度学年主席の桐原静矢。

かたや、最低ランクのFでありながらAランクのヴァーミリオンを倒したと噂されている留年生の黒鉄一輝。

どちらとも、俺の友人である。

何かしらの意図があるのでは無いかと思う程に良くできた組み合わせだと思う。観客たちは予想されている通りに静矢が一輝を倒すのか、それとも噂が本場で一輝が静矢を倒すのか、それが知りたくて集まっているはずだ。

「……凄い人が集まってるのにボクらの周りだけガラガラだね？」

「人混みが嫌いなもんでな、一輝とヴァーミリオンの試合の時みたいに炎でちよろつと細工させてもらつたんだ……ほら、あーん」

「あーん」

「ししよー、次は私にくれやがれです」

一輝とヴァーミリオンの試合の時の様に炎による瞬間催眠により、席を確保した俺たちは持ち込んでいた菓子を摘みながら試合の始まりを待っていた。綾辻は昨日の内に一回戦目を終えていて、当然の様に勝利している。綾辻の実力なら一輝やヴァーミリオン、後は「雷切」辺りが出てこない限りは問題無く勝てる。相性による不利もあるが、それでも勝てるだけの實力はある。もしも負ける様なら鍛錬のレベルを五段階くらい吹っ飛ばしてやらなければならない。

「なんかゾワつとしたんだけど……!?!」

「あ、多分それは俺のせいだわ」

「どうせロクでも無い事を考えたんじゃ無いですか?」

「うー?」

「なんでも無いよ。ああ、口の周りを食べカスだらけにして……」

持つて来ていたポケットティッシュでナナの口元を拭う。言語能力が死んでいて、まともに喋ることが出来ないナナであるが、だからと言って頭が悪いわけでは無い。暇を見て一般常識を教えているのだが、頭が空っぽだからなのかスルスルと入っていく。

少なくとも、初日であつた様な全裸で風呂に突撃してくるような事は無くなった。寧音にナナの爪の垢を煎じて飲ませてやりたい。

「そういえば新城君はどっちが勝つと思う？僕は期待を込めて黒鉄君」

「私は桐原つて奴の方です。公表されてる伐刀絶技ノウブルアーツを見る限りじゃあ、こいつの能力は対人戦最強クラスです」

「あー……う？」

「ナナは気にしなくて良いよ……俺はどっちが勝つてもおかしく無いと思うな」

一輝と静矢、どちらとも俺の友人であるので期待はしているのだが、だからと言って評価を誤らない。

一輝は武芸百般……刀剣類に限らずに弓術や格闘術などの武術を身に付けられるものは全てを身につけている。それは自分の弱さを自覚しているから。自覚してなお、夢を目指して強さを求めた結果、一輝の技術は間違いなく同年代でもトップクラスのレベルまで昇華されている。

対する静矢の方は対人戦特化。伐刀絶技ノウブアルアートは人間であるのならどんな存在であろうと有効な能力。火乃香が対人戦最強クラスだと言ったのには違いなく、それは「狩人」という二つ名と勝った試合は全てがノーダメージという結果が証拠になる。

その上で、俺はどちらが勝ってもおかしく無いと考えている。

一輝が静矢の伐刀絶技ノウブアルアートの攻略法を見つけられなければ静矢の勝ち。逆に一輝が静矢の伐刀絶技ノウブアルアートを攻略出来れば一輝の勝ちになると睨んでる。

「願わくば、どちらも全力を出し切って欲しいな」

全力を出し切って、それでもなお力を出して欲しい。この2人ならばそれが出来ると信じているから、俺は観客席から入場して来た2人のことを見下ろしていた。

「……ふう……」

喉の渇きに気がついたので行なっていた瞑想を中断し、持参していたペットボトルに口をつける。壁に掛けられている時計を確認すれば時刻は13時25分。予定通りならば時期にアナウンスで入場を促されるだろう。

「緊張、してるのかな……？」



確認の為に改めて口に出してみればトクンと、心臓が高鳴るのを感じた。それに今気がついたのでが、手が僅かに震えている。緊張した事なんて数えるほどしかなく、しかもそのどれもが勝負事に絡んでいなかった。初めて迎える公式戦を前にして、どこか気持ちいが浮き足立っているのが感じられる。

相手は去年の学年主席の桐原君。実力は去年の「七星剣武祭」に出場して優勝候補の1人を倒していることから明らか。それに、シヨツピングモールで起きた「解放軍」によるテロの時に幸運にも彼の腕を見ることが出来た。

主犯格の「伐刀者<sup>フレイザー</sup>」を倒して油断していたのが悪かったのか、人質の中に仲間を流れ込ませるといふ手段に引つかかってしまい、僕らは手を出せなくなってしまうた。

それを解決したのが桐原君だった。彼は弓型の「固有霊装<sup>デバイス</sup>」で矢を放つ事で人質を取っていた男と主犯格の「伐刀者<sup>フレイザー</sup>」を鎮圧した。

それも、たった二発だけで。しかも的確に頭部を貫いてだ。

弓術に触ったことがあるから桐原君の弓の腕が一朝一夕で身につくものではないと分かった。ステラは桐原君のこれまでの試合を見て、戦い方が気に入らなかったのか彼のことを臆病者チキンだと言っていたが、僕はそう思わなかった。

桐原君は勝てる試合しか選ばずに、少しでも負ける可能性がある試合は全て棄権している。それは、彼が出る試合は彼が勝てる確信している。そこまで相手の実力と、自分の実力を把握出来ている人間が臆病者であるはずが無い。

負けるかもしれない。でも、だからと言ってこの戦いから逃げるわけにもいかない。理事長から持ちかけられた取引もあるが、それ以上に控え室に来る前にステラに言われたのだ。

負けるな、勝つてと。

彼女に握られた手の上に手を重ねてあの時のぬくもりを思い出す。珠雫と不知火君以外に僕の事を認めてくれた。そんな彼女に勝つてと言われたのだから勝つ以外にはあり得ない。

『一年、黒鉄一輝君。二年、桐原静矢君。試合の時間になりましたので入場してください』

「——ようっ」

入場を促すアナウンスが聞こえたので座っていた椅子から立ち上がり、控え室を後にする。緊張はまだ続いているものの幾分かは治ってくれて、今は武者震いくらいのものになっていた。手の震えも止まっている。

「〃勝つ〃のは、僕だ」

理事長との取引などすでに頭の中から消え去っている。今の僕の心中にあるのはステラの言葉を叶える事と、桐原君に挑んで勝利を掴む事のみ。

黒鉄龍馬あの人のような英雄になるための第一歩を踏み出した。

## 選抜戦・3

中学一年生の入学式、ボクはきつとこの日の事を永遠に忘れる事はないだろう。

この頃のボクは有り体に言えば天狗になっていた。『ブレイザー 伐刀者』としてのランクはCランクだったが、ボクは天才と呼ばれる類の人間だったから。家の者からも、周囲からも、誰もがボクの事を天才だと言って持ち上げてるから、その頃のボクはその言葉を受け止めて自分が特別な人間なんだと思い込んでしまっていた。

『初めまして、お隣さん。俺は新城不知火って言うんだ。宜しくな』

入学式後の教室で、ボクの隣に座っていた彼がそう言って笑いかけて来た。出来る限り柔らかい笑みを浮かべて敵意のない事を伝えようとしているが、生半可に才能のあったボクは不知火を一目見ただけで彼の人間性に気がついてしまった。

なんだ、この人間は？

こんな人間が存在していいのか？

一目見ただけで、彼が異常の枠に分類される類の人間だと分かってしまった。けど、何よりも恐ろしかったのは彼自身がその事を理解していて、それを隠しながら社会に溶け込んでいる事だった。現代の社会は彼の様な、殺し合いを肯定する人間にとつては住みにくいのだろう。もしも今が戦国時代ならば、彼は英雄として崇められていた事に違いない。息をしないで全力疾走をしている様な、そんな息苦しきがあるはず。だと言うのに彼は本当の自分を隠しながらなんでもない様に笑っていた。

それが途轍もなく怖かった。

だから訊ねた。どうしてこんなところにいるのかと、どうしてそんな風に生きていられるのかと。

『気がついたのか？良い観察眼してるじゃないか……ああいや、辱めてる訳じゃないから？自分の異常性なんそ、一番に把握してる。俺が現代社会における異分子だつてこともしつかりと理解しているぞ？でもさ、だからと言って俺が現代社会で生きちゃいけない

い理由にはならない。郷に入っては郷に従え。現代社会に生まれたからには現代社会の掟に従って生きる、ただそれだけの話だ』

『それにな、俺はただ我慢してるだけだぞ？いつかきつと抑えきれなくなつて爆発する。俺は俺の異常性を把握して、それは現代社会じゃ害悪だつてしつかり理解してるけどそれとこれとは別問題なんだよ』

確かに、彼は異常だった。その異常性を理解していながら、現代社会で生きる事を選んだ人間だった。ボクとは比べ物にならないくらいに心の強い人だった。

今でも本音を言えば彼の事は怖いと思つている。だけど、それと同じくらいに尊敬もしている。彼のストイックでありながら、それでいて楽しむ事を忘れない自由な生き方に憧れている。だからと言つて、彼の様になりたいわけではないが。

その日からボクは自分のことを少しだけ見直す事にした。全力を尽くすわけでは無いが慢心はせず、自分の能力をしつかりと把握して出来る事と出来ない事の見極めを忘れない。人として当たり前に出る事を当たり前前の様にやる。単純な事だったのだが以前のボクはその当たり前前の事すらしていなかった。不知火と出会わなければ、その当

たり前の事をせずには天才と呼ばれたまま天狗になっていたに違いない。

不知火という異常な人間を見て気付かされたのだ。

所詮、桐原静矢という人間はどこにでもいる平凡な天才に過ぎなかったのだと。

不知火と知り合ってからの中学生時代は平穩に終わりを告げ、その時から今まで付き合っている彼女と一緒に3人で破軍学園に進学する事にした。不知火はそろそろ我慢が出来なくなつて爆発するだろう。その時が来たら高みから見物させてもらおうと思つていた。

しかし、破軍学園に進学して目にしたのは最悪だった。

誰もがランク至上主義か能力至上主義で、ステータスや能力の優劣だけで全てを決めてしまつていた。実戦で戦えば強いだろうEランクの「プレイヤー伐刀者」が、Eランクだからという理由で虐められている現場に遭遇した事だつてある。プラスの側面もマイナスの側面も、どちらの人間性も肯定している不知火だが、あしを引つ張ることだけは嫌つていた。そんな彼からすれば、破軍という場所は自分が望んでいた場所だと信じていたか

ら余計にシヨックだったに違いない。

事実、不知火は全学年に喧嘩を売って、その全てをたたき伏せるという大事件をやってくれた。

その結果、不知火は学園から無期限の停学処分を受けて実家に帰って言った。彼が学園を去る間に、ボクとは違う友人の事を頼まれたので引き受ける事にした。その友人は公表されている「プレイヤー 伐刀者」のランクが最低値のFランクだった。しかし、その事を理解しながらも諦めずに目標に向かって努力するだけの強さを持っていた。なるほど、彼の好きそうなタイプの人間だと納得しながら、ボクは彼を虐めから守る為に、ボクが彼の事を虐めることにした。

能力至上主義により対人戦に特化していた能力を持っていたボクは周囲から一目置かれていた。一年生にして「七星剣武祭」の出場選手に選ばれた事も大きかったのだろうが、誰もボクの機嫌を損ねる様な事はしたくなかった。だからボクが彼を虐めているというポーズを取ることで、他の奴が彼の事を虐められない様にした。



それが功を称したのかは分からないが、少なくとも表立って彼の事を虐めている生徒は見当たらなかった。陰口なんかは流石に止められなかったが、不知火が気に入っている人間ならば耐えられると思つて敢えて止まる様な事はしなかった。

不知火の友人――黒鉄一輝もまた、ボクは異常な人間だと見ている。

Fランクで、実家から妨害されていて、周囲に認めてもらえない。ボクなら……いや、マトモな感性の人間ならば絶対に心が折れて諦めてしまう様な劣悪な環境の中にありながらも彼は折れる事なく、歯を食いしばって耐えていた。それを異常と言わずしてなると言うのか。心が強いなんて言葉では説明が出来ない。不知火程ではないが、彼も異常な人間である事には変わらなかった。

そして前理事長が解雇され、新宮寺理事長が新たな理事長として就任した事で行われる「七星剣武祭」の出場選手を決めるための選抜戦で、彼と戦う事になった。

「怖い、の?」

「正直に言わせてもらえばね」

選抜戦に出場する選手の為に用意された控え室。そこで彼女である鈴宮出雲すずみやいづもに膝枕をして貰いながら、ボクは本心をぶっちゃけていた。

「異常筆頭の不知火、あいつほどじゃないけど十分に異常の枠に入ってる黒鉄君が相手なんだ。ボクの自慢の<sup>エリア、インビジュアル</sup>狩人の森<sup>〃</sup>が攻略される可能性だつてゼロじゃない。もしかすともう攻略されているかもしれない。そうなつたらボクは負けるからね。流石に天才のボクとは言え、畑違いの接近戦なんて修める程度にしか嗜んでないし」

痛いのは嫌だ、怖いのは嫌だ。本音を言えば今すぐにも棄権してしまいたい。勝てる勝負にだけ出て、負ける勝負には出ないといういつも通りのスタンスでやり過ぎた  
いと思っっている。

だけど、今回に限ってはそうは出来ない。

桐原の家……ボクの両親から黒鉄君に勝利しろという指示を出されたのだ。恐らくは黒鉄君の事を認めていない黒鉄の本家が圧力を掛けて、それにボクの家が屈したのだ

ろう。前理事長ならば二つ返事で引き受けていたのだろうが、新宮寺理事長はそういう事を嫌う人間だ。だから学園から直接では無く、生徒を仕向ける事で黒鉄君を魔導騎士にさせない様になっている。

それに逆らうことなんて出来ない。棄権なんてしてしまえば様々な方面に影響力を持つている黒鉄の名家により、ボクの実家が潰されるかもしれないから……いや、それだけならまだマシだ。もしかすると出雲の家にも被害が及ぶかもしれない。所詮は妄想、可能性の話でしかない。しかし、可能性が欠片でも存在している以上、ボクに黒鉄君と戦う以外の選択肢は存在しなかった。

「頑張つ、て」

「……ありがとう」

出雲はボクの事情なんて知らない。純粹にボクの事だけを案じて応援してくれている。その事が少しだけ苦しくて……でも、それ以上にボクに勇気を与えてくれた。

『二年、黒鉄一輝君。二年、桐原静矢君。試合の時間になりましたので入場してください』

い』

「よし、それじゃあ行つてくるよ」

「行つて、らっしやい」

「行つてきます」

表面上は穏やかに出雲の見送りに返事を返しながら控え室から出る。黒鉄君にも事情がある事は理解している。だけど、こちらにも負けられない理由がある。

心に火を灯し、それでいて頭は冷ます。心臓から送り出された熱い血液が、身体中を巡るうちに冷えて頭を冷ます。

「『勝つ』のは、ボクだ」

黒鉄君の目標を奪う事になろうとも、彼女を守ってみせると自己暗示の様に決意表明を口にした。

## 選抜戦・4

主役である一輝と静矢が現れた瞬間、騒めきが支配していた訓練場を歓声が包み込んだ。

静矢への声援、そして罵倒。それは静矢の実力を知っているものからの賞賛と、静矢の戦い方が気に入らないからと投げられる負け惜しみ。

一輝への罵倒、そして声援。それは一輝の事をランクだけで判断する人間の心無い声と、一輝の実力を理解しているものからの応援。

「ワーストワン  
落第騎士」と「狩人」の対決がここに実現しようとしていた。

「逃げずに来るとはね……ボクとしては逃げてくれた方が楽で良かったんだけど」  
「僕も『七星剣武祭』の出場を……ううん、その先を目指しているんだから、逃げるだなんてしないよ」

選手説明のアナウンスの声も聞こえない程に2人は目の前の敵に集中していた。前もって相手の事は互いに知っていたが、実際に対峙してみても油断出来る相手では無いと再確認したのだ。

一輝の熱量を伴った剣の様に鋭い気迫が静矢の首に向けられる。  
静矢の冷気を伴った矢の様に鋭い気迫が一輝の心臓に向けられる。

試合開始の合図はまだ掛けられていないというのに、目をそらせばそのまま仕掛けてきそうな相手の様子を見せられれば目をそらすなんて事は出来ない。全神経を眼前の敵に向けながら、試合の審判を務める教員が指示するよりも先に2人は「固有霊装」を顕現する。

一輝の「陰鉄」の刃は震えていた。今まで待ち続けていたチャンスがようやく訪れたのだ。魂を具現化した装備である「固有霊装」が一輝の精神状態を反映していてもおかしくは無い。

対する静矢の「朧月」おぼろづきは静かだった。いつも通りに勝てる戦いでは無いというの  
 理解している。負ける可能性はあるが、勝つ可能性もあるのだ。故に負ける可能性を全  
 て排除し、勝ちを掴む。いつもの作業と変わらないと理解しているのでいつも通りに冷  
 静であるだけだ。

高まる緊張感。それまで行われた戦いとは違う戦いになると感じ取ったのか、観客席  
 から投げかけられる声は段々と小さくなり、やがては大勢の人間がいるというのに息遣  
 いさえ聞こえそうな程の静寂に包まれる。

そしてその緊張が限界まで高まった瞬間――

「LET'S GO AHEAD  
 試合開始――!!」

教員の声が響き渡り、試合が開始された。

それと同時に2人は行動を開始する。一輝は全力で静矢に向かって突貫し、静矢はそ  
 れとは反対に一輝から距離を取ろうと後退する。

この試合の鍵となるのは静矢の伐刀絶技ノウブルアーツの“狩人の森”エリア・インビジブルの存在。発動すれば静矢が止めるまで魔力が続く限り静矢の存在を隠蔽するステルス能力。姿は肉眼では確認することが出来ず、気配や匂いまでも隠し通す。見えないだけで存在はしているので広範囲への攻撃を持っている“伐刀者”ブレイザーには相性が悪いのだが、それを差し引いても対人戦最強と評することが出来る能力である。

発動させてしまえば広範囲への攻撃手段を持たない一輝には打つ手が無くなってしまふ。一輝ならば、発動させなければいいと一輝は答えを出した。過去の静矢の試合の映像を何度も見続けた結果、“狩人の森”エリア・インビジブルは試合開始と同時に発動する訳ではなくて数秒の間を空けて発動されていた。だから一輝は“狩人の森”エリア・インビジブルが発動するよりも先に自分の距離へと飛び込んでいく事を選んだ。

そして“狩人の森”エリア・インビジブル唯一の弱点とも言える欠点の存在を静矢は知っている。自分の技なのだから当然だと言える。だからこそ静矢は発動までの時間を稼ぐ為に一輝から距離を置こうとする。開始の対峙していた距離ではダメだ。あれだけの間合いならば一輝の技量であれば一息の間で詰めることが出来てしまふ。最低でもリングの端か



ら端くらしいの距離が無ければ安心して発動させる事は出来ない。

“朧月”に魔力で構成された矢を番い、ロクに狙いも定めずに大まかな当たりを付けて放つ。早撃ちは一射だけに留まらない。番い、放つまでの動作は瞬きの間。苦し紛れに放たれたとは思えない一射は的確に一輝の心臓に目掛けて放たれ——不意も打てていないその一射は“陰鉄”によって弾かれる。

後ろに飛び退きながらという不安定な状態で、静矢は狙いも定めずに極自然に一輝の急所を、行動をする為に必要な足を狙う。その動作を当たり前の様に行えるのは静矢が天才だから。才能という助走を持ってして、他者よりも優れた結果を出す。他者が鍛錬を積まねば出来ない様な事を、静矢は平然と出来るからという理由でやってのける。

静矢からの容赦ない攻撃を一輝は全て払いのけながら静矢へと近づいていく。 “チリア・インビブル狩人の森”が発動している状態で、どこから来るのか分からないのならまだしも、肉眼で放つ瞬間を確認出来るのなら一輝の眼は矢を捉え、一輝の身体はそれを払いのける為に動くことが出来る。

そして静矢が逃げて一輝がそれを追う。今のところの2人の速度は同じ。しかしリングという限られた範囲に閉じ込められている以上、有利なのは一輝の方で、いずれ静矢の逃げ場が無くなって追いつかれる未来が待っている。

その事に静矢が気が付かない訳がない。故に、追い詰められるよりも先にアクションを起こす。

「<sup>「驟雨烈光閃」</sup>頭上注意だ——!!」

一輝では無くて上空に向けて放った矢は天井に刺さる事なく上空で止まり、そのまま爆発して雨の如くリングへと降り注ぐ。

「<sup>「ミリオンレイン」</sup>驟雨烈光閃」、広範囲へと無差別に矢を降らせる<sup>「ノウブルアーツ」</sup>伐刀絶技。一輝も、そして使用者でもある静矢本人も巻き込みながら矢の数は実に数千本。流石にそれを見ずに避ける事は出来ないとする矢は避け、ある矢は「陰鉄」で捌く事で一輝は矢の雨をやり過ぎることを強制される。

矢の雨が止んだ時にはその影響でリングは砕けてまともな足場は存在せずに、砂埃が舞い上がっていた。視界が悪くなっているのでその場からは動かずに不意打ちへの警戒をしいーそしてここに来て、一輝は静矢の手の上で踊っていた事に気付く。

「使われちゃったか……」

『そうだよ。全く、自爆覚悟で ミリオクレイン “驟雨烈光閃” を使わされるとは思わなかったよ』

砂埃が治って視界が回復した時にはリングの上にいるのは一輝ただ一人だけで、静矢の姿はそこには無かった。しかし、静矢の涙まじりの声だけは距離も方向も分からぬまに聞こえて来る。

ミリオクレイン “驟雨烈光閃” は囷に過ぎず、あくまでも本命は静矢の代名詞とも言える対人戦最強の伐刀絶技 エリア・インビブル “狩人の森”。一輝が エリア・インビブル “狩人の森” をすでに攻略しているのではないかと考えていた静矢だったが、開幕の突貫を見て一輝は エリア・インビブル “狩人の森” を攻略していない事を看破した。

攻略しているのならば突貫なんてせずに エリア・インビブル “狩人の森” を使わせれば良い。そうし

て優位に立っていると誤認させ、油断しているところを突く。自分ならばそうしている。そうしないという事は、エリア・インビジュアル「狩人の森」はまだ攻略されていない。

だから、静矢は自分も巻き添えを食らう覚悟で、ミリオンレイン「驟雨烈光閃」を使った。リスクはあるが、それ以上のリターンがあるから。その背に自分の放った魔力の矢が突き刺さり、その痛みで思わず涙が出そうになったがそれを堪える。

嫌いな痛みと引き換えに、一輝に対する絶対的な優位を得ることが出来たから。

『攻略法が見つかっていないのなら、降参する事をオススメするけど……黒鉄君の事だからしないんだろぅね』

「勿論」

静矢の姿を、現在の位置を理解していないというのに一輝は「陰鉄」を構えて戦う意思を見せている。

間違いなく苦境なのだろう。勝機が欠片として存在しない絶体絶命、敗北の瀬戸

際——しかし、まだ負けていない。自分の憧れた、目指している英雄あの人なら、こんな状況でも勝つに決まっている。

だから、自分も諦めない。敗北を認めず、欠片として存在しない勝機を掴むために全神経を集中させる。

『そう——なら、精々頑張ってくれ』

その瞬間から静矢の意識が桐原静矢から“狩人”へと切り替わった。

## 模擬戦・5

試合の開始から20分程経過した。そして現在の光景は誰もが予想していた通りのものであり、それと同時に誰も予想を超えた光景だった。

リングの上に立っているのは一輝のみ。しかしその姿は凄惨だった。身体を支える二本の足に、“陰鉄”を待つ二本の腕に、背中に、腹に、夥しい数の矢が刺さっている。

“エリア・インビジブル狩人の森”で姿を消されてしまえば今の一輝では対処する手立ては無い。唯一可能性があるとするのなら、不可視では無い矢の放たれた方向から静矢の位置を割り出す事だったのだが、不知火に少なからず影響されている静矢がいつまでも同じ段階で停滞している理由は無い。

“エリア・インビジブル狩人の森”の進化。静矢本人だけではなく、矢までも知覚されないように出来るようになったのだ。

姿も見えず、空を切る音も聞こえない矢を回避する事は不可能。致命傷だけは本能による危機感知により何とか避ける事は出来るのだが、静矢はそれを理解すると致命傷にならない部位を狙い始めた。

先ずは機動力を削ぐために足を、

次に武器を握る手を、

それから時折前後から狙いやすい胴体を、

どれもが致命傷にならない様に細心の注意を払われながら一輝の身体を貫いていた。

これはもはや「試合」では無くて「狩り」だった。一撃で仕留めることが出来ないのであれば少しずつ弱らせれば良いという合理的な考えの元で行われる攻撃。どれだけ一輝が強靱な精神力を持つていようが静矢には関係が無い。ただ淡々と、自分の優位を確保したままで一輝を弱らせるだけの作業だった。

半数の良識のある者たちはこの光景から目をそらす。彼らが目にしたいのは魔導騎士同士の戦いであり、こんな公開処刑の様な作業では無いのだから。

しかし他の者たちはこの光景をまるで娯楽を見ているかのように楽しんでいた。彼らはEランクやDランクの「伐刀者」ブレイザー。常に上を見上げる存在で、高みにいる天才と呼ばれる者たちの活躍を見て羨む者たち。そんな彼らにとつてFランクである一輝の存在は数少ない自分よりも下に位置する存在……つまり、見下げる事が出来る存在だから。

Fランクで留年している黒鉄一輝がCランクで「七星剣武祭」に出場している桐原静矢に敵うはずが無い——そう思う事で自分の行いを正当化する免罪符が欲しいのだ。上の存在に敵わないから諦めた自分たちは間違っていないという許しが欲しくて堪らないのだ。

そういう意味でこの公開処刑の様な光景は彼らが待ち望んでいたもの。Cランクである静矢に歓声をあげながら、Fランクである一輝の愚行を馬鹿にして笑い、自分たちは間違っていないと安心する。それは前理事長の残した悪影響であった。不知火が去年にやらかしていないければ、半数では無くて殆どの人間が一輝の事を嘲笑っていたかもしれない。そう考えれば不知火がやった事は無駄では無かったと言える。



『……まだ諦めないのかい？ 良い加減、自分の負けを認めるべきだと思うのだけど』

“エリア・インビジュアル 狩人の森”

で隠れながら “狩人” は意識を切り替えて静矢として一輝に話しかけた。勝機なんてものは影すら見えない、勝ち目なんて存在しないこの状況にまで一輝の事を追い込んだ。もう諦めても良いだろうと憐れみを込めて問いかける。

そう、静矢は一輝の事を憐れんでいる。ここまで一度も膝を折る事なく、デバイス “固有霊装” を手放す事なく立ち続けていられる精神力の強さは素直に賞賛出来るものとして認めている。しかしこんな状況になろうとも、一輝はまだ勝利を諦めていない。勝ち目が無いことを理解していながら、勝利を掴もうとしている。その諦めの悪さは苛だたいを通り越して憐憫という感情しか出てこない。

ここで折れば楽になれる。彼の戦歴に黒星が一つつくことになり、七星剣武祭の代表になることが難しくなるだろうが、それでもこの状況から勝利をもぎ取るよりも楽なのは間違いない。

たった一度だけ敗北を認めればまだ望みがある。だというのに、

「まだ、だあ……ッ!!」

一輝はその敗北を否定する。身体を貫いている矢が伝える激痛に耐えながら、力が抜けそうになっている四肢に力を入れて倒れることを拒否する。一輝の目はまだ勝利を諦めていない。ここからの勝利を成し遂げようと闘志を雄々しく燃やしている。

『……ああ、吐き気がする』

一輝にとって諦めることが何を意味し、何故そこまで諦めることをしないのかは静矢には分からない。しかし、それが静矢にとってしてみれば気持ち悪くて仕方が無かつた。

人間に限らず生物というのは本能的に楽を求める。それは言い換えれば効率的に生きようとする事。どんな生物であろうと僅かにしか得ることの出来ない餌場よりも、より多くが得られる餌場の方を望む。より少ない労力メイットでより多くの利益を、それは愚行だ

と糾弾する事なんて誰もしない。一輝の場合では当然だと多くの人間から嘲笑われる事になるかもしれないが、真実彼の事を理解してくれる人間が支えてくれるに違いない。

だというのに、一輝はそうはしないのだ。楽をする事は許さないとでも言いたげに、どこまでも困難に溢れた選択肢を選んでいる。あの不知火でさえ、そういう側面は持ち合わせているものの基本的には効率的に生きようとしている。不知火の全てが異常だと言えるのなら、一輝は諦めの悪さに関しては不知火を超えるほどの異常だと言えた。

だからこそ、一輝の事が気持ち悪くて仕方がない。不知火は異常でありながらもまだ人間性を持っていた。しかし一輝の有様をみれば不知火でさえ持っていた人間性が希薄過ぎるのだ。まるで人の形をした何かにか見ええない。不知火はこんな一輝の姿を素晴らしいと賞賛するだろうが、静矢からしてみればこれはタチの悪い毒としか思えない。

例えば誰かが一輝の姿に憧れて、彼の生き様を真似たとしよう。その先にあるのは地獄だけだから。

救いなのはその異常性を一輝が完全には理解しきっていない事だろう。自分の本質がとんでもない物だったなんて気がついてしまえば、いかに強靱な精神を持っていたとしてもどうなるのか分からない。

『もう良い、終われよ。君はこれを不幸だと思うかもしれないけど、紛れもなくこれは君にとつての幸運なんだからさ』

故に桐原静矢は精神を“狩人”に切り替えて矢を番う。試合を始める時にはトドメは幻想形態で思っていたが、それを止めた。ここで確実に殺してやる事を決意する。仮に幻想形態で倒して心が折れるのならそうしただろう。しかしこれまでの一輝を知っている静矢は一輝がその程度のことでは心が折れない事を知っている。生かして地獄のような人生を送らせるよりも、ここで殺した方が周囲の為……そして何よりも一輝本人のためになると判断しての事だった。

放たれた矢は全てがステルス迷彩が施されていて不可視。さらに一本だけではなく脳天、喉、鳩尾の急所三箇所を狙う3本。仮に生存本能による危機察知で回避か防御が

成功したとしても、それを見越してその瞬間に次矢を放つ準備はしてある。

対抗手段を持たない一輝にこの必殺を回避する事は不可能。

“狩人”の手のひらから逃れることは出来ず、獲物である“落第騎士”ワーストワンは敗北してその命を落とす——

「——まだだ」

## 選抜戦・6

「な——」

一輝の言い放った敗北を否定する言葉と共に不可視の鎌が切り払われた。その結果に静矢は瞠目する事になる。闇雲に「陰鉄」を振り回して偶々当たったのならばそういうこともあるのかと自己完結して次矢を放っていただろう。しかし一輝が「陰鉄」を振るった回数はたったの一度だけ。その一度で迫り来る3本の矢を的確に切り捨てたのだ。

殺されると直感的に理解した事により危機察知が高まり、それで察知されてしまったのかと思ひ、次矢を両腕の肘に向けて放ち、さらに念を入れて一射を弧を描きながら頭部に向かう様に放つ。これで一輝は受ければ死ぬ頭部の矢だけに反応し、貫くのでは無く切り裂く事を意識しながら放たれた矢はこのまま一輝の危機察知能力を掻い潜って両腕を切り落とすはずだった。

「……そこだね」

頭部に向かう矢と両腕に向かう矢。その3本を一輝は目を閉じながら最低限の体捌きで躲してみせた。目を閉じている上にそもそも不可視であるはずの矢を、まるで見えているかの様に皮一枚で掠る程度に避けてみせる。

『またか……っ!!』

「無駄だよ、桐原君。もう君の事は完全に捉えた」

「エリア・インビジブル 満身創痍の状態でありながら、一輝は堂々と立ちながら “陰鉄” の切っ先を “狩人の森” で隠れている静矢に向ける。ハツタリかと思いきや数歩ほど今の立ち位置からズレて見たのだが、 “陰鉄” の切っ先はしっかりと静矢の事を追っていた。一度だけならば偶然だと切り捨てられるのだが、2度も続けば必然である。この瞬間、対人戦最強クラスであるはずの “エリア・インビジブル 狩人の森” は一輝によって攻略された。静矢は悟った。

「……やれやれ、自信無くすなあ」

「エリア・インビジブル 狩人の森」が攻略されて居場所がバレてしまった以上、このまま続けても魔力の無駄になるだけだと判断して静矢は「エリア・インビジブル 狩人の森」を解除して姿を現した。

「これからの参考にしたいんでどうやってエリア・インビジブル 狩人の森」を攻略したのか教えてくれな  
いかな?」

「簡単な事だよ。エリア・インビジブル 狩人の森」は間違いなく対人戦最強クラスのノウブルアーツの伐刀絶技だ。どうやっても、看破する事は出来なかつた。それで次に僕の観察眼で桐原君の人間性を看破しようと思っただけけど……凄いな、完全に意識を切り替えてて人間の行動の根幹を司るはずの絶対的価値観アイデンティティさえも完璧に変化していた」

「相変わらず変態的な観察眼だね」

「真顔で言わないで。割と傷付くから」

冗談の様な言い合いが間に入ったものの静矢の心中は穏やかでは無い。一輝は技術は卓越しているが、それよりも照魔鏡の如き観察眼の方が厄介だと静矢は考えていた。だから「エリア・インビジブル 狩人の森」が攻略されるとするのならそれによるものでは無いかと予想していたのだが一輝の言葉を信じるのなら違うらしい。



「目で見ようとしても捉えられないと分かった。だから、別の物で捉える事にしたんだよ。幸いな事に、いくら知覚できなくなる程のステルス能力だとはいえ、そこから居なくなるわけじゃない。自分が出してる音は誤魔化せるみたいだけど、流石に周りからの音までは誤魔化せなかったみたいだね」

「は？……いや、いやいやイヤイヤ……おいおいマジかよ!？」

一輝が何が言いたいのか初めは分からなかったが、静矢の天才に分類される頭脳はすぐに答えを弾き出してしまふ。それは最も納得出来る答えでありながら最もあり得ない答えであり、静矢は信じたくは無かったがそれしか答えが見つからなかった。

「お前まさか……反響音でボクの位置を探したのか!？」

「正確に言えば、音が消えてるところを探したんだけどね」

静矢の答えを一輝は肯定しながらも訂正する。

「反響音による索敵自体は珍しい物ではない。生物でもコウモリやイルカなどが超音

波を用いた反響定位で周囲を探っているし、人間でも機械を用いてソナーという形でそれを使える。あるいは盲目者の様に訓練を積めば精度は落ちるものと同じ様な事を出来るようになる。

しかしそれはあくまでそれに特化した器官を持っているか、それ専用で作られた機械、あるいは五感の一つを失った事による他の感覚の鋭敏化が無ければ不可能である。

だというのに、一輝はその不可能を成し遂げたと言う。正確に言えば、エリア・インビジュアル 狩人の森“の効果によりステルス状態になつている静矢は音を反響しない。だから音が消えている場所に静矢がいると看破していた。

「巫山戯てる……狂つてるよ、お前」

「酷いことを言うなあ……まあ、自覚はしてるよ。でも、そうしなければ負けていたんだ。可能か不可能かじゃなくて、やらなければならなかった。おかげで、以前よりも確かに周囲の状態を把握できる様になつたよ」

窮地に追い込まれた事による覚醒、そして進化。それまで視界と気配により周囲を認

識していた一輝に音という新たな要素が加わった事により、以前よりも更に知覚能力を向上させた。

「それが狂ってるって言うんだよ……!!」

窮地に追い込まれたから覚醒し、進化した？

やらなければならなかったからやってみせた？

何を言っているのか理解が出来ない。

人間の強さと言うのは素質と努力が全てだ。稀に才能による爆発がレベルを大きく引き上げる事もあるが、無能である一輝にはそれは当て嵌まらないはずだった。それなのに彼はそれをやってのけた——意志力の爆発により、その例外を成し遂げたのだ。

それを悟ってしまった静矢が苦々しい顔になるのも仕方がない。そんなものは創作物の中だけで十分だ。それにこの構図では一輝がまるで英雄であり、自分が悪役では無いか。

だがしかし……成る程、一輝が主役というのは妙にあっている。そもそも前提条件からしても、一輝はその資格を満たしている。英雄の始まりとは不遇が付き纏う。劣悪な環境下で心が折れる事無く、類稀なる意志力を持ってして前へ前へと進み続け、輝かしき伝説を打ち立てるのだ。

そうなれば、静矢の役割は一輝の英雄譚の幕上げを告げる端役と言ったところか。自分よりも格上を知恵と勇氣にて打ち破る格上殺しジャイアントキリング。それを嫌う者などいるはずがない。格下が格上を打ち倒す、それはそれを見ていた者たちに「もしかしたら自分も」と希望を抱かせるのだから。

「……ふざけろよ」

理解はした、納得もした。だからと言って、それを認められるかは別問題だ。

英雄譚の幕上げを飾る事を光栄に思いながら踏み台となれ？

英雄が遍くを照らす光となる為の薪となれ？

全くもって御免だ。そんな役割なんぞ、死んでもやりたくない。

そも、一輝に事情があるように静矢にも事情があるのだ。英雄だからという免罪符を掲げられたからと言って、こちらの事情を無視して一輝を優先しろなどと認められるはずがない。

「さあ——勝負だ、一刀桐原君」

一輝の全身から魔力の光が溢れる。一輝の肉体を貫いていた鍬が、再生する肉に押し出されてリングに落ちる。伐刀絶技ノウブルアーツ“一刀修羅”。諦めを否定し続けた一輝が得た、一分間限り最強に至る絶技。狩人の森エリア・インビジュアルのステルスが剥がされた以上、静矢は姿を晒して戦うしかない。これまで静矢が一輝に優位に立てていたのは、狩人の森エリア・インビジュアルのステルスがあつたからこそ。一輝の眼と現在の身体能力を持つてすれば、距離によるアドバンテージなど無意味になり容易く潰される。

この瞬間、狩人ワーストワンと落第騎士ワーストワンの優劣は逆転した。

諦めを否定し続けた落第騎士ワーストワンが、存在しなかつたはずの勝機を掴んだ。

勝利を手にするために、一輝はクラウチングスタートを切るように態勢を低くしながら突貫した。奇しくもそれはこの試合の幕開けと同じ展開。しかし、その速度は比較にならない程に速い。

まさかと、もしかすると、観客席にいた者たちは考えた。このまま一輝が静矢を下して、勝利するのでは無いかと。

「――」

静矢の耳は音を遮断し、目は一輝の姿を捉えない。

「――あ」

その瞬間、静矢が見たのは、そして聞いたのは、彼が負けられない理由だった。

自分の才能を誰よりも信じてくれ、破軍学園に送り出してくれた両親の姿があった。

「……ああ」

自分が愛している、そして頑張つてと言つてくれた少女の姿があつた。

『静矢、くん』

「……ああ、そうだったね……出雲」

負けられない理由があつた。

敗北を認められない感情があつた。

なら、負けてやる道理など存在しない。

英雄譚？上等だ。好き勝手に光り輝いて大衆に夢を見せてやるといい。

ならばこそ、こここの勝ち譲らない。

その輝きにて勝利への道を照らし出すというのなら、無明の闇に沈めてやろう。

意識が「狩人」のものから桐原静矢へと切り替えられる。それと同時に「朧月」が分解され、二刀の小太刀に変形する。それを左右の手で一本ずつ握り締め、振り下ろされる「陰鉄」の斬撃を交差しながら受け止める。しかしその程度で一輝の文字通りの全力の一撃を止められるはずがない。身体が軋みをあげながら限界を訴え「……それにより出てきそうな情けない声を嘔み殺しながら魔力を放出する事で拮抗まで持つていく。

「黒鉄君に負けられない理由があるのは理解した。だけど、それはボクも同じだ」

「だろうね。事情までは分からないけど、そんな気はしていたよ」

「ああ、だから……」

「だとしても……」

互いに互いが負けられない理由がある。

勝利への渴望を抱いている。

「勝つ」のは、僕だ……ッ!!」

「勝つ」のは、ボクだ……ッ!!」



互いの事情をそれとなく理解していながらも、理解した上で己が勝つと2人は叫んだ。

## 選抜戦・7

ぶつかり合う鋼と鋼。

漆黒の日本刀が高速で振るわれ、それを霞が如く輝く二本の小太刀が受け止める。

現在の静矢は一輝を前にして劣勢だった。それも無理はない。何とか魔力の放出により一輝の剣戟を受け止める事には成功しているもの、一輝の身体能力は“一刀修羅”で数十倍にも引き上げられている。

一太刀一太刀を受け止める度に肉体は悲鳴をあげ、骨子はギチギチと軋みをあげる。肉体的なスペックを上回られて技術は元より一輝の方が優っている。この現状は静矢が反撃など一切考える事なく防御に回っているから出来上がっているのだ。一瞬でも反撃をしようなどと考えた瞬間に、一輝に斬り伏せられる未来が待っている。

勝機があるとするなら、それは耐える事だけだ。

一輝の「一刀修羅」は本人の技量の相まって破格の伐刀絶技ノウブルアーツ。しかし、その効力は1分しか続かない。そしてその1分が終わってしまえば、全力を出し尽くした反動として一輝はマトモに動かなくなってしまう。1分間限りにおいて最強に至るとはいえ、その1分間で倒さなければ待っているのは敗北だ。そこまで耐える事が出来れば、静矢は勝てる。

それを静矢は理解して実行している——だからといって、達成出来るかは分からない。

静矢の体感時間ではもう十数分経った様な気がする。防いだ剣戟の数は数百になり、小太刀を持つ手は痺れて感覚が無くなりつつある。しかし、現実で経った時間は僅かに20秒。あと40秒も一輝の攻勢は続く。

全身に走る痛みを噛み殺しながら、静矢はそれでも耐えていた。本音を言えばもう止めたい。この手に持つ小太刀を投げ捨てて大の字に転がり、泣き叫ぶ様に降参と口にしたかった。

だが、それをしなかった。しようとする度に脳裏に浮かんでくるのは両親と出雲の顔。それらが思い浮かぶ度に身体の底から訳のわからない力が湧いてきて、そこからまた歯を食いしばって耐えられる様になる。

それこそ、誰かのために戦うという事に他ならない。黒鉄の本家から圧力をかけられ、負けたらどうなるのか分からない彼らを守ろうとする為に、静矢は限界を超えて力を振るう。

そう、ここにきて静矢は一輝と同じ様に覚醒を果たしていた。積み上げた努力と生まれ持っていた素質、そして才能……一輝に負けるという窮地に追い込まれた事で条件が満たされた。だからこそ、一輝の異常性が身に染みてわかる。

追い詰められた事は理解しよう、今も自分がそうしているのだから。しかし意志力の爆発とはなんだ？ 冗談にも程がある。そもそも……一輝がどうしてここまでやるのか理解出来ない。

自分の様な身近な人の為というのは良くある理由だ。物語でも当然のように取り上げられている、在り来たりで王道的な理由。悪役はそんな事でなんて叫んで覚醒した主役を罵倒しているが、覚醒する理由なんてその程度でいいのだ。

だが黒鉄一輝はどうなのだろうか？一体どんな理由で、一体誰の為に覚醒しているというのか。一輝の目的を不知火から聞かされている静矢だが、聞かされているからこそ分からない。

顔も知らない見ず知らずの誰かの為に？

自分が焦がれた黒鉄龍馬の様になりたくて？

それはなんて――狂った考えなのか。

顔も知らない誰かの為に自分の命を削りながら戦うというだけでもアウトなのに、それに加えて一輝が目指しているのは黒鉄龍馬の様な存在。どうして見ず知らずの誰かの為に命を懸けられる？どうして雲の上の様な存在になれると思っっている？一輝の思考は常人では考えられない狂人の発想に他ならない。

「最悪だ……ッ!! 天下無双にイかれてやがる!!」

「……知ってるよ。正気なんかじゃこんな事をしようだなんて思わない」

そして一輝はその歪みを自覚している。自分の生き方が、そして自分の考えが如何に大多数の人間からしてみれば歪なのかを理解している。去年までは自己評価が低過ぎたのでその歪みを理解していなかったが、不知火に諭された事により己がどれだけ外れているのかを自覚した。

だって、そうでもしなければいけないから。

そうしなければ、自分の焦がれた黒鉄龍馬あのひとの様になれないと悟ったから。

正気でいては辿り着けぬのならば、狂気に堕ちるしかない。元より自分の歩む道は血塗られた修羅道だと理解している。

だけど、それでも、諦めなくても良いと誰かに伝えたかったのだ。

ならばこそ、この場での勝ち譲らない。静矢の方にも事情があるのは理解してい

て、その上で勝ちを掴みにいく。

「常人じゃなくて良い、狂人で良い。そうしなければ征け無い道ならば、そうするだけのこと。だからこそ言わせてもらおう——勝つ——のは、僕だ!!」

再び起こされる意志力の爆発、一度の戦闘で再度行われる覚醒。跳ね上がる攻撃の回転率。守りに優れている小太刀が追いつかなくなり、徐々に防御を通り抜けて静矢の身体を傷つけて行く。受け止める度に筋肉繊維がプチプチと音を立てて千切れ、骨が耐久値を超えてヒビが入り出す。

それは一輝も同じ事。 “一刀修羅” とは言ってしまうえば自爆技なのだから。魔力のリミッターと同時に身体のリミッターも解除した事により身体能力も跳ね上がるが、身体のリミッターとは肉体が壊れない為に付けられている。限界を超えた出力を出せばどんな装置でも自壊するのは当然の事。一輝の身体もまた、静矢と同じ様に筋肉が千切れ、骨が砕け——それらの激痛を気合いと根性という精神論で耐えながら、寿命を削る再生能力にて治している。

そして、ついにその時は訪れた。

「――あ」

静矢が左手に持っていた小太刀が根本から砕け散った。『固有霊装』の強度は高く、並大抵の事で壊れる様な代物では無い。しかし、物質としてある以上は壊れるのだ。

そしてこの事態は偶然では無く必然。『一刀修羅』を使用し、静矢が『朧月』を弓から小太刀に変形させた瞬間より、一輝は初手から小太刀の一点を狙い続けていた。それにより小太刀は耐久値を超え、砕け散った。

『固有霊装』が破壊された事で発生した反動フィードバックによる痛みを感じながら、砕け散った小太刀の残骸の向こうで『陰鉄』を振り上げる一輝の姿が見える。

この瞬間に、静矢の勝機は完全に消失した。守りに徹するという手段もあったが、それは小太刀が二本あることが前提。一本だけ残っているが、それだけでは一輝の剣戟を防ぎ切れることは敵わない。早ければ一合、遅くとも十合に届くかどうかのところで斬り



捨てられる。

静矢は己の敗北を確信した。その敗北からはどう足掻いたところで逃げられない。しかし、だからといって足掻きを諦める理由にはならない。

残された小太刀を真っ直ぐに突き出す。狙うは目の前に立つ一輝の心臓。如何に異常な再生能力を持つていようと、重要な臓器を潰されれば生存は難しいはず。そして必殺の一撃を決める為に踏み込んできた一輝にとって、この一撃は回避不可能なカウンターとなる。

一輝の“陰鉄”が、黒い軌跡を描きながら振り下ろされる。

静矢の“朧月”が、名の通りの朧げな光を残しながら直線に放たれる。

それが、この試合の最後の一撃だった。

最後の一撃が放たれ、1人が崩れ落ちる。左の胸から小太刀を生やしながらも最後まで立っていたのは――黒鉄一輝だった。

最後の心臓狙いの静矢の刺突は直前になって一輝が僅かに身体をズラした事により、心臓では無く肺を貫いた。肺も重要な臓器であるのだが、心臓程ではない。そう考えて一輝は心臓を守る為に肺を犠牲にしたのだ。

初めの数秒は観客たちは困惑していたが、一輝が高々と拳を突き上げて勝利を誇った事により、勝者は誰であるかを理解して訓練場が揺れる程に歓声をあげた。

## 選抜戦・8

「にしても良いものを見せてもらったな」

瞼を閉じて脳裏にて反芻するのは一輝と静矢の試合。理外に頭から突っ込んでいる様な連中からしてみれば、学生の試合なんて子供のするチャンバラの様にしか思えないのだが、それ故の熱量を見せてもらえた。

何が何でも自分の願いを貫こうとする一輝。

その願いを気持ち悪いと否定して、負けられないと叫ぶ静矢。

俺から言わせて貰えば、そのどちらも間違っていない。

一輝の願いは確かに眩しいものなのだが、その輝きに目を眩ませる事なく見ることが出来れば静矢の様に気持ち悪いと否定したくなるような物に成り下がってしまう。それに関しては俺からは思うところはあっても何も言わない。何を思い、それをどうする

かなんて当事者たちだけの特権だから。俺は精々娯楽半分愉悦半分で高みから眺めさせてもらおう。

だが、もしも、一輝がその願いを抱いたままに俺の前に立ったのなら、その時は一輝の行いを賞賛しながら相手をするでしょう。

『一年、新城不知火君——』

「もう出番か」

進行のアナウンスが聞こえてきたのでその場から立ち上がり、控え室を後にする。火乃香はナナの面倒を見ながら綾辻と一緒に応援していると一言づついていた。師匠として、兄として、情けない姿を見せない様にしなければならぬ。

それに今の俺はとても気分が良かった。あんな魂を剥き出しにして行われる戦いを見せられたのだから滾らない訳がない。相手によってだが、全力で戦うこともやぶさかでは無い。

「精々、この昂りを萎えさせない相手だと嬉しいものだ」

ハンガーに掛けておいた赤いコートを羽織り、内ポケットからタバコを取り出して一服しながらこれから戦う相手に僅かな期待を抱いて訓練場に向かう事にした。

『……長らく行われた選抜戦、いよいよ本日最後の試合となります!!』

訓練場の観客席は下手をすれば一輝と静矢の試合の時よりも多くの人間が集まっていた。彼らの時は何人かは勝敗を予想しただけで見学には来ようとしていなかったのだが、このカードだけは目で見なければならぬと押し寄せているのだ。

それは、静矢との激戦を制し、“一刀修羅”の反動でボロボロになっている一輝でも変わらない。

「ちよつとイツキ、本当に大丈夫なの？」

「あたしもステラちゃんと同意見だわ。今すぐにも保健室に行つた方がいいと思うのだけど……」

そんな状態の一輝の事を気にかけているのはステラと、珠雫のルームメイトの有栖院凧。2人の意見は極まともなもので、“一刀修羅”の反動によりボロボロになっている一輝は本来なら寝込んでいてもおかしく無い程の重傷なのだ。静矢との試合で負つた怪我自体は再生しているが、魔力と体力は尽き掛けていて意識を保っているのがやっとの有様。何も知らない2人からしてみれば勝敗が分かりきっている試合をそこまでして見る価値はあるのかと疑問に思つてもしょうがない。

故に、知つている一輝と珠雫は首を横に振つて2人の言葉を否定した。

「違うわアリス。この試合は必ず目にしなくちゃいけないのよ」

「そうだよ。ステラ、君も『七星剣武祭』で優勝を目指すのなら、何があってもこの試合だけは見逃したらいけない。もしかしたらこの先、彼が戦うのを目に出来る機会が無いかもしれないから」

「彼？『雷切』の東堂先輩じゃなくて？」

「確かに東堂先輩も凄い。だけど見たいのは不知火の方なんだ」

初めは2人が警戒しているのは出場選手の片方である生徒会長の東堂刀華とうどうとうかの方だとアリスは考えていた。

破軍学園序列第1位。昨年の『七星剣武祭』で準優勝の功績者。名実共に破軍学園の最強として知られていて、その上少し調べればあの『英雄』と呼ばれた黒鉄龍馬の終生のライバルにして現役の老騎士、『闘神』の南郷寅次郎に師事している事まで分かる。

間違いなく破軍学園での代表選手としての最有力候補。そんな彼女の事を警戒するのは分かるのだが、一輝と珠雫の警戒しているのは無銘のもう1人の方だ。

新城不知火。公式戦での記録はゼロ、去年に傷害事件を起こして無期限の停学処分を受けて学園から姿を消していたが、新理事長となった黒乃により停学を解かれて学園に戻って来た生徒。調べて分かるのはその程度で、一度だけ遠くから見たのだがステラの様な強者特有の雰囲気纏っていないのでアリスには2人がそこまで不知火の事を警戒する理由が分からなかった。

しかし、詳しくは知らないものもの不知火の事を知っていたステラはその名前が出ると納得した。

「成る程、アイツが出てくるのね？」

「あらすテラちゃん、彼の事を知っているの？」

「直接戦ったことは無いけど……アタシの『ドラゴンブレス 妃竜の息吹』を纏った『レイヴアティン 妃竜の罪剣』の一撃を片手で止められて、その上で温いって言われたわ」

「……え？ 確か『ドラゴンブレス 妃竜の息吹』は摂氏3000度あるんじゃないやなかったかしら？」

ステラの攻撃力のランクがトップの評価であるAだということはアリスも知っている。摂氏3000度の炎を纏った大剣の一撃を片手で止めたというのは信じられない



話なのだが、ステラの顔を見る限りは嘘を言っているようには見えない。

アリスは知られていないが為に不透明な不知火を自分の目的の邪魔になると考えて警戒する事を決めた。

自分がもう見限られていることに気付かずに。

『それでは、選手の入場です!!』

『ウツヒョー!! 待ってました!! この瞬間の為にこんなクツソつまんねえ事やってんだよ

……!!』

『西京先生、ここに西京先生対策に用意されたメモがありましたですね?』

『ん? 何が書いてあるの?』

『えつと…… // 仕事くらいちゃんとやれ。せめて巫山戯た発言だけは止めろ。出来なかつたら出禁だ”って書いてありますね』

『……さあ、真面目に仕事をしようか!!』

『超高速手のひら返しですね!』

アナウンスで実況と努める放送部の月夜見つぐよみと寧音が軽いコントの様な掛け合いをし

ていたが観客たちは大して気にも留めずにリングへ集中していた。

左右に向かい合う通路からリングの上に向かって来たのは赤いコートを破軍の制服の上に羽織った不知火。そして栗色の長い髪を靡かせる鋭い眼光の少女、東堂刀華。

「……久しぶりですね。私の事を覚えていますか？」

「覚えているとも。去年の腐りきっていた破軍の中で数少ない真人間の一人だ。しっかりと頭の中に刻み込んである」

「良かった。ここで覚えていないだなんて言われたらショックで泣いちゃうところでした」

「キャラじゃないなあ」

リングの上で、解説の声を無視して不知火と刀華は親しげに話し合っていた。言葉こそ穏やかなものなのだが、刀華の鋭い眼光は欠片も翳らず、それを受けながら不知火は涼しい顔をしている。

「だったら覚えていますよね？ 去年の事も」

「当然覚えているとも。倒れているお前を見下しながらリベンジはいつでも受けて立つって約束をした……まあ、停学喰らったせいでも有耶無耶になったけどな」

去年の傷害事件、その時に狙ってはいなかったが当時の生徒会メンバーであつた刀華もまた不知火と戦つていた。

その結果は——惨敗。擦り傷一つすら付けることができずに、不知火に負けた。

その時に地に伏せて、砕けた<sup>デ</sup>固<sup>バイ</sup>有<sup>イス</sup>霊装<sup>ス</sup>を握りながらも戦意を衰えさせていなかった刀華に不知火はリベンジはいつでも受けて立つと約束をしたのだ。もつとも、その後直ぐに無期限の停学処分を受けた事で不知火は学園から姿を消してしまったので果たされることは無かつたが。

「これはリベンジか?」

「ええ。私が前に進む為に、あの時から私がどのくらい強くなったのかを知る為に、私は貴方に挑みます」

「——」

瞬間に刀華から放たれたのは純粹な闘気。一輝と同じ様な鋭さを持ちながら、それでいて荒々しさも備えているそれを浴びて不知火は身震いする。

無論、怖気付いた訳ではない——喜んでいるから。

絶対的な敗北を味わっていないながらも、折れる事なく己を磨き続けて再び自分の前に立っている。その素晴らしさに感動すら覚える。

「ああ、良いぞ。喜んで受けて立つとも。それと今の俺は気分が良いんだ。本気は出さ  
んが、加減は無しでやらせてもらおう」

ある意味傲慢とも捉えられる様な発言だが、間違っではない。不知火が本気で戦った場合、最悪破軍学園そのものが無くなりかねない。黒乃と寧音がいるのでその最悪の事態にはならないだろうが、万が一に備えて本気を出さない事になっている。

故に加減はしないと云った。本気で戦わない事を決めている不知火からすれば、それ

は限られた上での全力で戦うという意思表示なのだから。

それに大して何も反論する事なく刀華は「固有<sup>デ</sup>霊装<sup>バイス</sup>」である「鳴神」を顕現させ、鞆に納めた状態で構える。不知火もそれに応じる様に「鬼灯」を顕現させ、右手で持つて構えた。

審判役の教員はそれを見て、自分が出る幕は無いと考えてリングから降りた。これは選抜戦でありながら、選抜戦では無い。試合の始まりも、終わりも、この2人だけが決められる事だと理解したから。無論、万が一に備えていつでも止められるようにしているが、基本的には試合の終わりまでは手出しはしない事にした。

職務放棄のように捉えられても仕方ないが、誰も文句を言わない。彼らもまた、その事を漠然と理解しているから。

緊張感が高まり、まるで水の中に引きずり込まれたかのような息苦しさを感じる。その原因は刀華の闘気。それを不知火は一番間近で浴びながらも顔色一つ変えない。

そして誰かが立てた僅かな物音。それが試合開始の合図となり――

「――  
// 建御雷神 //  
」

――刀華が神速の一撃を不知火に叩き込んだ。

## 選抜戦・9

観客席に座っていた誰も何が起きたのか理解出来ていなかった。不知火と刀華が対峙していた、そして閃光が瞬いた瞬間に轟音が響き渡り、リング上から不知火の姿が消えて“鳴神”を振り抜いた刀華の姿だけがあった。

消えた不知火の姿はリングから離れ、観客席を飛び越えた場所に出来上がった不自然な瓦礫の山の中。あの一瞬でここまで吹き飛ばされたのだ。

何があったのか完全に気がつくことが出来たのは放送席で爆笑している寧音だけ。眼に自信があった一輝でさえ、今の光景を完璧には捉える事は出来ずに大凡の予想しか立てられなかった。

『うはははッ!!マジかよ!!凄え!!そして不知火だせえ!!』

『ちよ、西京先生!!何があったんですか!?!私たちが着いていけないんですけど!?!』

『ん？今のか？一言で言えばとーかの奴が超高速で真っ直ぐに不知火に突っ込んで行ったんだよ』

『超高速でつて……視認出来ないスピードですか!?!』

寧音の言ったことは正しかった。刀華がした事はその通りだから。しかし、それだから月夜見を始めとした観客たちはそれが信じられなかった。一瞬だけ光って見えにくかったからとは言え、人間がそんな速度で動けるはずが無いから。

それを可能にしたのが伐刀絶技ノウブルアーツ “建御雷神”タケミカヅチ。刀華の能力で前方の空間に磁界を形成し、自分の肉体にも磁力を付与して目の前の磁界に飛び込む……言ってしまうえば自分の身体を弾丸としたレールガンと同じだ。その破壊力は不知火が吹き飛ばされた事から強烈だと分かるが、余りにも自身への危険性が高すぎたので完成するまで使用を自ら禁止していた技である。去年の “七星剣武祭” では完成が間に合わずに決勝戦で戦った諸星雄大もろぼしゆうだいに敗れてしまったが、もしも間に合っていたら自分が優勝していたと確信していた。

そしてそれが間違いでは無かったと目の前の光景が証明している。未完成時には反



動により全身から血が吹き出して筋肉がズタボロになっていたが、完成した今となってはその反動は存在しない。連続で使えと言われれば即座にもう一度撃てる状態。

一瞬で決着がついたと誰もが考えていた。あんな技をマトモに喰らって戦闘を続行できるはずが無い、そう考えるのはおかしく無い。しかし、リングの上に立つ刀華は抜いた“鳴神”を再び鞘に納め、開始時と同じ様に構えていた。

“鳴神”にあった手応えから直撃した事には間違い無い。しかし超高速でブレる景色の中で、不知火が動いているのが見えたのだ。それにあの男がこれくらいで終わるはずが無い。

その考えを肯定する様に、瓦礫の山が炎上する。

燃えるはずの無いコンクリートを薪にする炎は数秒だけ燃え上がり、消えた時には大の字で寝っ転がる不知火の姿があった。

「初撃必殺とは恐れ入る。それに“建御雷神”か……成る程、確かに雷神で剣の神と言

われる神の名前に相応しい一撃だな」

「ヒッ——」

何事も無かったかな様に立ち上がる不知火の姿を見て、近くにいた女生徒が悲鳴をあげた。それはそうだろう。言動こそいつもと変わらない様に振舞っている不知火だが……彼の左腕が無くなっているのだから。肘から先が千切られた様に存在せず、そこから血を流しながらも平然としている姿を見れば誰だって悲鳴をあげるだろう。それを間近で見取り乱さなかっただけ、その女生徒は凄かったと言える。

「やっぱり反応されましたか」

「ああ、完全には避けられなかったけどな」

超高速でブレる景色の中で刀華が見た光景は間違っていないなかった。不知火は「建御雷神」の速度に反応し、回避する余裕は無いと判断して左腕を犠牲にする事で心臓に叩き込まれるはずの一撃を防いだのだ。その結果として左腕を無くしてしまったが負けるよりはマシだと納得しながら不知火はリングの上に戻る。

そしてその頃には左腕から流れる血は止まっていた。左腕を無くした事で流れ出す血が自然に止まるはずが無い。流石の不知火でもそのまま血を流し続ければ危ないと判断して、筋肉で血管を締めて止血したのだ。これで出血の心配をしなくて済む。

続きを始めようと思えば構えようとした不知火だが、観客席から刀華に向けて放たれる殺意を感じ取ってそれに反応する。

「あああああああー！！！！」

殺意の正体は観客席で試合を見学していたはずのナナだった。試合のことを理解していないのか、不知火のことを傷つけた刀華を敵だと判断したのか、空間が軋む様な殺意を撒き散らしながら刀華に飛びかかろうとしていた。

まさかの闖入者に驚きながらも、刀華はナナの突貫に備える。幸いにして構えは取っている。このまま自分の間合いに入った瞬間に斬り捨て様と待ち構え、

「ーナナ、ストップだ」

それは「鬼灯」の峰でナナをはたき落した不知火によって防がれた。

「うう……あー!!あー!!」

「心配してくれるのは嬉しいんだけど、これはそういうもんだから手出しはダメだ。火乃香と一緒に菓子でも食べて待つてなさい」

「あー……うう……」

「ハイハイ、帰ったら言うこと聞くから」

納得しきれていないものの、ここにいてはいけないと理解したのかナナは観客席に戻っていった。

「今の彼女は？」

「俺が面倒見てる訳ありの奴だね、俺がやられてると思って飛び出したらしい。ハハッ、可愛い奴め」

「まるで獣の様な殺意を叩きつけられたんですけど……」

身体は真つ先に反撃の備えをしていたが、精神はそれについて行けていなかった。ナナから放たれた殺意は人間の様な理性を感じさせるものではなく、獣を思わせる様な荒々しい殺意だった。もしも不知火が止めていなければ、過程はどうであれ自分はリングの上で肉片になっていた。そう確信させる程の、暴力的な殺意だった。

「んで、どうする？今なら反則で俺に勝てるぞ？」

「馬鹿言わないでください。そんなので貴方に勝ったとしても意味が無い」

ナナの乱入はルールに則れば不知火の反則負けになる。しかしそれを指摘するはずの審判はすでに役割を放棄してリングの上に存在せず、勝敗を決めるのは不知火と刀華だけ。刀華が不知火の反則を指摘すれば不知火はしょうがないと負けを認めるつもりだったが、他ならぬ刀華がその権利を放棄した。

彼女が求めているのは自分の力で不知火に勝つこと。反則負けという、つまらない決着は望んでいない。

「————!!」

ある種の傲慢とも言える勝利への渴望を嗅ぎ取った不知火は思わず身震いしてしま  
う。残念だ、口惜しい。自分が片思いしていなければ口説きたくなる様な良い女だった  
から。

「それじゃあ、仕切り直しといきましょうか」  
「そうだな」

刀華の構えは変わらず、しかし不知火は構えを変えた。刃を上に向けて腰を落として  
半身になる。開始の時の構えが適当に思える程になる構えだった。

さつきまでの不知火は口では言っていたものの、心が乗り気になれていなかった。い  
くら強くなったとはいえ、過去に踏破した相手に対してそう思うのは仕方ない事。

しかし、不知火は刀華のことを素晴らしい女だと認識した。なら、本気を出せないに  
してもそれに相応しい力で相手をしなければ無礼だと考えたのだ。

要するに、刀華は不知火のやる気に火をつけたのだ。

「新城流免許皆伝、新城不知火――推して参る」

## 選抜戦・10

名乗りをあげた不知火の身体が僅かに動いた瞬間、刀華の身体に紫電が走りその場から残像を残しながら全力で飛び退いた。

「新城流「花鳥」  
貫き通す」

そしてその一瞬後に残っていた残像が離れていた不知火の刺突により弾け飛んだ。被害はそれだけに収まらずにリングさえも剣圧の余波で削り取り、そのまま射線にあつた観客席に向かうーと、思われたが、観客席の保護の為に張られていた障壁にヒビを入れるだけで済む。

不知火がセーブをしているからこの程度で済んだのであつて、もし彼が抑えずに本気で放っていたら障壁を易々と貫通して観客席を削り取り、多くの命を奪っていた。その事に気がついた生徒たちは恐怖を感じたり、我先にと訓練場から逃げ出し始める。



「なんか技が変わってませんか!? そんな技でしたっけ!」

実を言うと刀華は不知火の事を知っていた。破軍学園に来るよりも前、南郷寅次郎に師事していた頃に寅次郎の知人だと言う大人に連れられて気だるそうにしていた不知火の姿を見たことがあるのだ。その時の事が妙に記憶に残っていたので刀華は不知火の事を一方的にだか知っていたのだ。

その時にその大人と寅次郎が試合をするのを見ていて、不知火がしたあの構えから放たれる技の事を知っていたのだ。しかし刀華の記憶にある「花鳥」は言うなれば精密射撃。僅かな隙間をピンポイントで貫く様な技であり、間違っても今さっきの様な砲撃の様な技では無かったのだ。

相手の身体に流れる微細な伝達信号を読み取る伐刀絶技ノウッブルアーツ、閃理眼リバースサイトで不知火の行動を先読みし、自身の筋肉に電気を流す事によりその性能を限界まで引き上げる伐刀絶技ノウッブルアーツ「疾風迅雷」により何とか回避する事は出来たが、記憶とあまりにも懸け離れている技に思わず声を荒げてしまう。

「どうして『花鳥』の事を知っていたかは分からんが言つただろ？免許皆伝だと。免許皆伝つて事はつまり、師匠よりも強くなつたつて事なんだよ。それにこれは俺の新城流の剣技だ。俺の使いやすい様にして何が悪い？」

剣術とは、遙か古より伝えられている先人が磨き上げた技術である。成る程、その研鑽認めよう。素晴らしいと拍手喝采しよう。

しかし、だからと言つて何故そのまま修めなければならぬ？

例えば先代が柔の剣の使い手で、その後継者は剛の剣の使い手だったとしよう。後継者が全ての才能を投げ捨てれば、先代が伝えた剣を修める事が出来るかもしれない。――それは、何と無駄なことか。

天より、そして産んでくれた親より与えられた才能を投げ捨ててまでその剣を修める価値はあるのか？そうしてまでしてその剣を修めたとして、剛の剣を極めるよりも強くなれるのか？それならば自分の使いやすい様にアレンジするべきだ。

先人が磨き上げて残した全てを理解して納得しつつ、己の才能に合わせた形へと進化させる。そうした方が良いに決まっている。実際に不知火はそうやって新城流を己にあつた剣へとアレンジした。その事を知った新城空は頭を抱えて崩れ落ちたが、自分の伝えたかつた事を全て押さえてその剣を作り上げている上に自分よりも強くなっているからと最終的には苦笑いしながら不知火に免許皆伝を言い渡した。

「なんて出鱈目な……!!」

「言ってくれるなよ、自覚はしている」

そう言って苦笑しながらも「花鳥」を放つ手は止まらない。刺突という攻撃は剣を引き、前に突き出す二つの動作で完結している。不知火が「鬼灯」を引き、そして前に突き出せば砲撃の様な飛ぶ刺突「花鳥」が放たれるのだ。

「花鳥」の威力もさることながら、一番恐ろしいのはこの技が純粋な剣術だということだろう。刀華の記憶に残っている「花鳥」も飛ぶ刺突で、魔力に頼らずに剣術のみで放たれていた。飛ぶ斬撃といえば絵空事の様なものに思えるのだが、「ブレイザー伐刀者」であれ

ば擬似的な再現は出来る。ステラは能力で炎を纏った斬撃を放てるし、刀華もその気になれば雷撃の斬撃を飛ばす事が出来る。

しかし、不知火の新城流はそんな絵空事を実現させていた。元より新城流とは能力に頼らない“伐刀者”の剣術である。どれだけの技量と膂力があれば出来るのかは分からないが、理論上は“伐刀者”でない人間でも使えるという馬鹿げたものだ。刀華が出鱈目だと罵倒し、不知火がそれを認めて苦笑しても仕方がないだろう。

余波だけでもリングを削るような暴力的な刺突を“疾風迅雷”で強化された肉体で躲しながら刀華はチャンスを伺う。瞬発力に限っていえば“疾風迅雷”よりも“建御雷神”の方が圧倒的に速いのだが、“建御雷神”は直線的な動きしか出来ないという弱点がある。仮に無理矢理方向転換しようとしたら“建御雷神”の超加速によって生じるGにより、最悪刀華の身体は五体バラバラになってしまおう。故に直線的な動きしか出来ない“建御雷神”では無く、速さで劣っても自由の効く“疾風迅雷”で逃げていた。

刀華の中での不知火の評価は規格外だった。“プレイヤー伐刀者”としてのランクは当てにな

らず、唯一強さの指針となるのは彼女の記憶の中にある不知火と刀華の師匠である寅次郎とが立ち会っている光景、そして寅次郎が見抜いて刀華に伝えた不知火の強さだった。

寅次郎は不知火の強さは適応能力の高さと行動の先読みにあると言っていた。適応能力の高さにより大体の攻撃は一度見ただけで対処できる様になり、行動の先読みは的確過ぎて未来予知じみている。その二つが組み合わさることにより初見の攻撃だろうとどんな攻撃が来るかを予想して対処出来ると。事実、その二つによって刀華が初撃必殺のつもりで放った「建御雷神」の一撃は左腕だけで防がれてしまった。また「建御雷神」を使えば、次はカウンターをしてきてもおかしくない。

それでも、不知火に有効打を与えられる物が「建御雷神」、もしくは自身の二つ名にもなっている伐刀絶技ノックアウト「雷切」のどちらかしかない。しかし「建御雷神」は恐らく見切られていて、「雷切」ですら初見で反応されるだろう。無策で飛び込めば、その先に待ち受けているのは無様な敗北。

だとしても、飛び込まなければ勝利を掴めない。

「花鳥」の刺突が僅かに緩んだ一瞬の間に気合を入れ直し、「鳴神」を振るい三日月状の雷を飛ばす伐刀絶技ノウブルアーツ「雷鳴」を放つ。初見の技であるがこの様な中距離用の技もあるだろうと考えていたので特に驚きもせず不知火は「雷鳴」を「花鳥」で消しとばす。それはつまり、不知火の注意が一瞬でも刀華から「雷鳴」に移ったという事。その隙を逃さずに刀華は「鳴神」を鞘に納めながら「建御雷神」で不知火の懐に飛び込んだ。

新城流「風月」  
「露と消えろ」

しかし、不知火は刀華が予想していた通りに刀華の「建御雷神」に完璧に反応してみせた。一か八かの勝負に敗れた代償として音もなく、残像すら残さぬ一閃にて刀華の首は宙を舞う。あまりにも速過ぎたからなのか切り口からは一滴たりとも血が溢れていない。

観客席から悲鳴があがる。それはそうだ。いくら実像形態で試合が行われるからと言っても彼らはまだ学生で殺し殺されの世界に足を踏み込んでいるわけでは無い。そ

ういう事態にはならないだろうと楽観視していた。

不知火から言わせれば温いのだが、この結果で試合の危険性を学んでくれるだろうと希望を持ちながら首と胴体が泣き別れている刀華に失望した目を向ける。あれ程までに自分を焚き付けてくれた人間が、こんなにあつさりと死んでしまったからだ。

斬首された事により宙を舞う刀華の頭――その口は、弧を描いていた。

「『雷切』」

## 選抜戦・11

「『雷切』」

不知火の『風月』により頭部と泣き別れた刀華の胴体は本来であるのならそのまま崩れ落ちるだけだった。しかしどういうカラクリなのか、命令するはずの脳と繋がっていないというのに刀華の胴体は彼女の代名詞でもある伐刀絶技『ノウブルアーツ雷切』を放つ。

視界を焼き尽くす様な閃光と耳朶を砕く様な轟音と共に放たれた一閃は音速を超えた雷速。斬首によりこれで終わったと油断した不知火にこれを躲せる余裕は無い。全身を強引に動かす事によりその場から一步離れ、致命傷になるはずだった一閃を辛うじて重傷に抑える事に成功した。

『マジかよ……とーかちゃんよ、その発想は些かクレイジーだぜ』

『ちよ!? 西京先生!! 何が一体どうなってるんですか!? 東堂先輩死んだんじゃないんですか!?!』



『見てその通りだよ。まだ死んでないしまだ終わっていない』

寧音の言葉を肯定する様に宙を舞っていた刀華の頭部が雷となって崩れ、本来の位置に集まって再び頭部の形となる。斬首という一撃必殺を受けながら、まだ終わっていない。

「ふう……頭は初めてやってみましたけど案外出来るものなんですね」

「案ずるより産むが易しってな。それにしても……呵々ツ!!まさかそれが出来るとは思わなかったぞ!!」

「折角新城君と戦うために編み出した『雷王変成』らいおうへんせいですからね、使わなければ意味が無いてやつですよ。それでも、流石に頭を雷に変えたのは初めてでしたけどね」

刀華のやった事は以前に不知火がヴォルドと戦った時に行った自身の肉体を魔力に変換する自殺行為と全く同じだ。魔力操作に問題があるのか全身をととは出来なかったが、身体の一部くらいならばそうする事が出来るし、腕や足を欠損してもその応用で魔力で肉体を再構築してその欠損を補う事が出来る様になった。

「建御雷神」で突貫しても反応され、カウンターを見舞う事は分かっていた。だからわざとそのカウンターを受けて「雷王変成」で肉体を再構築し、勝つたと油断している。不知火を「雷切」で倒すつもりだったのだ。

しかし、その目論見は果たせなかった。不知火は胴体に深々と「雷切」で着けられた傷口から夥しい鮮血を垂れ流しているがそれはこの戦いにおいて何の意味もなさない。と断言出来る。

何故なら、不知火は新城でありながら漣だから。勝てないという前提条件が存在していない戦いに立てば、漣が得る結果は勝利以外に有り得ない。腕が無くなつていようが、致命傷一步手前の重傷を負つていようが、戦うのならば最後には勝つ。それを刀華は本能的に察していた。

「でも、新城君も出来ますよ、ね？」

「『肉体変換：炎』、『再構築』  
当　然」

刀華の確信を持った問いかけに対して不知火は即答しながら実演してみせる。胴体

に刻み込まれた傷口が燃えて、消えた時には傷一つ残っていない。左腕の傷口から炎が噴き出して、手の形を作ったらそのまま肉になり元通りの左腕が出来上がった。

「本当に出鱈目ですね」

「自覚しているのだから勘弁してほしいね」

まえにも吐いた軽口を言い放つものの刀華の心中は荒れていた。不知火が自分と同じ様に身体を魔力に変えることで殺害による勝利は無くなったからだ。魔力が無くなるまで攻撃するという手段はあるが、不知火がそれが出来るまで一方的に攻撃されるとは思えないので現実的では無い。

どうすれば勝てるのか、勝利への道を模索している刀華の「閃理眼」リバーサイトが不知火の生体信号を読み取り、「花鳥」を放とうとしていることを察した。「疾風迅雷」で肉体の性能を引き上げること、「花鳥」を回避しようとする。不知火の「花鳥」は刀華が知るものとは異なるまるで砲撃の様な刺突であるが、「閃理眼」リバーサイトの先読みを用いれば避ける事は出来る。

そして避ける為の一步目を踏み込もうとした足が削られる様に消し飛ばされた。

「……ッ!？」

避けようとしたのに間に合わなかった様に足が無くなった事に動揺しながら「雷王変成」で消し飛ばされた足を再構築する。「疾風迅雷」で肉体の性能を限界まで引き上げ、「閃理眼」による先読みも間違っていないかった。それなのに足が奪われた。

「リバースサイト閃理眼」で生体信号を読み取る事で確かに不知火の動きを読み取る事には成功した。しかし、いくら行動の先読みが出来るからと言って、刀華が行動するよりも早くに不知火が動けば意味が無い。確かに刀華の反応速度は「疾風迅雷」により人間の限界に近いレベルにまで引き上げられている。だから「リバースサイト閃理眼」による先読みをした後でも反応する事が出来ていた。

しかし、もしも「疾風迅雷」を使用している刀華と同じレベル、もしくはそれ以上の肉体性能を持つ人間と対峙した場合はどうだろうか？

“リバーサイト閃理眼”で動きを先読みしても、反応するよりも先に行動されては意味が無い。不知火がした事はそれだけなのだ。

“リバーサイト閃理眼”と“疾風迅雷”が、無力化された。

ならばと苦し紛れに放たれるのは“雷鷗”。三日月を模した雷の斬撃が不知火に迫り、迎撃で放たれた“花鳥”により、拮抗も許されずに無残に打ち砕かれる。“雷鷗”を打ち破った“花鳥”はその勢いを欠片も衰えさせずに刀華の左腕を食い破る。

“雷鷗”が、無力化された。

“雷王変成”で無くなった左腕を再生させながら、刀華は齒を食い縛って不知火のクロスレンジへと飛び込んだ。“建御雷神”の様な超加速では無くて滑り込む様な移動はただの踏み込みでは無い。“闘神”南郷寅次郎が考案した古武術の呼吸法と歩法の合わせ技である“抜き足”。人間の脳が意図的に認識を放棄する事で脳の処理を軽くする働きを利用してその認識が放棄されている無意識の領域に自分の存在を滑り込ませる術は、成功すれば相手は使用者の存在が見えていないのに認識出来なくなる。

今の不知火は刀華の存在を見えているが認識出来ていないはずーだというのに、不知火の眼球は惑わされる事なく刀華だけに焦点を当てていた。無意識の領域にいるはずの刀華の姿を、見逃していなかった。

無意識の領域に自身の存在を滑り込ませる“抜き足”であるが、無意識の領域を意図的に出来ればそれはただの踏み込みになる。いうのは簡単だが、それは命のやり取りをしている相手から意図的に意識を外す事と同じだ。しかし、それは不知火だけではなくて自分の身体や意識を自在にコントロール出来る人間ならば誰でも出来る事だ。破軍に在学している学生で言えば、一輝やステラ辺りならば容易く出来る事でしか無い。

それにそもそもだ、不知火は寧音と何度か手合わせをしており、その中で彼女は不知火に対して“抜き足”を使用している。不知火の事を深く理解している寧音は“抜き足”を使用する都度に若干の改良を加え、同じに見えるが僅かに違う“抜き足”として使用していた。刀華よりも長く寅次郎に師事していて、それ相応に“抜き足”の練度が高くなっている寧音の“抜き足”を何度も見ている不知火からしてみれば、刀華の“抜き足”は拙い技でしかなく見破れない道理は無い。

“抜き足”が、無力化された。

“閃理眼”<sup>リバーサイト</sup>、 “疾風迅雷”、 “雷鷗”、 “抜き足”と刀華の技が次々に否定されていくが、不知火は決して遊んでいないつもりは無い。自分が刀華よりも強い事を自覚して、油断も慢心もしているが彼女の事を辱めているつもりは無いのだ。

不知火が刀華に望んでいる事は壁を越える事。現在でもプロ程度になれば通用する程に刀華は強いが、裏の事情を知っている不知火からすればまだまだヨチヨチ歩きの赤子にしか見えないのだ。

だから、彼は自分自身が刀華の越えるべき壁になる事を決意した。

足掻け足掻け、俺を越えようと奮起しろよ。進化しろ覚醒しろ。1秒後には今の自分よりも強くなれ。俺はそれを望んでいる。

不知火は前の一輝と静矢の試合で彼らが行なっていた覚醒を意図的に引き起こそう

としていた。それは2人がやったのが天然と言うのなら、不知火が狙っているのは養殖もの。意図的、無意識という違いはあれど、貫けるのならばそれは正しい事だ。

不知火から放たれる劍戟を瀬戸際で受け、躲しながら刀華は彼の狙いに気が付いていた。そして――その狙い通りに刀華は覚醒をしているのだ。だというのに彼我の戦力差は縮まるどころか更なる広がりを見せていく。瀬戸際で受けられていたはずの劍戟を受けきれず、紙一重で躲せていたはずの劍戟が肢体を斬り刻む。

その仕掛けは――要するに、不知火がはしやぎ過ぎているだけだ。

元々、2人の間には言葉に出来ないほどの開きがある。不知火はそれを理解していたので本気にならないという制約の上に自身の力をセーブする事により、その力の差を極力埋めていたのだ。それが試合の始めて刀華が不知火と互角に戦えているように見えただけだ。

しかし、刀華は去年と比べて自分の想像を越える程に強くなってしまった。それは不知火からしてみれば望みに望んで焦がれたもの。そんなものを見せつけられれば気分



が高揚するに決まっている。その結果、刀華の覚醒に呼応するような形で不知火が己に課していた枷が外れていくという悪循環が発生してしまったのだ。

つまり、始めから刀華には勝機など存在していないのだ。

「それでも、そうだとしても……私は……ッ!!」

聡明な刀華はその事を理解している。その上で諦めていない。

自分の事を応援してくれる仲間たちがいる。

自分の勝利を信じている孤児院の子どもたちがいる。

自分の才能を開花させて育ててくれた師匠がいる。

そんな彼らの気持ちに応えるために、勝つのだと叫びながら刀華は再び覚醒を果たす——この一振りが、最後の一振りになっても良い覚悟を決めながら。

それは刀華が必殺と決めていた「建御雷神」と「雷切」の複合技。超加速の中で剣

を振るう事が出来なかつたので、「建御雷神」は単なる刺突として使うしか無かつたのだが、ここにきて彼女はその欠点を克服した。

「建御雷神」の超高速の中で放つ「雷切」。全力を超えた全霊で放たれた最後の「雷切」は光速に迫る。見てからの行動など不可能、そもそも視認することすら出来ない一閃を不知火の両眼はしかと捉えた。

不知火ならばこの「雷切」を防ぐ事も躲す事も出来る。しかし、彼はそのどちらも選ばずに敢えて迎撃するという選択肢を選んだ。

それは不知火の矜持——全霊の一撃には逃げないというただの我儘。

「滾れ———「鬼灯」」

未来予知してみた先読みにより、刀華が全霊の一撃を放つことは分かっていたので、ここにきて初めて「鬼灯」を起こす。刀身から炎が溢れ出し、激しく燃焼する。それはステラの「天壤焼き焦がす竜王の焰」に似ていたが、熱量はステラのそれと比べ物になら

ない程に高い。

そして放たれた全霊の「雷切」。それに対して不知火はこの試合で初めて「鬼灯」の塚を両手で握り——

「新城流秘奥「破國」万象兩断」

——全力の振り下ろしで刀華を「固有デバイス靈装」ごと両断した。

## 癒しの日

正面、そして下方の左右から迫る木刀を両手に持った木刀で防ぎ、右足で踏みつけることで無力化する。正面から来た木刀は受けに回った木刀の表面を滑りながら俺に迫り、下方から迫って来り踏みつけられた木刀は使えないと投げ捨てられ、下から上に向かって突き上げられた。

「まあ、悪く無いとだけ言っておこうか」

滑りながら迫る木刀は強引な打ち上げにより弾き飛ばし、突き上げられた木刀は片手の木刀を放して切っ先を掴んで奪い取る。これにより相手2人の手からは武器が無くなった。再び両手で持った木刀の切っ先を相手の喉元に突きつければ、ここから逆転しようと思案するものの手がないと悟って素直に2人とも両手を挙げて降参の意を示した。

「あーもう!!なんであそこであんなことが出来るのかなあ!?普通だったらあれは反応しきれないで斬られる場面なの!!」

「同感です。せつかく下を意識させる為に下から攻めて、不意を突こうと上に攻撃したのにあつさり防ぎやがってです」

「悪くは無かつたつて言ってるだろ?並みの相手ならあれで決まるかもしれない。ただ俺みたいに普通じゃない奴を相手するのには悪くないだけじゃ駄目なんだよ。最善手を出し続ける、もしくは相手の思考を乱す為にわざと悪手を出すとか……まあ、こちら辺は血反吐を撒き散らすくらいに頑張れば自然と身につくさ」

「さりと血反吐を撒き散らすという言葉が出て来たことに不安が隠しきれないんだけど」

「ししよーはこういう人間だから諦めやがれです」

休憩も兼ねた反省会に移行すると、疲れたのか綾辻と火乃香は芝生の上に大の字になって寝転がった。一見してみれば無防備に寝ているように見えるのだが周囲への警戒は怠っていない。

試しに2人に向かって木刀を投げれば、即座に飛び上がって躲してみせた。

「うん、火乃香は兎も角綾辻もちゃんと警戒出来てるようで感心感心」

「不意打ちする時は一言声かけてくれない？」

「それじゃあ不意打ちにならないだろうが」

「私はもう慣れたです」

綾辻はまだ俺が破軍に復帰してからののだが、火乃香はそれよりも前から漣としてのあれこれを教えているのでこの程度の事ならば反射による自動的な行動では無くして反応による能動的な行動で避けることが出来る。反射で動く事が悪い事だとは言わないが、そればかりに甘えてしまえば反応での動きが鈍くなってしまふ。だから出来る限り反応して動けと言いつつ含めている。

漣として育てられている火乃香は反応し、綾辻の方も剣術による下地があるからなのか反応して身体が動いていた。こればかりは積み重ねでしか出来ない事なので綾辻本人と綾辻の親父さんには感謝したい。

「あ、不知火」

「ん？おお、一輝じゃないか」

声を掛けられたので振り返ればそこには一輝とヴァーミリオン、珠雫と有栖院がいた。

暁学園では裏切り者として知られていて、さらに「解放軍<sup>リベリオン</sup>」の暗殺者として俺に警戒されている有栖院だが、こいつの目的は「七星剣武祭」に出場しそうな選手に取り入る事なので現時点ではあくまで普通の学生を装っている……いや、「眼」で観察した限りでは装い過ぎていると言っても良かった。珠雫から一輝への恋愛相談をされて適当に対応すれば良いのに酷く親身になって応じているように見えた。これがわざとやっているのであれば暗殺者として超一流の天才なのだが、俺の目には演技しているように見えなかったのだ。

恐らく有栖院も気がつかない内にこいつは珠雫に絆されているのかもしれない。そうであるのなら歓迎すべき事態だ。当初に考えていた予想通りに物事が進むのであれば、有栖院は暁学園が事を起こす時には一輝たちの親友的なポジションに立っている事になる。それは珠雫にとっても同様で、もしかしたらそれよりも深い間柄になっている

るのかもしれない。そんな状況で有栖院が完全に裏切れば、珠雲が悲しむ事になる。

初めて俺が美しいと感じた人なのだから、出来れば傷付く事は少ない方が良くに決まっている。

「こんなところで何してるのよ?」

「鍛錬に付き合ってくれて頼まれたからそれに付き合ってるだけだ。東堂と戦ってから暇で暇で」

「あの試合を観て、誰もが不知火さんの危険性に気が付いたんですよ。やりましたね」  
「流石にあの試合を観た後だとお相手するのは御免被りたいわね」

“雷切”——東堂刀華との試合の結果は俺の勝利で終わった。確かに東堂は強かったのだが、それは所詮は学生やアマチュアレベルを超えた程度でしかない。生粋のプロや殺し合いを日常茶飯事としているようなイカれた奴らと比較すれば一歩どころか十歩は足りない。それでもあのまま長い時間をかければ俺たちの域にまで至るだろう。あとは俺や一輝のように狂気と呼べるレベルの一念を抱けば在学中に至れる可能性はある。



しかし、そんな狂気は彼女は持たない。

何故なら、彼女の強さの根源は優しさだから。

俺たちのように堕ちなくても良い修羅道に堕ちる必要は無いのだ。

まあ、俺の勝利で終わった東堂との試合だが……一言で言えばやり過ぎてしまったのだ。

学園序列第1位である東堂は名実共に学園最強の剣士だった。それを最終的には無傷で、二つ名にもなった伐刀絶技ノウブアルアーツ「雷切」を正面から、さらに防御目的で教師たちが張っていた障壁ごと斬り伏せてしまった。そのせいで今日は第七試合だと言うのに初戦以外は全て相手の棄権による不戦勝になってしまっている。

勝てないと悟って自ら負けを認めるのは賢い選択肢なので咎めるような事はしない。しかし、勝てない相手に挑む事は経験になるのだ。これがひと昔前ならば死を覚悟しなければ出来ないような事だったが、今の時代では再生槽カプセルなんて便利な物があるお陰で大抵の傷は容易く治せる。現に東堂も、一輝と戦った静矢も再生槽カプセルのお陰で翌日には立ち

上げられる程に回復して元気に選抜戦に参加している。

その気になれば再生槽カプセルでも回復出来ないような怪我を負わせる事は出来るが、流石に学生相手にそこまではしない。

「ふーん……でも、アタシがシラヌイと当たつたら棄権なんてしないから覚悟しておきなさいよ」

「ならその時が来るのを楽しみにさせてもらうさ……おい、そろそろ立てるか?」  
「あゝ後5秒……良し!!」

宣言通りに5秒だけ休んだ綾辻は大の字から起き上がって木刀を構える。火乃香はすでに立ち上がっていて木刀を持って戦闘態勢に入っている。いつもならばこのまま模擬戦が始まるところなのだが、

「やる気満々のところ悪いが今日はここまでだからな」

「ええ……」

「人のやる気を返しやがれです」

「文句言われてもだな、今は選抜戦の最中で綾辻の試合が控えてるんだ。オーバーワークはさせれない。それに一輝なんていう観察眼がおかしい奴が居るんだ。こいつの目の前で模擬戦なんてやってみるよ、全部吸収されてガンメタ張られるぞ」

「……出来ないと言えないのが悲しいわね」

「流石お兄様です!!」

「アツハツハ」

一輝の目は全てを見通すと言っても過言では無い。まだそんなに名の知られていない今ならば一輝は気に掛けていないかもしれないが、今日俺が鍛錬に付き合っていると分かった事で警戒するだろう。警戒して一輝が試合を観れば、一輝は綾辻がまだ至っていない。『綾辻一刀流』の奥義にまで辿り着くのは目に見えている。

無駄な努力かもしれないが、出来る事ならば一輝に知られないようにしておきたかった。

「あ、そうだ。綾辻、今度の休みは空いてるか?」

「今度の休み?特に予定は無かったけど……何かするの?いつも通りに一日中模擬戦

じゃないの?」

「いやな、俺の知り合いからプールの招待券を貰ったんで休憩を兼ねて行こうと思っ  
たな?」

知り合いと言うのは月影さんの事だ。あの人の立場の都合で様々な贈り物が送られるのだが、これまた立場の都合でそのほとんどが無駄に終わってしまうと言う悲しい悪循環が起きてしまっている。なので月影さんが消費しきれないものが俺に回って来るのだ。今までこうした物は火乃香と一緒に行くか換金していたのだが、綾辻の休憩にちようど良かったので誘う事にしたのだ。

「嫌ならそれで良いけど……どうする?」

「プール……行く!!行くよ!!」

「力のこもった返事をありがとう。それじゃ、俺はナナを迎えに行くからここで解散ね」

綾辻に断られずに力強い返事を貰えた事に気分を良くしながら、俺は食堂に置いてきたナナを迎えに行く事にした。

そして食堂に辿り着いた時、食堂にある食料の殆どを食べ尽くしていたナナの姿を見て膝から崩れ落ちる事になる。

## 癒しの日・2

「う〜ん……」

ボク以外誰もいない部屋の中で折り畳み式のテーブルを前にして唸り声をあげる。いつもならば誰かしらいるのだが、今は新城君は理事長に呼び出され、火乃香ちゃんはナナちゃんの教育だと言って散歩に連れ出したのでボクだけなのだ。

幼女に教育される少女と、改めて説明すると物凄い言葉になってしまっただが、ナナちゃんの事情が事情なので受け入れるしかない。破軍学園に入学した当初のボクだったら頭を抱えていた案件だったが、新城君と関わるようになったお陰で精神力が否応無しに強くなったので問題無い。

「どうしたものか……!!」

しかし、誰もいないというのは好都合だった。流石にこんなことを彼らに説明するのは気が引けてしまう。ボクが唸っている原因は折り畳み式のテーパーの上を堂々と占領している紺色の布。胸に当たるところにはボクの名字である綾辻の名前が書かれている。

それはスクール水着と呼ばれる物だった。

「なんで水着をこれしか持って無いのさ!!ボクの馬鹿アツ!!」

問題なのはスクール水着そのものではなくて、スクール水着しか持っていない事。父さんが道場破りに負けてから、ボクはずっと剣にかかりつきりだった。女の子としてのあれやこれや最低限で済ませてしまい、水着なんて物は正直に言つて存在自体を忘れていた。新城君にプールに誘われて、返事をしたところまでは良かった。しかし部屋を探して見たかったのは中学生時代に使っていたスクール水着だけだったのだ。

一応胸の辺りが苦しくなっている事を除けば着れない事は無いのだが、流石に女の子としてのあれやこれやを最低限で済ませてしまっているボクでもスクール水着はダメだって事は分かる。いや、ダメでは無いのかもしれないが幾ら何でもマニアック過ぎる

だろう。新城君の趣味があればセーフかもしれないが、流石にそんなギャンブルをする訳にはいかない。

普通ならば友人を誘って新しい水着を買いに行くという選択肢が出てくるのだろうが、ボクの中でその選択肢は既に却下された後だった。何故なら……そこまで親しい友人が破軍にはいないから。別にポッチという訳ではないのだが、それでも教室で会ったら挨拶をして話す程度の間柄でしか無い。そんな関係なのに買い物に行こうと誘ったところで相手からしてみれば迷惑でしか無い。

となれば一人で買いに行くしかないのだが、ファツションセンスに自信が無い。前に一度、自分の好みで服を買ったら父さんに笑われたので、「固有<sup>デパイス</sup>霊装<sup>ス</sup>」で斬りかかった事がある。その後に門下生の皆んなに助けを求めたのだが、誰もが気まずそうに目をそらすだけだったのだ。

「助けて父さん……!!」

八方塞りでどうしようも無かったので、思わず今も意識不明で寝ている父さんに助け



を求めてしまう。気持ちを落ち着かせるためにわざと声に出しているだけで、本当に助けを求めている訳では無かったのだが、

———絢瀬……絢瀬……聞こえるか……

「父さん!?!」

本当に父さんの声が聞こえて来た。思わず立ち上がって辺りを見渡せば、半透明の父さんが窓から上半身を生やしていた。

———絢瀬……俺は今、幽体離脱をしてお前の前に現れてる……

「何をやってるのさ!?!」

———今頃、病院は大慌てだろうが娘の危機だ……笑って許せ……

後日、この時間帯に原因は分からないが父さんの心拍数が急激に下がったと叔母さんから連絡があった。

———それよりも絢瀬……俺はスクール水着も良いと思うぞ……

「父さん……!!」

とても良い笑顔でサムズアップをしながら性癖をカミングアウトして来た父さんが見れたものでは無かったので、台所から塩を持って来て父さんに投げておいた。すると父さんは聞いたこともない様な悲鳴をあげながら姿を消した。幻聴や幻覚の類でなければこれで病院に戻ったに違いない。

撒き散らした塩を片付け、ソファアに腰を下ろして顔を覆い隠す。何が悲しくて父親の性癖をカミングアウトされなければならなかったのか。亡くなった母さんが生きていた頃に、父さんと水着でそういうことをしていたと話していたっけ。あの時は冗談だろうと聞き流していたが、まさか本当だったとは……軽く死にたくなってしまう。

「もうやだあ……」

「何が嫌なんだ？」

「ひゃわあう!!」

父さんのスク水フェチにダメージを負っていたせいで周囲の警戒が緩んでいたせい

か、声を掛けられた事に驚いてソファから落ちてしまう。ぶつけた事で痛むお尻を摩りながら顔を上げれば、新城君の姿があった。

「い、いつ帰って来たの!？」

「さっきだけど……一応ノックもしたぞ？返事が無いけど鍵は開いてたからうたた寝でもしてるかと思っただが……」

そう言つて新城君はボクを、そして折り畳み式のテーブルの上に置いてあるスクール水着を見る。

「……スクール水着で来るつもりだったのか？それともスクール水着しか無かったのか？」

「後者です……」

ボクとスクール水着を見ただけで大体の状況を把握してくれたらしい。こういう時に彼の察しの良さは本当に助かる。バレたく無かった事であるが、それでも一から説明するよりもまだマシだ。主にボクの羞恥心的な意味合いで。

「誰かと買いに行くって選択肢は？」

「買い物行ける程に親しい人が居なくて……」

「そうか……だったら……うん、俺の知人で暇そうにしてる奴がいるからそいつと行くか？ 確か、明後日が試合で授業免除だったよな？」

「そうだけど……良いの？ 相手の人に迷惑じゃない？」

「大丈夫大丈夫、日頃から暇だ暇だと騒いでる奴だから二つ返事で了承してくれるさ」

破軍でそんな人がいるのか不安に思ったが、良く良く考えてみれば破軍の人間とは限らない。新城君のいう相手はそういう人間なのだろう、彼はその相手に向けて連絡するのか携帯を構い始めた。

「ところで火乃香とナナは？」

「火乃香ちゃんがナナちゃんを教育するって散歩に連れて行ったよ」

「火乃香がナナを教育か、言葉にすると凄いな……ああ、悪いけど明日と明後日は用事が出来て学園に居ないから2人の事頼んでも良いか？」

「良いけど、それって理事長に呼び出された事と関係あるの？」

「まあ、そんなところだ。ちよつと火乃香とナナ迎えに行つて来るけど……」  
「な、何？」

ボクからスクール水着に、そしてボクに視線を戻した新城君は笑顔と共にサムズアップをしながら、

「スク水姿の綾辻も、悪くないと思うぞ？」

「~~~~ツ!!馬鹿アツ!!」

思わず近くにあつたテレビのリモコンを投げてしまった。

「えっと、ここに集合だつて新城君は言つてたけど……」

2日後、午前に行われた選抜戦に勝利したボクは新城君が告げた一緒に買い物をしてくれるという人物との待ち合わせのためにシヨツピングモールに来ていた。少し前にここで「解放軍<sup>リベリオン</sup>」によるテロが行われた筈なのだが、既にその被害は修復されていて営業を再開している。

その商売根性に半ば感心しながらどんな相手が来るのか考えていると――

「貴女が、綾辻ちゃんね?」

「ツ!?!」

――背後から声を掛けられた事で弾けるように振り返る。周りの人たちが何事かと一瞬だけ視線を向けるが、すぐに興味を無くしたように歩き去って行く。

人混みの中という事もあり、ボクは周囲を警戒していた。臆病かもしれないが、その

位が丁度いいと新城君に言われていたので自分の部屋以外はそうするようにしていたのだ。

それなのに、この人はボクに気づかれる事なく背後に立っていたのだ。

声を掛けて来たのはタンクトップにジャケットを羽織り、ホットパンツという非常にラフな格好をした少女だった。身体付きは細身なのだが、それは鍛えられているから細くなっているのだと分かる。

そして今頃になつてようやく気が付いたのだが、彼女の顔付きはどこか新城君に似ていた。

「うん、反応は悪くは無いわね。不知火に鍛えてもらつてるだけの事はあるか」  
「……もしかして、新城君が言つてた人かな？」

「そうよ。驚かせてしまつて御免なさいね？あの子がそんなことをする人がどんな人なのか気になつて、少しだけイタズラしたくなつたのよ」

謝りながらも笑う彼女は、やはり新城君がイタズラをした時のように楽しげに笑っていた。

「ああ、そういえば自己紹介していなかったわね？ 私は月影灯火。つきかげあかり。気軽に灯火って呼んでくれたら嬉しいわ」



## 癒しの日・3

「無理無理無理無理ツ!!無理だつてば!!」

「大丈夫よ。恥ずかしいのは最初だけですぐに気持ち良くなれるから」

「その快樂は受け入れたらいけない類の物だと思ふんだ……!!」

壁に囲まれた密室で、新城君の知人である灯火さんに迫られる。近寄つて来る彼女から逃げようと後退りするのだが、すぐに壁にぶつかつてしまい、いやでも逃げ場なんてない事を思い知らされる。力技で逃げる事も考えたのだが、彼女の実力がボクよりも上だと本能で理解させられているので考えるだけで実行しようとは微塵も思えない。

これ以上退がる事が出来ないと分かると灯火さんは一気に躡り寄り、ボクの顔の横に手を突き出す——壁ドンの姿勢になつて完全に逃げ道を塞いでしまった。互いの吐息がかかる程に近づいているので新城君にどこか似ている灯火さんの顔がよく見える。もしもこれを新城君にやられたらと考えてしまい、恥ずかしくなつたので顔を背けよう

としたのだが片手で顎を持ち上げられる事で防がれてしまう。

「ふふっ、硬いわね。緊張しているのかしら？」

「本当に許してよ!!無理だからあ!!」

「ダメ。私がそうするって決めたのだからそうするのよ異論反論は一切認めないわ……!!」

「ヒエツ!!」

そう言い切った灯火さんの眼は人間の物ではなく、完全に獲物を見つけた捕食者の眼になっていた。それも食べられる物を見つけたというものではなくて、獲物を半殺しにして確実に食べられる状況にある時の眼だ。勿論、その獲物はボク。

「さあ、服を脱いで……」

手が伸ばされたので払いのけようとするが、そのどれもが灯火さんの手に当たる直前に躲されて妨害にすらならない。地味に凄い技術を見せられているのだが、それに感心出来るような余裕は今のボクには無かった。

もう駄目だと思えながらも、ボクは最後まで抗う覚悟を決めていた。

「あのマイクロピキニ、絶対に似合うんだから……!!」

「絶対に着るもんか……!!」

灯火さんが着ると迫って来る、あのマイクロピキニを着ない為にも!!

「ううう……!!」

「いや、良い画像が撮れたわ!! やつぱり女の子が恥ずかしがる姿って加虐心が擦られて堪らないわね!!」

「鬼!! 悪魔!! 灯火!!」

買い物を終えたボクは灯火さんがお茶をしたという理由でショッピングモールの中にあるフードコートに来ていた。ここのお金は自分が払うと、テーブルの上にはいくつかのデザートが並べられているが、今のボクにそれを食べたいという欲求は無く、ただただ恥ずかしさだけが占めていた。

察していると思うけど、灯火さんに負けて彼女が選んだマイクロビキニを着せられて

しまったのだ。それだけでは無くてもう紐としか思え無いような物や、貝殻だけの物まで。しかも、それを着ているところを写真に撮られてしまったのだ。

勿論そんな水着なんて買うわけがなく、ちゃんとしたスポーティーなデザインのを選んだけど。

「もうお嫁にいけない……!!」

「あら？それなら不知火に嫁いだらどうかしら？」

「ちよ!?なんでそこで新城君の名前が出て来るのさ!？」

「だって貴女、不知火の事が好きなんですよ？」

新城君の事が好きだと、そう言われた瞬間に顔がさつきよりも熱くなるのが分かった。慌てて周囲を確認したが、新城君と親しそうな人の姿は見えない。彼にバラされる事はないと安心し、出来る限り声量を下げながら灯火さんに訊ねる。

「ど、どうして分かったの？」

「これよ」

灯火さんが携帯の画面を差し出したので受け取ると、それはボクがマイクロピキニを着ながら崩れ落ちている写真だった。

「あ、御免なさい。間違えたわ」

「消してよ本当に!!それが出回ったらボク生きていけないから!!」

「大丈夫よ。ちゃんと100桁のパスワードしているから見られないわよ……うん、こっちよ」

改めて差し出された携帯の画面には、ボクが顔を顰めながら水着を選んでいる姿が写っていた。

「ただ水着が欲しいだけなら店員に聞いて、似合いそうな物を見繕って貰えば済む話。それなのに貴女は自分のセンスが無いと分かっているにも、四苦八苦しながら選んでいたわ。それって自分の力で相手に良い姿を見せて失望されたく無いって事よね? 有象無象の相手にそんなことをするのは無意味だし、多少親しい間柄にするには些か過剰過ぎる。だったら意中の相手に見せたいんじゃないかって考えたのよ」

「……灯火さんの特技ってプロファイリング？」

「これくらい的事なら他人の感情に機敏で、多少人を観る目があるのなら誰だって出来る事よ？ 不知火だってやろうとしたらこれくらいは出来るわ」

「って事は……新城君も気がついてる？」

「それは無いと思うわよ？ これって言ってしまうば人の気持ちを暴くって事と同じなのよ。だから不知火は有象無象なら兎も角、親しい間柄の相手にこういう事は絶対にしないわ。流石に不味そうな気配を漂わせていたら踏み込んで行くでしょうけどね」

「良かったあ……」

新城君にボクの気持ちが悪く分かって、思わずホツとする。灯火さんはやっているのだがこれを追求したところでガールズトークだからとはぐらかされるのが目に見えているので追求しない事にした。

「まあさつき言ったのは後付けで、本当は絢瀬ちゃんが不知火のことを話題にすると雌の顔していたから分かったのだけどね」

「待って」

とんでもないことを言った灯火さんを睨みつけるのだが、彼女は朗らかに微笑むだけで流してしまった。色々と言いたい事はあるが、彼女だからと結論付けて無理矢理納得する事にする。

要するに、灯火さんは新城君と似たタイプの人間なのだ。それさえ理解してしまえば、常日頃から新城君にしているような対応を応用すればダメージを減らす事が出来る。

「で、いつから好きになったのよ?」

「分からない……そうなんだって自覚したのは最近になってからなんだ。気がついたら新城君の事を目で追ってて、近くにいたらドキドキするけど安心して、楽しそうに笑ってたらボクも釣られて楽しくなって……」

「完全に恋する乙女ね。どこかの合法ロリみたいな肉食系じゃなくて私は安心よ」

「待って、西京先生と比べないで。あれは完全に別枠だから」

「あれは恋する乙女というよりも、飢えた女豹って感じよね。初体験が逆レとか、この私をしてドン引きだわ」



新城君の口からそう言われて信じたくなかったが、他ならぬ西京先生がそれを肯定しているのだから本当なのだろう。今の新城君と西京先生の関係は爛れた物のように見えるのだが、不思議とそれが2人には合っているように見えてしまう。

「まあ飢えた女豹の事は放っちゃいけないけど置いておいてよ、不知火には片思いしている相手がいるって知ってるわよね？」

「うん……分かってるけど……ボクは……ボクは……」

新城君は西京先生では無い相手の事を好きだというのは聞いた事がある。西京先生に襲われて半裸になりながら部屋に戻ってきたときに、そんな事を言っていたのを聞いたから。

自分の気持ちに気が付いた時には、その事を知っていた。だから諦めようとした。新城君には他に好きな人がいるから、ボクなんか彼のことを好きになっても迷惑にしかならないって。

だけど、諦められなかった。駄目だ駄目だと、そんな事を想っちゃいけないと分かっ

ているのに、新城君の事がドンドン好きになってしまっている自分がいる。

初めて会った灯火さんにこんな話をするのは間違いだと分かっている。だけど、少しでもこの心境に整理をつけたくて、初対面だと言うのにこんな話をしてしまった。

顔を俯かせてしまったので灯火さんがどんな顔でボクの事を見ているのか分からない。罵りか蔑みか、ボクの事を非難する声が掛けられるに違いない。

「あら、良いんじゃないかしら？別に好きになっても」

「……ええ？」

だと言うのに掛けられた言葉は予想していなかった肯定。驚いて顔を上げると、灯火さんは愉悅の混じっていない慈愛に満ちた笑みを浮かべていた。

「誰が誰を好きになろうと本人の勝手よ。似合う似合わない、正しい間違ってるなんて周りの奴が叫んでいるだけの戯言に過ぎないわ。どんなに爛れた関係だろうと、本人たちが幸せならそれで良いじゃない。一夫多妻って言葉もあるくらいだしね」

「で、でも、新城君には他に好きな人がいて……」

「確かにそうね。だけど、あの子は自分の事を本気で好きになつてくれた相手を絶対に無下にしないわ。あの飢えた女豹だって嫌そうな素振りをしてるけど、拒絶しようとはしていないでしょ？あの子ったらああ見えて一途だから苦労するかもしれないけど、真摯に想ってくれる相手を受け入れるくらいの甲斐性は持っているわ」

だから、と言って灯火さんはテーブルの上に身を乗り出してボクの手を握った。

「彼の事を想い続けなさい。そして、いつの日かその心を彼に伝えてあげなさい。自分はこの間にも想っているんだって叫びなさい。そうすれば、彼はきっと応えてくれるから」

握られる手から伝わる体温は体質だからか、興奮しているからか平熱よりも随分高く、熱いくらいに感じられた。だけど、その熱さは決して不快なものでは無かった。

「……そうなんだ」

好きで良いんだと、間違っていないんだと言われて、ボクは気が付けば涙を流していた。

## 癒しの日・4

「ただいまあ……」

あの後灯火さんに連れられてお酒を飲み、深夜と言える時間帯になってようやく破軍に帰ってくる事が出来た。新城君がいるかは分からないが、火乃香ちゃんとナナちゃんは間違いなくいる上に今の時間帯ならば確実に寝ているはずだから小声で、そして心配を消しながら極力静かに部屋に入る。

部屋の中は予想していた通りに真っ暗だったが夜目は効く方なので問題無い。2人が眠っているベッドの周りを遮光性の高いカーテンで囲って光が入らないようにしてから部屋の電気をつける。するとテーブルの上には炊飯器が2つ、そして火乃香ちゃんが書いたと思われるデカデカと飯の一字だけが書かれた紙が置かれていた。

確かに灯火さんに連れられる事になって慌てて連絡した時は5時ごろだったのでも

う夕食の支度をしていたかもしれない。だけど流石に炊飯器が丸々って何なんだろう。嫌がらせの類じゃないかなと考えながら蓋をあける。

するとそこには白米がみつちり詰まっていた。

「これは怒ってるのかな……？」

耳を澄ませれば御釜が悲鳴をあげているのが聞こえる。どんな炊き方をすればこの量がこのサイズの炊飯器で綺麗に炊き上がる事が出来るのだろうか。このままではこれが明日一日のご飯になるのは目に見えているので、少しでも減らそうとおかず欲しさに冷蔵庫を開けたのだが見事に空っぽになっていた。これは白米だけで食べるという揭示なのだろうか？缶詰どころか調味料も見えない辺りに静かな怒りを感じる。

仕方がないので白米のまままで食べ進める事にした。食べ切れるとは考えていないが、幸いな事に学園までは歩いて帰ったので多少お腹は減っている。

行儀が悪いかもしいれないが炊飯器からダイレクトに箸を付けて白米をいただく。時

計の針が進む音と咀嚼音、そして時折聞こえる火乃香ちゃんとナナちゃんの寝息だけが部屋を満たす。

「……味気ないなあ」

白米だけというのもあるだろうが、一人で食べるご飯はこんなにも美味しくないものだったのか。

父さんがまだ元気だった頃はそんな事は感じなかった。

父さんが倒れてからはそんな事を感じる余裕は無かった。

新城君たちと暮らすようになってからは、いつも誰かが居たので気にも留めなかった。

だけどころして、一人でご飯を食べるのはつまらなかつた。箸も進まないので続きは明日にしようかと考えて炊飯器の蓋を閉めようとした時に、ベランダの窓がノックされた。こんな時間に誰かが来たらしい。普通に考えれば警備員を呼ぶべきなのだろうが、不思議とボクは外にいるのは誰なのか分かってしまった。

なのでカーテンを開けると、そこには予想していた通りに新城君の姿があった。

「お帰りなさい」

「ただいま。飯はある？何も食ってないから腹が減ってさ」

「テーブルの上に炊飯器があるんだけど、白米がみつちり詰まってたよ。多分火乃香ちゃんがやったんじゃないかな？」

「いや、多分ナナの方だな。火乃香は食べ物で遊ぶような性格じゃないから……あ？こっちの炊飯器には豚汁が入ってるぞ？」

「なんで炊飯器に豚汁？」

新城君の後ろから覗いてみれば、確かに新城君の開けた方の炊飯器には豚汁が入っていた。それも白米と同じように御釜の淵のギリギリまで。保温が目的で炊飯器に入れたのだろうか？こんなことをするのなら普通に鍋に入れておいて欲しかった。

「まあ良いや。綾辻はどうする？」

「豚汁があるのならボクも貰おうかな？流石に白米だけは辛くてさ」



「白米だけか……」

食器棚から自分のとボクの食器を持って来て改めて席に着く。

「いただきます」

「いただきます」

合掌、そして一礼をして遅い夕食を始める事にした。

さつきまでは味気なかったはずなのに、新城君と向かい合つての食事は不思議と美味しく感じられた。

「ご馳走様……お米多過ぎない？」

「確かにそうだな。どうやってこんな量を炊いたんだ？」

食事を終えたのだが、炊飯器の中の白米はようやく適切量まで減ったくらいに残っていた。新城君がお腹が減ったという理由でいつもよりも多く食べていたのにこれほど残っているのだ。心なしか炊飯器が少し萎んでいるような気がする。

「そういえば、昨日と今日はどうして学園にいなかったの？」

食事の一服をしている時にふと気になったことを聞いてみた。今の時期は選抜戦で、重要な要件でもなければ参加している選手は学園を日を跨いで出るような事は出来なはずだ。理事長に呼び出された事と関係があると言っていたので、少なくとも理事長はそれを了解している。どうして新城君にそれが許されたのか、少し気になったのだ。

「ちよつと特別召集を受けてな。東北の辺りまで行ってたんだよ」

「特別召集って、大丈夫なの!？」

基本的に魔導騎士の見習いであるボクたちには実戦で戦う機会は存在しない。しかし、優秀で実戦に参加させても大丈夫だと判断された者に関しては学園、もしくは国から特別召集という形で実戦に参加させられる事がある。破軍で特別召集を受けた事があるのは東堂さんと貴徳原さんくらいしかいないし、逆を言えば彼女たちクラスの実力がなければ召集されないということでもある。

それをいえば東堂さんを倒した新城君はその条件を満たしている。召集を受けたとしても不思議ではないのだが、実戦に参加したと聞いて慌ててしまう。

「『解放軍』<sup>リベリオン</sup>ですらない、ただ『伐刀者』<sup>ブレイザー</sup>をアンチしてテロつてたチンピラだったからな。擦り傷一つ負ってねえよ。綾辻は俺の強さを知ってるだろ？」

「……新城君の強さは知ってる。だけど不安は不安だし、心配する事には変わらないの」

去年の事と、東堂さんとの試合を見て新城君の強さは理解しているつもりだ。今すぐにプロ入りしても問題ないと言われている東堂さんを圧倒した新城君は学生レベルに

は収まりきらない程に強い。

だけど、それでも人間である事には変わらない。本当に人間かどうか怪しくなるような時が多々あるのだが、それでも死ぬ時にはあつさりとして死んでしまうのが人間なのだ。

それに、好きな人がボロボロになっている姿を見たくない。

「心配、心配ねえ……されたの久しぶりだな。火乃香やロリ夜叉は俺なら大丈夫だってテレビ見ながら送り出してたし」

「それはちよつと冷た過ぎじゃないかな？」

「そういえばこの画像に心当たりあるか？なんか送られてきたんだけど」

「画像？どんな……って!？」

新城君が差し出した携帯の画面にはマイクロピキニを着ているボクが崩れ落ちている写真が映っていた。

「え!?!なんで!?!なんで新城君がそれ持つてるの!?!」

「送られて来たって言ってるだろうが」  
「灯火さあん!!」

下手人はどう考えても一人しかない。どうしてだか、虚空にサムズアップしている灯火さんの姿が浮かび上がり、悦に浸っている笑顔を浮かべていた。何を考えてこんなことをしたのか理解出来ないが、間違いなく面白がっている事だけは確かだ。

「消した方が良いか?」

「消してよお……記憶からも消してよお……」

「ああ……その……なんだ、飲むか?」

「キツイやつ頂戴」

恥ずかしさから何もかも忘れてなくなり、ボクはテーブルの上に崩れ落ちて顔を上げずにお酒を要求した。

「やれやれ、余程ストレスが溜まってたんだな」

自分用に用意しておいた酒を飲みながら、空いている片手で俺に抱きつきながら眠っている綾辻の頭を撫でる。アルコールに弱いくせして度数が高いものを要求したので顔は真っ赤。その上にストレスが溜まっていたのか半泣きになりながら愚痴を吐いて最終的には泣きついた勢いで俺に抱きつき、そのまま眠ってしまったのだ。

良かれと思って彼女を紹介したのだが、逆効果だったかもしれない。

「で、そこのところどうなのよ。姉ちゃん」

「その娘が可愛過ぎたのがいけないのよ」

誰もいなかったはずの空間が一瞬だけ激しく燃え上がり、炎が人の形を作って一人の

少女が現れた。俺の性別が女になったらこういう風になるのではないかと予想出来そうな程に俺と似通った彼女は7年前に病死したはずの漣さざなみ灯火あかり——今は漣を名乗らずに月影さんの名字を借りて月影灯火つきかげあかりを名乗っている。

一つ注意しておくが姉ちゃんは生きているわけじゃない。人間として、社会的にも肉体的にもすっかりと死んでいる。それなのに彼女は今、確かな自我を持ちながらこの場に肉体を持つて存在している。

そのカラクリは、俺の伐刀絶技ノウフルアーツ「フレイムメモリー炎の記憶」。肉体を魔力に変換し、さらに肉体へと再構築する技法を応用して姉ちゃんの身体を魔力で作り出しているのだ。

死者を蘇らせているように見えるかもしれないが俺も姉ちゃんも、これを死者の蘇生だとは認めていない。肉体が俺の魔力で作られている以上、俺が魔力の供給を止めてしまえば姉ちゃんも姿を保てずに消えてしまうから。それに、仮に肉体を作ったとしても魂が入っていないければただの肉袋でしか無い。仏像作って魂入れずという言葉があるように。

ならば、どうして姉ちゃんが姉ちゃんとして自我を持っているのかという疑問が出てくるだろうが、その答えは簡単だ。俺が姉ちゃんの魂を持っていたから。

俺が使っている『固有霊装』——あれは、元々は姉ちゃんの『固有霊装』だから。

一般的に、『伐刀者』の魂が具現化した『固有霊装』は、『伐刀者』が死ねば消えるとされている。しかし、死ぬ間に強い感情が込められた事によつて、『伐刀者』が死んでも『固有霊装』が遺されるというケースが秘密裏に存在している。その『固有霊装』は、『外部霊装』と呼ばれ、表立って出せるようなものではないので基本的には国で回収、管理される事になっている。

俺は姉ちゃんの『固有霊装』であつた『鬼灯』を引き継ぎ、俺の『固有霊装』として使っている。これが、姉ちゃんが『炎の記憶』で自我を持っている理由だ。

ただ、姉ちゃんの個性が強烈すぎて被害が大きいので基本的には『炎の記憶』は使わないのだが、綾辻と話がしたいと懇願されたので使つたのだ。



予想していた通りに綾辻に多大な被害が出てしまったようだが。

「可愛いから虐めるって小学生の理論かよ。享年が10歳だとしても死後7年経ってるんだからもう少し大人になれよな」

「あら、でも不知火だつてあの写真を見て興奮したでしょ？」

「そりゃあしたけどさ。だからと言って泣くほどに追い詰めなくても良いだろうが」  
「確かにやり過ぎた感はあるけど、必要な事だったからね」

姉ちゃんが怪しく笑うと、寝ているはずの綾辻が顔色を悪くして震え出した。どうやら眠っているのに姉ちゃんが良くないことを考えていると察しているようだ。

「でも、久しぶりにシヨツピング出来て楽しかったわ。またお願いするからね」  
「周りへの被害を考えてくれるのならいつでも出してやるよ」

フツツと曖昧に笑うだけで肯定は一切せずに、姉ちゃんは現れた時と同じように炎になり、この場から姿を消した。違うのはさつきまでは感じられなかった「鬼灯」の存在がしかと感じられる事。

しばらくは綾辻のフォローで忙しくなりそうだと思いながら、コップに残っていた酒を一気に飲み干した。

## 癒しの日・5

あの後、起きた綾辻が寝る前のことを覚えていたせいで軽く引きこもりになってたりしたのを慰めながら迎えた休日。俺たちは予定していた通りにプールに向かっていった。寧音も来たがっていたのだが、サボり過ぎて仕事山積みになっていたので理事長に捕まってしまって血涙を流しながら泣く泣く諦めていた。きつと理事長がいなかったら俺はどこかで襲われていただろう。

サンキュー理事長。でも、帰ったら襲われる気がするから安心出来ないけど。

月影さんからもらったプールの招待状は高級を目的にしたらしく、プールの他にも温泉設備やエステやなんかも揃っていた。そのどれもがその道の一流の職人たちを呼んでいるようで、一括りにしなくても別々でやっていけそうな程の物が揃えられている。何を目的にこんな施設を作ったのかは分からないが、その内首が回らなくなって閉店する気がする。

「これで良しつと」

先にプールに入つて火乃香が持つて来ていたビニール製の浮き輪やらボールに空気を入れておく。女性は準備が長いと聞いているが彼女たちにもそれが当てはまるらしくて俺が来てから十分は経っているのにまだ来ていない。周囲を見渡しても休日なのに利用者は疎らで、その中に彼女たちの姿は見えない。

仕方がないので喫煙所に移動してタバコに火をつける。その時にブーメランパンツを装備したプールの監視員がウェイターでも兼任していたのか、飲み物を乗せたトレイを片手にポーキングしながら音もなくやつて来たのでノンアルコールのドリンクを貰うことにする。監視員は一礼すると、来た時と同じように音もなくポーキングしたままこの場から離れていった。その時の移動は無駄を極限まで省いた物だったので、それなりにやれる部類の人間だと分かる。恐らく監視員とウェイターだけでは無く警備員としても雇われているのだろう。

ただポーキング決めながら移動しているので、視界に入れた利用者が驚きと共に二度

見をしているのだけだ。

「あー!!」

「待たせたです」

「やっと来たか」

タバコが吸い終わる頃になって彼女たちはやって来た。ポーリングを決めながら近くに來ていた監視員にグラスを返して喫煙所から離れる。

火乃香は白いワンピース型の水着を、ナナは白いビキニ型の水着で腰にパレオを巻いていた。ナナの身体には作られた事による傷跡があったのだが、保護してから何度か淀爺の治療を受けた事によりアザ一つなく完治していて健康的な身体になっている。しかも破軍学園の制服の上からでも分かるほどにタワワに育った胸がこれでもかと強調されており、ナナの事を視界に入れた男性の利用者が思わず目を惹かれて連れ合いである女性にボディブローを貰って悶絶していた。

気持ちは分かる。男は俺を含めて誰だつて胸に惹かれるのだから。もしもナナの水

着を見て反応しない奴がいるのなら、そいつはホモか不能野郎に違いない。

「どうです？ 似合ってるかです？」

「ああ、似合ってるぞ。お前たちのイメージにぴったりだな」

「うー!!」

水着を強調したいのか火乃香がポーズを決め、ナナがそれを見様見真似でしている姿はとて微笑ましいものだった。し慣れていないからか多少のぎこちなさは見られるが、それが2人には合っていた。

「ところで綾辻はどこだ？ 姿が見えないけど」

「あそこです。あの柱のところに隠れてるです」

火乃香が指差した先にあるのは大きな柱。そしてその下のところに置かれた観葉植物の影から顔を出してこちらを伺っているのは確かに綾辻の姿だった。顔が赤いところを見ると恥ずかしいのだろうか？ いつもならば放っておいて彼女が慣れるまで待つのだが、今日ここに来たのは綾辻の休息の為なのだ。主役を放っておくなんてありえな

い。

なので綾辻が俺が見ている事に気がついて観葉植物の影に顔が隠れ、視界から外れた隙に縮地で綾辻の背後に回る。その時に気配で察知されないように周囲の気配に俺の気配を混ぜ込ませる事を忘れない。

「あーやーつーじーちゃん!!」

「うひよわ!」

耳元で名前を呼びながら肩を叩けば、余程驚いたのか綾辻は良く分からない声をあげながら飛び上がった。

「お、お、驚かさないでよ!」

「折角遊びに来たのに主役が隠れてるのがいけない。よつて俺は悪くない」

「うっ!?! た、確かに隠れてたボクが悪いのは認めるよ? だけどそんないきなり後ろに現れなくたって!!」

怒っていますと表そうと腕を忙しなく動かしているが、本気で怒っているようには見えないのでとても微笑ましいものにしが見えない。

綾辻の水着はそのままスポーツジムでも使えそうなスポーティーなデザインのセパレート。布面積が多めではあるが、幼い頃から剣術を続けているので均整のとれた体型と相まって、綾辻にはとても良く似合っていた。

そして何より胸があつた。流石にナナには負けるものの、女性の平均値と比べれば大きい部類に入る。学園の時では服の上からで目視での判断は難しかったが、重心の移動なんかでそれなりのサイズはあると確信していたが、やはり大きかった。

その姿を見て俺の中の男の部分が反応し、寧音によって性癖が歪められていないのを確信して思わず安堵する。あれだけ真っ直ぐな好意を向けている寧音の事は嫌ってはいないが、やはり我が儘ボディの方が好ましいのだ。おっぱい万歳。くびれ万歳。お尻万歳。

「へいへい、俺が悪かったよ。だから行くぞ。早くしないと痺れを切らした2人が暴れ



始めるぞ」

「っ!!」

利用者が少ないのでスペースはあるのだが、それでも2人が暴れるように遊び出せば被害が出るのは目に見えている。なので文句を言う綾辻の手を掴み、強引に俺が膨らませたビニールの浮き輪やボールを見ている2人のところに向かう事にした。

「ああ、それとだな。その水着、良く似合ってるぞ」

「うう……こゝ、このタイミングで言うのは卑怯だよお……」

俺からすれば似合っているから似合っていると褒めただけなのだが恥ずかしかったのか綾辻は耳を赤くしながら顔を俯かせてしまった。

俺はそんな綾辻の姿を見ながら笑い、プールサイドで遊び出そうとしている2人の元に向かう事にした。

## 狂犬再会

「あー遊んだ遊んだ。久しぶりにマトモなプールで泳いだ気がする」

「10分以上も潜水してるのが泳ぐって言うのかな？」

プールで遊び倒して、施設から出た時には夕方になっていた。今の時間で学園まで戻れば遅い時間になってしまうのは簡単に予想出来た。それにナナの腹が空腹を訴えて鳴いていたので近くにあったファミレスに入る事にする。休日で、しかも夕方となれば客は大勢入っていたのだがどうにかテーブル席を確保する事が出来た。

「ご注文お決まりですか？」

「ドリンバーが四つと、メニューの食べ物系を上から下まで全部2つずつ」

「ドリンバーが四つとメニューの食べ物系が全て2つずつですね？……厨房が死んでしまうので加減して頂けないでしょうか？」

「却下で。他に何か頼むのあるか？」

「じゃあボクは鮭の定食」

「私はハンバーグ定食でお願いするです」

「うう……!!」

「ナナ、落ち着け。頼んだから時期に来るよ……ああ、早いものから持ってきて。じゃな  
いとこいつが最悪暴れ出すから」

「畏まりました。恨みます」

ウェイトレスの背後を見送って数秒後に厨房の方から断末魔のような悲鳴が聞こえたのだが、あれは嬉しさから来るものだと思いたい。淀爺の治療により健康体になったナナだが、燃費の悪さだけはどうしようも無かった。と、言うよりもこれは治療でどうにかなる様な物ではないらしい。

ナナの肉体は複数の人間を混ぜ合わせて作られているので性能は頗る高いのだが、その代償として燃費がどうしても悪くなってしまふとの事だった。性能を下げれば燃費も良くなるらしいのだが、そうしてしまえば万が一の時……リベリオン“解放軍”に襲われた時に自衛が難しくなってしまう。それならば食費は必要経費だと割り切った方がいい。

火乃香がドリリンバーで定番であるジュースのブレンドを作り始め、ナナもそれを見て真似をし出す。本当ならば行儀が悪いと怒らなければならぬのだが、火乃香が年相応の行動をしているのは俺としても喜ばしい事なので放置しておく事にする。

だけど自己責任だ。例えばゲテモノが出来上がったとしても、俺は手を出さないけど。

「ねえねえ、火乃香ちゃんがジョッキを使い始めてるけど大丈夫なのかな？あ、コーヒーで良かった？」

「サンキュー。どんな物が出来上がったっても自己責任だからノータッチで」

「助けた方がいい気がするけどなあ……あ、スープに手を伸ばし始めた」

これ以上見続けると食欲が無くなりそうなので目を逸らし、デジカメを取り出して操作する。

中に入っているのは今日のプールで遊んでいる光景。火乃香とナナがボールを使つてダイナミックバレーボールをしているところや、綾辻が流れるプールを浮き輪に乗りながら漂っているところ、そして俺と綾辻がカップル扱いされて乗せられたウォーター

スライダーの写真などが入っている。

写真を見ながら、やはり揺れる胸は素晴らしいものだと思つて改めて認識する。

「今日のプールで撮つてた写真？意外だね。新城君は写真とか興味無いと思つてたけど」

「楽しかった思い出つてのは忘れないんだけどさ、どうしてもまだ見える形で残しておきたかつたんだよ。親が写真嫌い……つて言うよりも興味が無かつたせいでアルバムとか無いからな」

オヤジの方だけではなくて漣の方も写真には興味が無かつたらしく、リベリオン“解放軍”に襲撃された漣の実家にも写真は一枚も残つていなかったのだ。幸いな事にオヤジの顔も、実親の顔も両方とも分かつてるので大丈夫なのだが、やっぱり目に見える形に残しておきたいと思つて何かあるとこうして写真に撮る様になっているのだ。

そのおかげでウォータースライダーに乗った時に俺が後ろから抱き締める様に密着した事で顔が真っ赤になっている綾辻の姿もしっかりと残っている。

一枚ずつ写真を確認し、手振れが酷い物や全く関係ない物を削除して整理する。問題を起こした利用者がポージングを決めたままの監視員に連行されている写真は消そうか迷ったが、面白かったので残しておく事にした。

そして写真のデータを携帯に移し、寧音にメールで一件ずつ送りつける。数秒後には解読出来ない言語で書かれたメールが返って来るのですかさず削除する。

「ししよーししよー、見やがれです。火乃香ブレンドジュースの完成です」

「あー!!あー!!」

「ナナちゃんのは兎も角、火乃香ちゃんの禍々し過ぎやしない!?!」

ナナの持ってきたブレンドジュースは成功したのか綺麗な見た目をしている。しかし火乃香のブレンドジュースはどういう調査をすればそうなるのか分からないが、何故だか玉虫色になりながら光を放っている上に刺激臭がこちらにまで漂っている。しかもそのブレンドジュースがジョッキ二つ分ある。

「俺は飲まんぞ?」

「やらねえです。これは二つとも私の分です」

「火乃香ちゃん、悪い事は言わないからそれ捨てた方がいいよ!!」

「止めないで下さい。これは私がやった事だから自己責任なんです……!!」

「あー……う?」

「ナナは気にしなくていいから、それを飲んでなさい」

「うー!!」

渡したストローを使って成功したブレンドジュースを美味しそうに飲んでいるナナの姿に癒されながら、冒流的な色合いをしたブレンドジュースに向かい合っている火乃香を見る。ジョッキに口を付けようとしているが、臭いがキツイのか顔をしかめてジョッキを離すと言う行動を何度も繰り返している。綾辻は止めようとしているのだがどうして良いのか分からずにアタフタしていた。

それでも自分が飲むと言い出さない辺り、綾辻もあの冒流的なブレンドジュースは飲みたくないらしい。

「ふうーいぎ……!!」

覚悟を決めたのか、火乃香が真剣な表情になりながらジヨツキに口を付けるーーその瞬間、

「ああ？もしかして不知火か？」

聞き覚えのあるざらついた声で俺の名前が呼ばれた。



## 狂犬再会・2

「ん?……ああ、蔵人か。珍しいな、こんなところで」

「珍しいってどういう意味だ」

「いや、だつて、ねえ?見た目も中身もヤンキーな蔵人がファミレスにいるって想像しただけでクツソ笑えるんだよ。てか笑いたいから笑つて良い?」

「ブチ殺すぞキチガイ野郎……!!」

俺の名前を呼んだのはサングラス越しに獰猛な三白眼をギラつかせている長身の男だった。散髪した髪に臍脂色の上着を着崩し、胸元には傷跡で斜めに割られた啜う髑髏の刺青が施されている。どこからどう見てもヤンキー、もしくは傾奇者と言った風体の彼は倉敷蔵人<sup>くらつきくらじん</sup>。貪狼学園に通う俺の友人である。

「で、なんで蔵人はこんなところにいるんだ?ポツチ飯か?寂しい奴だな……」

「ガチで憐れみの籠った目を向けるのは止めろや、その目え潰すぞ……!!あつこにいる

「ダチと飯食いに来たんだよ」

「男オンリー?」

「……男オンリー」

「……おホモだち」

「ぶち殺すぞテメエ……!!なんでオレには男しか寄って来ねえんだよ……!!見た目は悪くないだろうが!!オレだつて大和撫子タイプの奴といい関係になりたいのによお……!!」

「いやあ、両手と口に花束でゴメンね?俺、モテるから」

「不知火イツ!!……つて、ああ?絢瀬かお前?」

蔵人の視線の先にいたのは綾辻なのだがどうも様子がおかしい。さっきまでは火乃香の作った冒流的なブレンドジュースに対して一緒に戦々恐々していたのだが、蔵人が来てからは何かに耐える様に顔を俯かせている。

「最近見ねえと思つていたら不知火とつるんでいやがったのか……成る程、よつぽどオレからあの場所を取り返したいみたいだな」

「……大切な場所を取り返したいって思うのはいけない事なのかな?」

「いいや、オレとしちやあ歓迎するぜ？強い剣客と戦えるのはオレにとつて喜ばしい事だからな」

「あく悪いけど、そこまでにして貰えるか？飯が来たし」

綾辻と蔵人が今にも「固有<sup>デバイス</sup>霊装」を展開しそうな程にギスギスとした空気を漂わせている最中にウエイトレスが頼んでいた料理を両手に持つてやつて来た。このまま2人に話させているとナナが食事でありつけず、最悪<sup>ミッド</sup>辺り一帯が更地になりかねないので空気を読んでいないと言われるかもしれないが止めることにした。

「話の続きがしたいのなら食い終わってからにしてくれ。もしくはこの火乃香スペシャルブレンドジュースを飲んでからにしな……!!」

「誰がそんなゲテモノ飲むかよ!!てか作り出した本人ダウンしてるじゃねえか!!」

蔵人に指摘されて見てみれば、確かに火乃香は空になったジョッキを持ったまま白目を剥いてテーブルに突っ伏していた。一応漣として育てているので多少なりとも毒物には耐性はあるはずなのだが、どうやらブレンドジュースはその耐性を貫通して火乃香をダウンさせた様だ。一体どんな調合をすればドリッパーにある飲み物でこれだけの

威力を叩き出す事が出来るのだろうか？

「安心しろ、オレたちはもう食い終わってるからこのまま帰るだけだ。じゃあな絢瀬ちゃん、いつでも待つてるぜ？」

そう言い残して蔵人はご機嫌に手を振りながらこの場から立ち去って行った。しかし、それでも綾辻の表情は晴れていない。

「色々と言いたい事や聞きたい事はあるかもしれない。だけど、それよりも先に飯だ。ナナ、火乃香を起こしてくれ」

「あー!!」

「へブツ!?……ハツ!?マリッジブルーは赤く染まっていますか!?!」

ダウンから帰って来た火乃香の前に残っているブレンドジュースを置いてやると、無表情だった顔を一瞬で青くさせた。

いつもならばここで綾辻が何かしらのツツコミを入れるのだが、彼女は悔しそうに歯

を食いしぼりながら服の裾を握り締めているだけだった。

ファミレスでの食事を終え、ブレンドジュースを飲んでダウンした火乃香をナナに連れて帰らせて俺は綾辻を連れて近くの公園に来ていた。時間が経ったので多少は緩和されているのだが、それでもまだ綾辻の顔は強張ったまま。目には静かな怒りを燃やしていた。

「顔が怖いぞ」

「わかってる。けど、どうしても我慢出来なくて……」

ベンチに座り、途中で買っていた缶ジュースを手渡すが、綾辻は開ける事もせず手

に持ったままでいる。そんな綾辻を尻目に俺はタバコに火を点ける。

「ふう……で、綾辻が言っていた道場破りつてのは蔵人の事で良かったんだよな？」

「うん……2年前、突然来たあいつに。初めは父さんは断ってただけど、そうしたら門下生たちを襲って来て……それで、相手をする事を決めただけど……」

「負けて、今じゃ病院で寝たきりだと」

「……」

首を縦に振る事で肯定されたのだが、綾辻はその時の事を思い出しているのか、はたまた病院で眠っている父親の事を思っているのか、顔は暗かった。

「事情は知ってたからどうも言わない。だけど、一つだけ聞かせろ……お前はどうかしたんだ？」

「……変わらない。ボクは『綾辻一刀流』であいつを倒して、道場を取り戻したい。取り戻して、父さんの帰りを待ちたいんだ」

そう言い切った綾辻に迷いは無かった。

蔵人の実力は友人である俺がよく知っている。あいつが言うには去年の「七星剣武祭」では東堂に負けてベスト4だったとか。負けず嫌いのあいつのことだから、少なくとも去年よりも強くなっている事は確かだ。綾辻もその事は理解しているに違いない。

だと言うのに、彼女はそれを踏まえて諦めていなかった。挫折するのには十分な理由になると言うのに泣き叫ぶような無様を見せず、必ず成し遂げてやると意気込んでいる。

「……ああ、いい女だなあ……」

その姿がとても眩しくて、その姿があまりにも美しく、俺はしばし綾辻に見惚れてしまっていた。

「だけど今の綾辻の実力じゃあ、蔵人に傷一つ負わせることは出来ない。それは理解していると思うが、どうするつもりだ？」

「うん、それは分かっている。だから、新城君。鍛錬のレベルを上げて欲しい」

「まあ、それしかないわな」

今のままでは綾辻は蔵人に勝てない。だったら今から蔵人よりも強くなればいい。それを成すために綾辻は、俺が敢えて下げていたレベルを上げて欲しいと懇願して来た。

「死ぬかもしれないし、選抜戦に支障が出るかもしれない。それでも良いのか?」

「死なないし、支障も出さない。出来るか出来ないかじゃなくてやるんでしょ?」

「そうだな」

心底拒絶しているのならば、途中で投げ出しても俺からは何も言わない。勝手に期待して、ここまできたのかと勝手に失望するだけだ。

でも、やってやると、成し遂げてやると意気込んで前に進もうとしているのなら、俺はその背中を押してやるだけだ。

「それじゃ、破軍に帰ってから只管に模擬戦だ。今までは気絶したら休憩だったけど休



「んでる間も惜しい。空いている時間は全部注ぎ込むぞ」  
「よろしくお願いします!!」

ベンチから立ち上がって頭を下げる綾辻の姿を一瞥しながら、頭の中では綾辻にどの程度で相手をするのかを考えていた。

## 狂犬再会・3

「すう……ふう……」

近くにあつた火にタバコを近づけ、それを火種として一服する。片手には鞘から抜いている「鬼灯」を持って肩に担ぎ、その姿は休憩中だと捉えられてもおかしくない程にリラックスしている。

しかし、今は休憩などでは無い。

そもそも休憩という概念自体が今の時間に存在していない。

「oooooooo!!」

声も出さずに死角から剣閃が走る。極限状態だろうというのに振るわれたそれに一切の歪みは無く、このまま走れば目的通りに俺の首を断つ事が出来るほどの冴えを見せ

ている。

死角から放たれた不意打ちであるが、それは不意打ちとして成立していなかった。

「緩い——まだまだだぞつと!!」

「ア、が……ッ!!」

死角から放たれた剣閃を視界に納めることなく、気配だけで知覚して振り向く事なく体捌きだけで受け流し、振り返りざまに襲つて来た綾辻の腹に拳撃を見舞う。固く握り締められた拳の一撃は殺すつもりは無いものの加減無しの一撃。綾辻の鍛え上げられたしなやかな腹筋を貫いて中身の胃腸を容易く弾けさせる。

胃酸混じりの血反吐を吐く綾辻。本当ならばその場でのたうち回って悶え苦しみたいのだろうがそうすることはせずに全力でその場から飛び退き、追撃の脚撃を間一髪のところまで躲すことに成功した。

綾辻の姿は見るも無惨な物だった。全身には裂傷やアザだらけで見えている所にも

見えていない所にも無事な場所など一つ足りとて存在していない。肉体を支えるはずの骨格は良くてヒビが入り、悪くて粉砕骨折をしていて身動き一つするだけで激痛に苦しむ事になるだろう。

綾辻をこんな状態にしたのは、他ならぬ俺だ。綾辻の懇願を聞き届けて、やっていることはひたすらな模擬戦とこれまでとは変わらない。ただ、そのレベルを引き上げたのだ。

今までの模擬戦は加減に加減を重ねて綾辻のレベルよりも僅かに上の程度にまで抑えて、“新城不知火”として新城流の戦い方で相手をしていた。これは急激な躍進は望めないものの、綾辻の事を壊す事なく鍛える事が出来ると考えての判断だった。しかし、綾辻はそれでは足りないと言ったのだ。故に綾辻が壊れる可能性があるものの急激な躍進が望める鍛え方をする事にした。

すなわち——綾辻がどう足掻こうと届かないレベルで、“漣不知火”として漣の戦い方で相手をする事。それも、前のシヨツピングモールの際にヴォルド相手に作り上げた炎の異界の中で。

模擬戦を行ってからまだ30分しか経っていないのだが、綾辻は今にも死にそうなの……いや、半ば死にかけている状態に成り果てていた。『プレイヤー』であつても活動どころか存在する事が困難な業火の世界の中に綾辻を放り込み、その中で漣としての俺とひたすら模擬戦を行う。

寧音でさえ、この業火の世界で漣の俺と戦う事は嫌がつていた。

どれだけ酷い事をしているのかという自覚は当然のようにある。綾辻の身体を傷付け、心を粉碎し、死に追いやる事への罪悪感は何論存在している。

だけど、俺は手を止めない。

酷い事をしていてという自覚と罪悪感から手を抜く事は、大切な場所を取り返そうと文字通りに必死になっている彼女に対する侮辱に他ならないから。

心を痛めながら、こんな事をしていて自分に嫌気が差しながら——無謀な突貫をし

て来た綾辻の胴体を斬り裂き、顔面に拳撃を見舞う。頭蓋骨が軋む感触を拳に味合わせながら、綾辻は鼻血を撒き散らしながら吹っ飛んでいった。

「練りが足りねえ磨きが甘い。死ぬ気でやるなんぞ生つちよろい考えは捨てる。見上げるしか出来ない高みなんぞ見るんじやねえ。自分しか極められない奥だけを見つめろーそれが出来てようやくだ。それが出来なければ話にならない。さっさとやって、スタートラインに立って魅せろよ」

「アアアアアアアアアアアア!!!」

業火の余波に当てられた事で撒き散らした鼻水の水分は一瞬で蒸発する。しかし綾辻はそれに構う事なく、砕けた五指で「固有<sup>デ</sup>霊装<sup>バイ</sup>」である「緋爪」を握り締め、獣のような叫びをあげながら突貫して来た。

模擬戦を始めてから5時間が経った事を確認して異界を解いて外の世界にへと出る。時刻は深夜で、後数時間もあれば日の出の時間となる頃合いだ。鍛錬の時間を詰め込むと言ったのだが、だからと言って睡眠時間を取らない訳にはいかない。授業と選抜戦と、鍛錬以外にもやる事は山積みなのだから。

「おーい綾辻ー、生きてるかー?」

「……」

「返事は無し、脈は有りつと……まあ、初日にスタートラインに立てただけ上等だな」

“鬼灯”をしまいながら綾辻の状態を確認し、完全に気絶しているだけだと判断する。異界の中で見るも無惨な姿になっていた綾辻だが、今ではアザところか服すら無傷の状態になっている。ヴォルドや東堂を相手にした時と同じ“魔力変換”で綾辻の身体や服を再構築したからだ。流石に加減無しでやると決めたが、治療手段も無しにこん

な事はやらない。

綾辻には強さの根幹となる物が存在していなかった。東堂の様な他者へ向ける優しさや、一輝の様な貫き通す意志力と言えば分かりやすいだろう。綾辻にはそれが欠けていた。大切な場所を取り返したいという願いは素晴らしいと思うのだが、言ってしまうばそれはそれだけで終わってしまうのだ。

爆発力があっても持続性が無ければ意味が無い。大切な場所を取り返したとしても、そこで燃え尽きて終わってほしくないから、綾辻を何度も煽る事で彼らの様な強さの根幹となる様な物を見つけさせようとしていたのだ。その甲斐あって見事に綾辻は強さの根幹となる様な物を見つけた事が出来た。今の段階では付け焼き刃に等しい取っ付けた様な理由でしかないかもしれない。だが例えそうだとしても時間を重ねれば、想いを強くすれば、それが本当の理由になる。それが、綾辻を支えてくれる力となる。

「良く頑張ったな」

気絶している綾辻には届かないと分かっている。だけど、たった数時間で俺の欲求に



応えてくれた綾辻に対してどうしても賞賛を送りたかった。2日3日は掛かると考えていたのだが、良い意味で予想を裏切られたのだからこれくらいはして当然の事だ。

気絶しているから直ぐには起きないとは思うが、それでも細心の注意を払いながら綾辻を横抱きに抱え、硬い地面では無くて柔らかなベッドで寝かせるために俺は部屋に戻る事にした。

## 狂犬再会・4

『それでは!!これより第五訓練場第一試合を開始致します!!』

スピーカーから聞こえる威勢の良い声と共に観客席に座る生徒たちから歓声が上が  
る。『七星剣武祭』の代表を決める為に行われる代表戦も今日で10回戦目。自身を  
過大評価した者や軽い気持ちで代表戦に参加する事を決めた者たちはすでに振るい落  
とされ、一部の例外を除いて残るのは七星の頂を目指す者だけになっていた。

『解説は西京寧音先生に担当していただく予定だったので……』

『ん?どうしてウチをそんな目で見るんだ?』

『いえ、だって、これまでつまらないとか言って居なくなってたじゃないですか。それな  
のに今日に限って居るなんて……』

『そりゃあいるよ。なんて言ったって、不知火が目をかけてる奴の試合なんだからな』

不知火と、その名前が出てきた瞬間に上がっていた歓声が静かになる。この破軍学園において、新城不知火の名前は一種のタブーに成りつつあった。

破軍学園序列第1位の東堂刀華を相手にして過程は兎も角、結果だけを見るならば蹂躪に近い形で一方的に下した絶対強者。今年入学した一年生はその姿に怯え、去年彼が起こした暴力事件を知る二、三年生たちはその時の彼に恐怖している。

『目をかけてるのですか……それはなんと言いますか……』

『なんでもそいつは自分から頭を下げて頼んだらしいぜ？今時珍しいガッツのある奴だよな……つまんねえ試合したら黒天球ぶち込んでやるけど』

『なにやら恐ろしい事を口走ってた気もしますが、選手の紹介に移りましょう!! そうしまししょう!!』

月夜見が露骨に話題を変えようとしていたが、誰もが不知火の事を忘れたかったのかそれに乗じて歓声をあげた事によりそれは達成された。寧音は若干不満げにしているがそれだけでそれ以上追求するような事はしない。不知火が目をつけたという彼女の實力を知りたかったから。

そして月夜見の言葉に従う様にして第1試合の選手が入場し、リングに上がる。青コーナーから姿を現したのはタンクトップ姿の筋肉隆々な男子生徒。一見すればボディビルダーの様に思えるが、武の心得がある者が見ればそれは実戦用に鍛えられた筋肉だとわかる。

『青コーナーから姿を見せたのは9戦9勝のパーフェクトゲームを続ける三年生の石神剛選手です!!』

『へえ、見せ筋だと思ったら意外とマトモな筋肉じゃねえか』

『彼は石を操る<sup>ブレイザー</sup>伐刀者<sup>ブレイザー</sup>で、防御力に関しては学園トップクラス!!これまでの試合全てを無傷で勝利しています!!』

ノソノソと重量感を感じる動きをしながらリングに立つ石神の姿に観客席から声援が送られる。が、石神はそれに応えない。まるで聞こえていない様な素振りで向かいの赤コーナーから姿を現した黒い髪を靡かせる女子生徒――綾辻絢瀬を待ち構えていた。

『赤コーナーから登場したのは石神選手と同じく9戦9勝の戦績の三年生綾辻絢瀬選手です!!彼女はこれまで“プレイヤー伐刀者”の異能は用いずに純粋な剣技のみで勝ち進んで来ました!!西京先生、この試合をどう見ますか?』

『切れるか切れないかってところ』

『説明を端折り過ぎて全く理解出来ませんけどそこは置いておきましょう!!』

はじめに言っていた通りに寧音は試合の解説には然程興味は持っていないのだろう。一部の人間だけにしか分からない様な事を言い、月夜見はこれ以上尋ねても無駄だと悟って話を切り上げる事にした。

「ねえイツキ、切れるか切れないかってどういう事なの?」

観客席から寧音の言葉を聞いていたステラが隣に座る一輝に尋ねる。珠雫は同時刻に別の訓練場で試合があり、アリスはその応援に向かっているのでこの場には2人しかない。

「石神先輩はさつき説明にあつた様に石を操る“プレイヤー伐刀者”なんだ。魔力を石に変換する

ことも出来るし、初めから存在している石も魔力を通す事で操ることが出来る。石を全身に纏う「がんくつおう巖窟王」というノウブルアーツ伐刀絶技がそのまま彼の二つ名になつてゐる。その防御力は凄くつて、前にステラが戦つた碎城先輩クラスの攻撃力が無いと突破出来ないって言われてるんだ」

一輝にそう説明されてステラは月夜見が石神のことを学園トップクラスの防御力と称した事と、寧音が切れるか切れないかと言つたことの真意を悟つた。

要するにこの試合は絢瀬が石神の防御力を超えられるかどうかの戦いなのだ。

前に絢瀬と会つた時に、ステラは彼女の事を騎士として自分には及ばない存在だと認知していた。純粹に剣術勝負をすれば話は変わるだろうが、「ブレイヤーズ伐刀者」として戦うのなら武術に魔力、異能などの様々な要素が追加されて戦う事になる。客観的に、冷静に、そういう要素を加味して下した評価は間違つていない。しかし、あれから時間が経つてゐる。刀華を一方的に蹂躪した不知火に師事しているのなら、その時間で劇的に変化してもおかしく無い。

そう意識した瞬間に、ステラはステージに立つ2人の一挙一動を見逃さぬ様に集中する。突然テロリストの「フレイザー伐刀者」と相対した時に敵の能力を知り得ない、だからどんな能力を持つていようと戦える様にしておかなければならないと碎城に語っていたステラだが、だからと言つて情報の重要性を否定するわけでは無い。勝つ為に相手を研究する事も強さの一つだと、一輝から教えられているから。

審判役の教員に指示されて、ステージに立つ絢瀬と石神は「デバイス固有霊装」を展開する。石神の「デバイス固有霊装」は大剣だった。そのサイズと石神の巨体とが合わさり、近くにいる絢瀬が小さく見えてしまう。対する絢瀬の「デバイス固有霊装」は鮮やかな緋色の日本刀。

しかし、一輝には一つ気になる事があった。それは絢瀬の挙動。ステージに上がった時から絢瀬は顔を俯かせていてその表情を伺う事が出来ない。その上、身体が不規則にユラユラと揺れていた。不知火との修行の疲れが出ているのかと怪しんだが、それを即座に否定する。我が道を全速力で駆け抜けている不知火であるが、他者に対する気遣いは出来る人間だ。絢瀬の代表戦の予定も把握していて、疲れを残さない程度に抑えているはずだと考える。

「LET'S GO AHEAD  
試合開始——!!」

何があつたのかを考えている間にブザーと共に試合が始まつた。それと同時に石神の足元の石が液体の様に蠢きながら彼の身体を這い上がっていた。あれが石神の二つ名になつた伐刀絶技ノックアウト「巖窟王」。完成すれば敵の攻撃を受け付けられない鎧となり、同時に敵を砕く矛となる。一輝の眼では、絢瀬はまだあの「巖窟王」を超えられないと見ていた。

ステラならば、強靱な臂力に任せて打ち砕く事が出来るだろう。珠雫ならば、水を使って相手を窒息させる事が出来る。一輝ならば「巖窟王」ごと石神のことを斬り伏せる事が出来るし、不知火ならばそもそもあの程度の防御など無意味だ。

一体どんな方法で超えるのだろうかと期待していると——絢瀬の姿がブレ、石神の背後に現れた。石神も絢瀬が動くことを予想していたのか、咄嗟に大剣を楯の様に使う事で致命傷を防いだが、防げてない箇所には浅い裂傷が付けられている。

石神が「巖窟王」を発動しきる前に決着をつけようとしていたのか。その選択肢は



間違っていないのだが、失敗してしまった様で石神は完全に石に飲み込まれて2メートルを超える石の巨人になった。

さて、ここからどうやって戦うのか。そう思っていると絢瀬がここでようやく顔を上げた。そして同時に、一輝は絢瀬の挙動がおかしかった理由に気が付いた。

見える様になった絢瀬の顔は赤く、目は焦点が合っていない様に蕩けていた。その姿をどこかで見た事があり、完全に一致していたのですぐに気づく事が出来たのだ。

「まさか……酔っ払ってる?」

そう、  
絢瀬は酔っ払っていたのだ。